「講談社　青い鳥文庫」刊行のことば

太陽と水と土のめぐみをうけて、葉をしげらせ、花をさかせ、実をむすんでいる森。小鳥や、けものや、こん虫たちが、春・夏・秋・冬の生活のリズムに合わせてくらしている森。森には、かぎりない自然の力と、いのちのかがやきがあります。

本の世界も森と同じです。そこには、人間の理想や知恵、夢や楽しさがいっぱいつまっています。

本の森をおとずれると、チルチルとミチルが「青い鳥」を追い求めた旅で、さまざまな体験を得たように、みなさんも思いがけないすばらしい世界にめぐりあえて、心をゆたかにするにちがいありません。

「講談社　青い鳥文庫」は、七十年の歴史を持つ講談社が、一人でも多くの人のために、すぐれた作品をよりすぐり、安い定価でおおくりする本の森です。その一さつ一さつが、みなさんにとって、青い鳥であることをいのって出版していきます。この森が美しいみどりの葉をしげらせ、あざやかな花を開き、明日をになうみなさんの心のふるさととして、大きく育つよう、応援を願っています。

昭和五十五年十一月

講談社

講談社 青い鳥文庫　21-8

ムーミン谷の十一月

トーベ＝ヤンソン

鈴木徹郎 訳

1984年10月10日　第1刷発行
2005年7月10日　第26刷発行

(定価はカバーに表示してあります。)

発行者　野間佐和子

発行所　株式会社講談社

東京都文京区音羽2－12－21　郵便番号112－8001

電話　出版部　(03)5395-3536
販売部　(03)5395-3625
業務部　(03)5395-3615

N.D.C. 993　286p　18cm

装　丁　久住和代

印　刷　図書印刷株式会社

製　本　図書印刷株式会社

ISBN4-06-147050-7

(落丁本・乱丁本は，購入書店名を明記のうえ，講談社業務部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえします。)

■この本についてのお問い合わせは，講談社児童局「青い鳥文庫」係にご連絡ください。

＊著者紹介

トーベ＝ヤンソン

1914年，フィンランドの首都，ヘルシンキに生まれる。ストックホルムとパリで絵を学ぶ。1948年に出版した「たのしいムーミン一家」が世界じゅうで大評判となり，以降「ムーミンパパの思い出」「ムーミン谷の冬」「ムーミン谷の夏まつり」など，一連の傑作を書いた。2001年6月没。

＊訳者紹介

鈴木徹郎（すずき てつろう）

長野県に生まれる。コペンハーゲン大学大学院で北欧文学を専攻。「ハンス＝ペテルソン名作集」(第十七回サンケイ児童出版文化賞受賞)，「アンデルセン自伝」「真夜中の暴走」などの訳書のほかに，創作童話「鈴っ子」ほかの著書がある。1990年没。

れぞれが「わが道」を生きていくだけで作り上げられていくところが、なんともいえません。
つまり、ヤンソンさんは、生身の人間が現実世界をより人間的な世界に近づけていけるような楽しい道を、ムーミン童話で示しているといえましょう。ヤンソンさんが、「現代の神話の創造者」と呼ばれ、多くの人々に評価されているのも当然のように思えてなりません。同時に、そこにヤンソンさんの大きくて深い愛を感じないわけにいきません。彼女の、この「愛」を何と名づければいいのでしょう? アガペーでもありません。博愛・人間愛・人類愛などというおこがましさもありません。ナルシシズムに陥っていない自己愛、もしくは生命愛とか呼ぶのがふさわしいような気がします。

（一九八四・八・二九）

機もあります。私たちが生きている生々しい現実世界と共通することがたくさんあるのです。それにもかかわらず、ムーミン谷には、どんな強烈な個性の持ち主であっても、だれもが、自分らしく、自由に生きられる世界があります。みんなは、そこに心を引き寄せられたのにちがいありません。

ところで、このような世界とは、人間社会でいえば、老若男女の別なく、そして、身体的ハンディの有無を問わず、つまり、だれもが、負い目を感ずる必要もなく、自分らしく生きていける社会ということでありましょう。およそ、文化国家とか近代社会というものがあるとすれば、このような社会、ないしは、それを目指している社会のことだと思います。いや、そうではなく、経済・科学・技術の進歩した社会のことだという人がいるかもしれません。しかし、ほんとうのところ、経済・科学・技術は、このような社会を進歩させるための手段にしかすぎないものでしょう。

人間社会に忍びよる不安を直視し、生きとし生けるものの生命への感動を深めつつ、自他共に愛さずにはいられないというヤンソンさんの人柄が、このような社会をムーミン谷に生み出しました(『ムーミン谷の彗星』『ムーミン谷の冬』の解説参照)。いや、ムーミンたちが生み出したといってもいいでしょう。彼らが魔法や英雄の力を借りずにやりとげたことがすばらしい。意気に燃えた善意や同情や正義感や奉仕精神や義侠心で作り上げたのではないところがまたよい。そ

解説…ムーミン童話の六つめのなぞ

高橋静男
（フィンランド文学研究家）

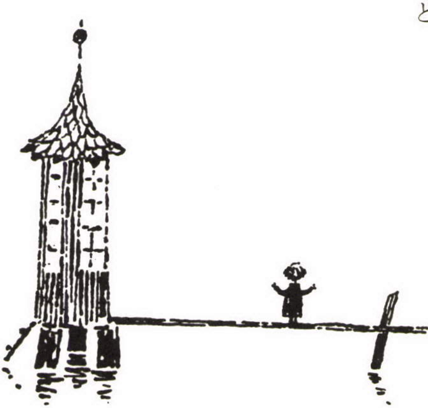
本書では、登場人物のみんなが、人間ならだれしも抱きそうな悩みごとができて、一目散にムーミン谷へ向かって出発します。ムーミンたちに会えさえすれば解決すると思いこんでいるのです。しかし、ムーミン谷にムーミンたちの姿はない。みんなは、ムーミンたちが帰ってくるのを心待ちにして、ムーミン屋敷で共同生活にはいります。そして、ムーミンたちが帰ってくる前に、共同生活を通して、悩みの解決の糸口を見つけていくのです。（心の悩みを解決していく作者の手法の魅力については、『ムーミン谷の仲間たち』で触れました。）

それにしても、なぜ、みんなは、ムーミン谷へ向かったのでしょうか。

作品によれば、その理由は、ムーミン谷は、いちばんやりたいことができ、やさしい、いい人たちがいて、幸せがいっぱいあり、人々がいきいきしていて、懐かしさのあまり会いにいかずにいられない場所だから、ということになっています。

たしかに、そうです。しかし、それだけでしょうか。ムーミン谷は、けっして、ユートピアでもないし、おとぎの国でもありません。欲望がうずまき、けんかも悩みもあり、生命を脅かす危

橋にいって、ヨットのもやいづなをうけとるのに、ちょうどまにあうくらいの時間は、まだ、たっぷりありました。



＊この物語でホムサが読む本に登場するさまざまの虫は、原作では学名がそのまま使われています。これを日本語訳では、原語の語感のおもしろみを生かすために、造語を用いてみました。そこで、つぎに、原語を学名どおりに訳してしるしておきます。
「電波虫」＝学名は放散虫類。「ちびちび虫」＝学名は貨幣石。

（鈴木徹郎）

見わたすかぎり、海はさえぎるものもなく、目の前にひろがっていました。灰色によどんで、はるか水平線まで、白い波のうねりが、しまもようを作っていました。ホムサは風上に鼻をむけました。みんなの帰りを待つために、こしをおろしました。やっと、また、しんぼうして待つことができるようになったのです。

ムーミン一家は、追い風にのり、岸にむかって一直線に船をすすめていました。ムーミンたちは、ホムサがいちどもいったことのない、そして、岸からでは見えない、どこかの島へいってきた帰りなのです。もしかすると、ムーミンたちは、その島に、ずっといたいと思ったかもしれないな、と、ホムサは思いました。もしかすると、ムーミンたちが、お話に作って、ねる前に、自分で自分に話してきかせるような島かもしれないんだ。

何時間も、ホムサ＝トフトは、山の上にすわって海のほうを見ていました。うす暗くなってきて、岸が暗やみの中にしずんでいきました。でも、かれには、まだ白い波がしらが見えました。太陽は、ちょうどしずみきろうとするときに、雲の峰の中に、つめたくすんだ、黄色い冬の光をちらしました。それは、ぞっとするほど、あたりを寒々とした、わびしい風景にしました。

あっ、ムーミンパパが帆柱のてっぺんにつるしたカンテラが見えてきました。おだやかで、あたたかな色の光です。たのもしく光っています。

ヨットは、まだ、ずっと遠くのほうにいました。ホムサが森をぬけて岸におり、岸づたいに桟

の下をからだをこごめてくぐりぬけたり、はったりしているうちに、頭の中が、あの水晶玉とおんなじようにからっぽになりました。そうだ。ムーミンママは、くたびれたり、はらがたったり、がっかりしたり、ひとりになりたいときには、あてもなく、はてしなくうす暗いこの森の中を歩きまわって、しょんぼりした気持ちをかみしめていたんだ……ホムサ＝トフトには、まるっきり、いままでとちがったママが見えました。すると、それがいかにもママらしくて、自然に思えました。ホムサは、ふと、ママはなぜかなしくなったのだろう、なぐさめてあげるのには、どうしたらいいのだろう、と思いました。

だんだんと、森の木立がまばらになり、大きな、灰色にくすんだ山が、目の前にせまってきました。峰までずっと、山はだをあらうように光って見えるのは、深いくぼ地に水のしみこんだ、湿地の光です。そして峰のあたりで、山はまるはだかになって、大きなすがたをむきだしにしています。

その峰のてっぺんはというと、もう、なにもありません。ただ、風がふきあれているだけです。はてしなくひろがった空に、大きな雪雲が、とぶように流れています。なにもかも、大きなものばかりでした。ホムサ＝トフトは、いまのぼってきたところをふりむいてみました。でも、谷間は、ぼんやりとかげのように、かすんで見えるだけでした。ホムサは海のほうに目をうつしました。

をいやがる、きみのわるいうら山の中でした。この森の中は、年じゅう、昼でも暗いのです。木木は、枝のおき場もないほどこみあっていて、心配そうにくっつきあって立っていました。どの木もとてもやせほそっていました。地面はつるつるした皮みたいに見えました。

あかるくうき出ているのは、オレンジ色の、指の形をしたきのこだけです。まるで、暗やみから、なん本もの小さな手が、にょきにょき出ているみたいです。木のみきには、大きなこぶのようなものが見えました。白っぽいクリーム色のビロードのようなこぶでした。

これは新しい世界でした。ホムサには、ことばで説明することも、絵にかくこともできませんでした。なにひとつ、絵やことばにしてやる必要もないのです。ここには、いままで、道を作ろうとした人もいないし、木かげで休もうとした人もいないのです。ただ、みんな、なんとなく暗い思いをだいて、この中を歩きまわるだけなのです。これはいかりの森でした。かれは、すっかり気持ちがおちついて、とてもいきいきとしてきました。

ホムサは、自分の頭にしまっておいた絵が、みんなきえていく気がして、すごくほっとした気持ちになりました。谷間や、しあわせなムーミン一家のホムサのお話は、色がうすれて、だんだんきえていきました。ムーミンママも、すうっと遠くのほうへいってしまって、人の形だかなんだかわからなくなってきました。もう、ママって、どんなだったかもわかりません。

ホムサ＝トフトは、森の中を、おくへおくへとはいっていきました。なんにも考えないで、枝



す。もう、待ちきれなくなって、ホムサははらがたっていました。お勝手口の階段にこしかけて、両手をひざにのせ、ぎゅっと目をつぶりました。かわるがわる、頭の中に、見たこともない大きな絵がとびこんできます。きゅうに、ホムサは、こわくなってきました。すごいいきおいで立ちあがると、いっさんにかけだしました。うら庭を通りこし、ごみの山を通りこし、まっしぐらに森の中にかけこみました。

たちまち、まわりがうす暗くなりました。ミムラねえさんがいつか話していた、あの、人のくるの

は、雪のにおいでいっぱいでした。ずっしりとしていて、しかもすみわたった感じのにおいでした。

テントをはってあったところが、からっぽになっているのを見ても、ホムサはびっくりしませんでした。きっと、スナフキンにはわかっていたんです。ムーミンたちが帰ってくるとき、出むかえる役目は、トフトひとりきりでなくてはいけないんだということがね。ホムサはちらっと、スナフキンにはなんだって、すっかりわかってしまうんだ、という気がしました。でも、そう思ったのは、ほんのしばらくで、また自分のことを考えだしました。

ホムサは、ムーミンたちに会いたい、会いたいと、ずうっとゆめみていました。あまり思いつめて、くたびれてきたほどです。ムーミンママのことを考えるたびに頭痛がしました。やさしくいたわってくれる、申しぶんのないママが、ホムサの頭の中に、すっかりできあがっていました。ですから、ママのことが、顔のないすべすべした、まるい大きなふうせんみたいにしか思いうかべられないのが、せつなくてたまりませんでした。

ムーミン谷は、もうすっかり、ゆめのようなけしきにかわっていました。ムーミンの家も、庭も、川も、かげ絵を見ているようです。ホムサは、どこまでがほんとうのもので、どこからが、自分の空想したものだかわからなくなってきました。あんまり長いあいだ、待たされすぎたので

もう、どこを見わたしても、目をひくものはなにもなくなりました。ただ、テントのところだけ、かれ草が長方形にのこっていて、そこにテントのはってあったことがわかりました。でも、そこも、あすになれば雪におおわれてしまいます。

スナフキンは、ムーミントロールに手紙を書いて、郵便箱に入れました。すっかり荷物をつめおわったリュックは、橋の上においてありました。

夜あけの光が、しらしらとさしはじめるころ、スナフキンは、自分の五つの音色をつかまえに、海べへ出かけていきました。岸にうちあげられた海草のかたまりや流木をまたいで砂浜に出ると、そこに立って、じっと、音色の近づくのを待ちました。それは、すぐにやってきました。こんなだったらいいなあと思っていたよりも、もっとさわやかで、美しい音色でした。

雨の曲が、いよいよ近くせまってくる中を、スナフキンはひきかえして、リュックを肩にひっかけ、わきめもふらずに森へはいっていきました。

その夜は、水晶玉の中に、かすかな、でも、いつまでもきえない光がともっていました。ムーミン一家のみんなが、冬ごもりをするために、ヨットの帆柱の先にカンテラをかかげて、家にむかいはじめたのです。

南西の風は、まだふきつづけていて、雲がむくむくと、空高くもりあがっていました。あたり

ママがよく木の皮の船を作るのにつかっているナイフでした。

でも、もう一本持ってるってことだって、あるかもしれないな。ホムサは、ナイフの刃をひきだしてみました。大きい刃も小さい刃も両方とも。二つとも刃の光がくもっていて、おまけに小ぎりは刃がかけていました。ナイフには小ばさみもついていました。でも、はさみは、ママはたいしてつかっていないようです。トフトはまき小屋へおりていって、ナイフをと石でとぎました。それから、もとの、まどのしきいの上にもどしました。

きゅうに寒さがゆるんで、風が南西風にかわりました。これはムーミンたちの風だな、と、トフトは思いました。あの人たちは、南西風がいちばんすきなんだ。ぼくは知っているんだ。

雲がむくむくとわいてきて、じわじわと、海の上にひろがっていきました。空いちめんに、雲が重たくたれこめました。ひと目で、雪をいっぱいつんだ雲だということがわかります。もう二、三日したら、谷間は、すっかり冬らしくなってしまうでしょう。冬は、長いこと待ちかまえていて、いよいよやってきたのです。

スナフキンは、テントの外に立っていました。あたりがしんみりしてきました。もういつでも、旅に出かけられる用意ができていました。谷間は、じきに雪にとざされてしまいます。

ゆっくりと、しずかに、スナフキンは、テントのくいをひきぬきました。そして、テントをまるめてたたみました。まっかな炭火をけしました。きょうは、いそいではいませんでした。

第21章

ムーミン一家のヨットが見えた



　ホムサ＝トフトは、はじめてママのへやにはいってみました。白くぬったへやでした。ホムサは、水がめに水をいっぱいにして、それからベッドカバーのしわをたいらにのばしました。フィリフヨンカの持ってきた花びんを、ベッドのわきの、おきテーブルの上におきました。ムーミンママは、かべに絵をひとつもかけていませんでした。それに、戸だなの上には安全ピンのはいったおさらと、ゴムせん一つと、まるい石が二つのっかっているきりでした。

　まどのしきいの上で、ホムサは、おりたたみナイフを一つ見つけました。ムーミンママがおきわすれたんだな、と、ホムサは思いました。

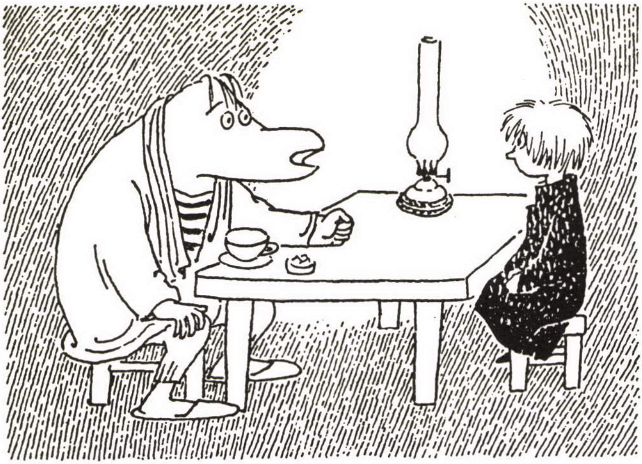
「とんでもない。」
と、ヘムレンさんは答えました。
「ヨットが入りようなだけの人さ。」
ヘムレンさんは、また、手をふりふり歩きだしました。そして、しらかばの木立のあいだに、すがたをけしました。
ホムサは、ほうっと、深いため息をつきました。またひとり、いなくなってしまいました。じきに谷間は、あの水晶玉みたいにがらんとして、すっかりしらけてしまうでしょう。そして谷間にすんでいるのは、ムーミンの家族と、ホムサ＝トフトだけになってしまうんです。ホムサは、スナフキンのテントの前を通るついでに、きいてみました。
「きみは、いつ、いなくなってしまうの。」
「さあ、そいつは、ぼくにはわからないな。そのときしだいさ。」
と、スナフキンは答えました。

ただ、なみだもろくなっているだけかもしれません。
「これ、ぼくの詩だよ。」
と、ヘムレンさんはいいながら、スナフキンのほうに、紙きれを一まいさしだしました。
「記念のために書いたんだ。これは、『しあわせとは、なんだろう』という題なんだ。じゃあ、おたっしゃで。ムーミンたちによろしく。」
ヘムレンさんは、手をあげていってしまいました。
ヘムレンさんが、橋をちょうどわたりきったとき、ホムサ＝トフトがあとから追いかけてきて、たずねました。
「きみ、きみのヨットはどうするの。」
「ヨットだって。」
と、ヘムレンさんは、そのことばをくりかえしました。
「なるほどね、ヨットね。」
ヘムレンさんは、ちょっと考えこんでからいいました。
「ヨットをあげるのに、ちょうどいい人が見つかるまで待っているよ。」
「ヨットにのりたくて、ゆめにまで見ているような人が、見つかるまでかい。」
と、トフトはいいました。

ヘムレンさんは鼻をもちあげて、心の底からたのしそうに、大声を出してわらいました。かれは、ふきんで鼻を強くかむと、こういいました。
「さあ、また、からだがあったまってきた。くつしたと長ぐつがかわいたら、ぼくはさっそく、うちへ帰るよ。うちには、おいしいソースがたっぷりあるんだ。かたづけなくてはならないことも山ほどあるし。」
と、トフトはききました。
「そうじをするのかい。」
「もち、するもんか。」
と、ヘムレンさんは、大声をあげました。
「ぼくが、かたづけをするってのは、ほかの人のものなんだ。どうやってとっておけばいいのかわからなくて、そして、自分ひとりで、うまくかたづけられない人が、けっこうおおいんだよ。」

いなくなってしまう人と、あとにのこる人とは、いつも橋の上で別れるものです。ヘムレンさんの長ぐつとくつしたは、すっかりかわきました。ヘムレンさんは、もう、いつでも旅立ちできるしたくがととのいました。まだ、風がふいていました。ヘムレンさんのうすい髪の毛は、風になびいて、ひらひらしました。ヘムレンさんは、ちょっとかぜをひいているようでした。いいえ、

ムレンさんはたずねました。
「きみ、びっくりしないのかい。」
ホムサは、首を横にふりました。
ヘムレンさんは立ちあがって、台所の中をいったりきたりしはじめました。とても、こうふんしていました。
「ヨットって、おっかないんだ。」
と、ヘムレンさんはいいました。
「死にたいくらい、気持ちがわるくなって、ずっと、びくびくしどおしだったんだ。わかるかい。」
ホムサ＝トフトは、ヘムレンさんの顔を見ていいました。
「そりゃ、とってもおっかなかっただろうね。」
「そうともさ。」
と、ヘムレンさんは、そういってくれたのを、ありがたそうにあいづちをうちました。
「だけど、ぼくは、スナフキンには、そのことを、ちっとも気づかせなかったんだぜ。あいつは、ぼくが、大風をものともしないで、りっぱだと思っていたにちがいないんだ。ぼくは、正しくかじをとったからね。だけど、ぼくは、いまになってわかったよ。ぼくはもう、ヨットにのらなくていいんだ。おかしいだろう。もう、二度とのる必要がなくなったってことがわかったんだ。」



ヘムレンさんは、くしゃみをして、いいたしました。
「ぼくが、ヨットのかじをとったんだよ。」
「きみ、たぶん、きみのヨットが、こいしくなったんだろうな。」
と、ホムサはつぶやきました。
ヘムレンさんは、だまっていました。ずいぶん長いこと間をおいてから、やっと口をひらきました。もう、そのときには、すっかりほっとした顔つきになっていました。
「わかるかな。これから、なにをいおうとするのかさ。」
と、ヘムレンさんはいいました。
「きみに、うちあけることがあるんだよ。海に出たのは、こんどが生まれてはじめてなんだ。」
ホムサは、目をあげようとしませんでした。ヘ

階段に足音がきこえたと思うと、ヘムレンさんがはいってきました。
「よう。」
と、ヘムレンさんがいいました。
「よう、よう。」
と、ホムサもいいました。
「風は強かったかい。」
「ちょっとしたあらしさ。」
と、ヘムレンさんは答えました。
「いせいのいい、ごつい風だったよ。」
ヘムレンさんは、顔がまだ青白くて、寒そうにかじかんでいました。からだが、がたがたふるえていました。ヘムレンさんは長ぐつとくつしたをぬぎ、かまどの中につるしてかわかしました。ホムサは、コーヒーをついでやりました。ふたりは、食卓に、むかいあってこしかけました。なんだか、てれくさい気持ちでした。
「どうかしらね。」
と、ヘムレンさんはいいました。
「そろそろ、うちへ帰っても、べつに、早すぎじゃないと思うけれど、どうだろう。」

へムレンさんは思いました。（ぼくは、しっかり、ぎゅっとかじをにぎっているんだ。はきけなんてするものか。）

もう、おなかの中もらくになりました。ヘムレンさんは、波のうねりにのって、あがったりさがったりするヨットのへさきを、ほんのすこしでも目をはなさずに見つめていました。このまま世界のはてまでいったって、ぼくは、もう、気持ちわるくなんてならないぞ。どんなきびしい試練だって、くるならきてみろ。もう、はきけなんて、ちっともしないんだから……。

ヘムレンさんは、じっとからだをかたくして、まゆひとつうごかそうとしませんでした。顔の表情もかえようとしないし、なにか考えようともしませんでした。ただ、あがったりさがったりするヨットのへさきを見つめたままでした。ヨットは、思いのままにふきまくる風にのって、沖へ沖へと出ていきました。

ホムサ＝トフトは食器をあらって、ヘムレンさんが、いつでも横になってねれるように、ベッドのしたくをしておきました。それから、かえでの木の下におちたゆか板をひろいあつめて、まき小屋のうらにかくしました。そうして、いまは、食卓の前にこしをかけて、風の音に耳をすましながら、ふたりの帰りを待っているところです。

やっと、庭に、ふたりの話し声がきこえてきました。ふたりが帰ってきたのです。お勝手口の



夕風に音たてました。ああ、まわりのものが、みんなしずんでいく。スナフキンときたら、じっと水平線のほうをながめて、ただこしかけているだけです。

ヘムレンさんは、むちゅうで、かじをあっちこっちへうごかしました。帆がはげしく風に鳴り、ヨットに水がはいってきました。スナフキンは、やっぱり、水平線をながめたまんまです。ヘムレンさんは、もう考えるゆとりなどないくらい、気持ちがわるくなって、ただもう、勘でかじをとっていました。

ふいに、ちゃんと、かじがとれるようになりました。帆は風をはらみ、ヨットは大波のうねりにのって、岸にそって、堂々と波をけたてすすんでいきます。

（もう、はきけなんかしなくなったぞ。）と、

わと、気持ちがわるくなっていきました。やたら出てくるあくびをこらえているうちに、ふいに、からだじゅうがげっそり、げんなりとなって、おなかの底から、むかむかしてきたんです。もう、死んだほうがましでした。

「さあ、こんどは、きみがかじをとれよ。」

と、スナフキンはいいました。

「だめだよ。だめ、だめっ。」

ヘムレンさんは、かすれ声を出しながら、両手をしきりとふりました。からだをうごかしたために、いっそう、おなかがくるしくなりました。いじわるな海が、頭の上からのしかかったような感じがしました。

「きみが、かじをとるんだよ。」

と、スナフキンはくりかえしました。それから立ちあがって、ヨットのまん中の、こしかけ板のところまではっていきました。かじはとりてがなくなって、ひとりでかってにゆれています。どうしようもありません――だれかがかじをとらなくちゃ。このままでは、おそろしいことになります――ヘムレンさんはあきらめて、船尾のほうへむかいました。

つまずいたり、よろめいたりしながら、こしかけ板をまたいでいって、やっと、かじかんで青白くなった両手で、しっかり、かじをつかみました、帆は、やけくそになったみたいに、バタバ

ありったけの毛糸のものを着こんでいました。空はすみきって、水平線のあたりに、紺色の冬雲が、むくむくともりあがっていました。スナフキンは、オールで岸をひとつきして、岬のほうにむかってヨットをのりだしました。ヨットは、ぐらっとかたむくと、すごいスピードですべりだしました。

「海の大王さまだ。」

と、ヘムレンさんが、ふるえ声でさけびました。ヘムレンさんの鼻は青白くなり、おびえきって、風下の、ヨットのへりを見つめていました。へりは、白くあわだって、すさまじいいきおいで、うしろへ流れていくみどりの海面にすれすれでした。

こういう気持ちなのかと、ヘムレンさんは思いました。ヨットにのるってのは、こういうものなんだ。まわりの世界が、ぐんとかしいで、下は底なしの深い水の上とすれすれのまま、すすんでいくんだ。寒くてがちがちふるえ、おどおどして、そして、後悔しても、もうあとのまつりというものなんだ。スナフキンが、ぼくがこんなにこわがっていることに、気がつかなきゃいいんだけど。

岬の外へ出ると、ヨットは大波につかまりました。海のどこかがあらしで、そこからうちよせてきた波でした。スナフキンは、うまくヨットをあやつって、波をのりきってすすみました。

ヘムレンさんは、気持ちがわるくなりだしました。知らない間にだまされたみたいに、じわじ

「ぼく、はらはたたないんだけどな。ただ、そんなふうになっちまうだけで……。」
「ぼくは、ヨットのことを思い出していたんだ。」
と、スナフキンが説明しました。
「十二時すぎて、風が出れば、ヘムレンさんとぼくとで、ちょっとヨットにのれるからね。」
「ヨットって、ギシギシいうだろう？」
と、ヘムレンさんはいいました。
「そんなこと、あるもんか。」
と、スナフキンが答えました。
「ちゃんと、あなはふさいであるし、まき小屋で、帆も見つけたんだぜ。いっしょにのろうよ。」
ホムサ＝トフトは、あわてて、自分のコーヒー茶わんに目をおとしました。ヘムレンさんのようすは、おびえているような気がしたからでした。すると、ヘムレンさんはいいました。
「そいつは、まったく、すばらしいや。」
一時半になると、風がふきだしました。たいした風ではありません。でも、とにかく、海にはいちめんに、白い波がしらが立ちはじめました。スナフキンは、桟橋のわきまでヨットを出して、帆をはり、ヘムレンさんをヨットのへさきにすわらせました。きびしい寒さでした。ふたりとも、

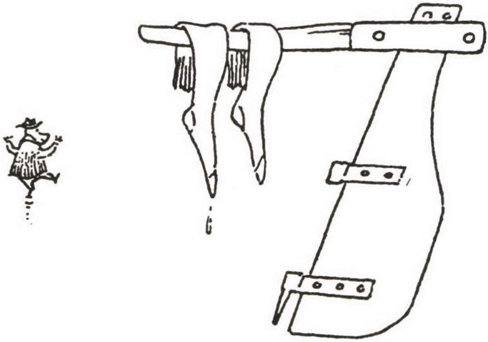
「なぜ、ちがうんだい。」
と、ホムサはききました。
「わかんないよ。」
と、ヘムレンさんは答えました。
スナフキンは、コーヒーをつぎたしながらいいました。
「十二時すぎると、風が出てくるぞ。」
「きみって、いつも、それなんだから！」
と、ホムサが、ことばをさえぎりました。
「どうしたらいいだろうかとか、どうなるだろうかとか、これは、きみがわるいぞなんて、みんなが話をしていると、きみは、きっと、雪がふるぞとか、風がふくぞとかいうんだ。でなきゃ、もっとさとうを入れるかいなんて、いってばかしで……。」
「きみは、また、はらをたてたね。」
と、ヘムレンさんが、びっくりしていいました。
「なぜ、きみは、人がわすれたころになると、また、はらをたてるんだい。」
「わかんない。」
と、トフトはつぶやきました。

「きみのいうことにも、一理あるな。」
と、ヘムレンさんはみとめました。
「そのほうが、ずっと、パパのこのみにあうかもしれないな。どう？　それに、ぼくは、カンテラをつるすくぎをうちつけることもできるしな。だけど、木の枝につるしたほうが、もっとしぜんでいいかもしれないね。」
三人は、コーヒーをのみに、うちにはいっていきました。そして、このときは、三人そろってコーヒーをのみ、おまけに、コーヒー茶わんの下には、しきざらまでしきました。
「人は、不幸なできごとがあると、ますます、むすびつきがかたくなるもんなんだな。」
と、ヘムレンさんは、まじめくさっていいながら、コーヒーをかきまわしました。
「さて、そこで、これからぼくたち、どうしたらいいだろうか。」
「待つのさ。」
と、ホムサ＝トフトはいいました。
「なるほどね。で、ぼくは？」
と、ヘムレンさんがたずねました。
「きみは、みんなが帰ってくるまで待っていれば、それでいいけれど、ぼくのばあいは、まるっきりちがうからな。」

までにはコーヒーポットがかけっぱなしで、いつもお湯がわいていました。
ほんとに、谷間は、とまどうほどひっそりと美しく、しずまりかえっていました。そして、のこった人たちは、あまりしょっちゅうは、顔があわないために、かえってしたしみが深まっていきました。あの青色の水晶玉は、すっかりからっぽになって、いつなんどき、どんなものがはいってきて、いっぱいになってもいいようになっていました。刻々と、寒さがましていきました。
そんなある朝、ちょっとしたできごとがおきました。ドシンと大きな音をたてて、ヘムレンさんの作ったゆかが木の上からころがりおちてしまったのです。かえでの木は、ヘムレンさんが家を作りはじめないころの、もとどおりのすがたにもどってしまいました。
「ふしぎだな。」
と、ヘムレンさんはいいました。
「いつも、おんなじことばっかしおきているって気が、もうしなくなったよ。」
ヘムレンさんとホムサとスナフキンは、三人そろって、かえでの木の下にいって、どんなことになったのか、見とどけました。
「たぶんね。」
と、トフトは、もじもじしながらいいました。
「ムーミンパパは、はじめのまんまの木の上にいるほうが、すきかもしれないよ。」

第 20 章

ヘムレンさん，海へのりだす



スクルッタおじさんが冬ごもりをしてしまうと、谷間は、いっそうしんとなりました。ときどき、ヘムレンさんのかなづちの音が、かえでの木の上からきこえてきたり、まき小屋で、おのの音がしたりするほかは、ひっそりしずまりかえっていました。ヘムレンさんとホムサは、顔があうと、やあとか、おはようとか、あいさつをかわしあいました。でも、おしゃべりする気はおきませんでした。ふたりとも自分のお話が「おしまい」になるときのくるのを待っていました。

ときどき、だれかしら、なにか食べたくなると、食べものおきばへはいっていきました。か

クルッタおじさんの持ちものを見つけだして、洋服だんすの前におきました。ホムサは、羽ぶとんをスクルッタおじさんの上にかけて、おじさんのからだを、ちゃんとくるんであげました。冬は、どんなに寒くなるかわかりませんからね。

洋服だんすは、かすかに、なにかの香料のにおいがしていました。びんの中には、ブランデーが、四月になって、目ざましの元気づけにいっぱいのむのに、ちょうどたりるくらいのこっていました。



水晶玉の中は、からっぽでした。ただのきれいな青色のガラス玉でした。でも、黒い夜空には、ダイヤモンドのようにきらきらと、星がいっぱいかがやいていました。こおりのようにつめたくさえた、冬の星でした。

「もう冬だね。」

と、ホムサは、台所にはいってくるといいました。

ヘムレンさんは、かべなしの家にしたほうがおもしろいやと、きめていました。つまり、ゆかだけの家にするのです。ほっとして、図面の紙をたたみながらいいました。

「スクルッタおじさんは、冬ごもりしちまったぜ。」

「自分のものを、みんな、ちゃんと持っていけたのかしら。」

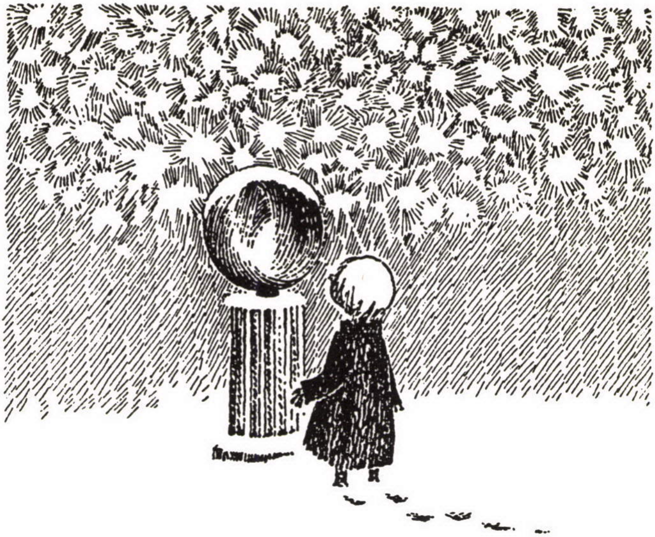
と、ホムサはききました。

「自分のものを持っていって、どうするんだい。」

と、ヘムレンさんは、びっくりしてききました。

「冬ごもりしてねむったら、目がさめたときには、みんな、うんとわかがえっているんだ。もちろん、なんにも入りようないんだ。ほっておいてもらいさえすれば、いいんだ。」

でも、ホムサは、目がさめたときにたいせつなのは、ねむっているあいだも、だれかが自分のことを考えてくれていた、ということがわかることなんだ、といいました。で、ホムサは、ス



「おい、わしは冬ごもりするぞ。」
「おや、そうかい。」
と、ヘムレンさんは、うわのそらで答えました。ドアのしまる音がすると、ヘムレンさんは、ちょっと鼻をあげて、スクルッタおじさんのうしろすがたを見おくりました。
それから、また、かえでの木の上に家を作るという、とてつもなくむずかしい仕事を、むちゅうになって考えだしました。

その夜は、空は晴れわたっていました。
ホムサが庭を歩くと、足もとで、うすごおりがわれる音がしました。谷間は、ひえびえとして、しんとしずまりかえり、雪あかりが、ぼうっと、山はだをそめていました。

と、スクルッタおじさんは、ひとりごとをいいました。

「ねえ、そうだろう？」

と、ヘムレンさんはききました。

「そのほうが、すてきだろう？」

「いや。」

と、スクルッタおじさんはいいました。おじさんは、ヘムレンさんのいうことを、きいていたのではありませんでした。やっと、おじさんは、どうしたらいいのかわかったのです。一足とびに冬をとびこして、うんと大またで、四月の中にふみこめばいいんです。

ちっとも、こまることなんてないのだ。まるっきりないのだ。気持ちよくねむれるあなぐらを見つけて、ねむってしまうことだ。そのあいだに、世の中は世の中で、かってにどんどん日がたっていけばいいのだ。そうして目がさめたときには、もうなにもかも、ちゃんと、そうでなければいけないようになっているはずだ。

スクルッタおじさんは、食べものおきばにはいっていって、もみの葉のはいっている、ふたつきのはちをおろしました。ぞくぞくするほど、うれしくなってきました。そして、きゅうに、ねむたくてたまらなくなりました。おじさんは、しかめっつらして考えこんでいる、ヘムレンさんのそばを通っていきながら、こういいました。

「あいつは、いっちまったんだな。おこって、どこかへいっちまったんだ。」

スクルッタおじさんが、かまどの前にこしかけて、考えこんでいます。食卓では、ヘムレンさんが、自分のかいた図面を、いっぱいに、目の前にひろげてにらんでいます。

「かべと、うまくかみあわないものが、なにかあるんだ。」

と、ヘムレンさんはつぶやきました。

「かべが、へんなふうにかしいでしまって、中の人が、かべからころがりおちてしまう。うまく木の枝にあわせてかべを作るなんて、できっこないや。」

（たぶんあいつは、冬ごもりしちまったのだ。）

と、スクルッタおじさんは思いました。

「まったくのところ。」

と、ヘムレンさんはつづけました。

「まったくのところ、これでは、かべの中にとじこめられてしまうだけだ。かべなんかなくて、木の枝にこしかけていたほうが、夜のようすも見えるし、まわりのできごとだってわかるから、そのほうが、おもしろいんじゃないかな。どうだろう。」

「大きなできごとのおきるのは、春なんだろうな。」

ありました。なにもかも、ひえびえとした雪あかりの中にしずんでいました。スクルッタおじさんは、きゅうにはらがたってきて、たまらなくさびしくなり、どなりだしました。

「どうなんだい。おい、なにかいえよ。」

でも、ご先祖さまはだまっていました。じっと立ったまま、たけの長すぎる、おじさんのナイトガウンを見つめたきり、ひとこともしゃべりませんでした。

「あんたのたんすから出てこいよ。」

と、スクルッタおじさんは、きつい声でいいました。

「出てきて、よくながめてみなさいよ。やつらは、またなにもかも、すっかりかえてしまったんだ。はじめからのことを知っているものは、もう、あんたとわしだけになったのだ！」

そういって、おじさんは、つえで、ご先祖さまのおなかを、うんと強くつつきました。ガチャンと、音がしました。その古かがみは、こまかにわれてドアからはずれ、すごいいきおいで下におちました。ほそ長いかけらが一つだけドアにのこって、ご先祖さまのこまった顔を見せていました——それから、そのかけらもおちてしまうと、スクルッタおじさんは、むっつりだまりこくっている茶色いかべ紙と、顔をつきあわせることになりました。

「なるほど、そうか。」

と、スクルッタおじさんはいいました。

あげました。

「こんちは。」

と、おじさんはいいました。

「雪ですね。このごろでは、どうして、ちっぽけなことしかおきなくなったんですかね。どうして、みんな、ちっぽけになっちまったんですかね。わしの小川は、どこにいっちまったんでしょう。」

スクルッタおじさんは、そういって、だまりました。おじさんは、まるっきりへんじをしてくれない友だちと話をするのが、くたびれてきました。

「あんたは、年よりすぎるんだ。」

と、おじさんはいいながら、ドンとつえをつきました。

「これで、冬がやってくると、あんたはますます年よりになるんだ。冬には、みんな、すごく年よりじみるからな。」

スクルッタおじさんはそういって、じっと友だちの顔を見つめながら、なにかいってくれるのを待ちました。屋根うらべやのドアは、どれもこれもあけっぱなしで、きれいにそうじした、がらんとしたへやの中がまる見えでした。中にとじこめられていた、ちょっと野蛮で、ちゃめな連中は、みんないなくなりました。敷きものは、どれもきちんと、その形どおりの長方形にしいて



　ずっと遠いむかしに、あちこちで小川が流れていたありさまが、だんだんと目にうかんできました。なつかしい日々のようすを思い出しました。さかなはどっさりいたし、夜はあかるくて、あたたかで、いつもにぎやかに、いろいろのできごとがおきていました。あちこちのできごとを見そこなわないように、足ががくがくするほど走りまわったものです。そして、ほんのちょっとの間だけ、うとうととまどろむだけで、あとは見るものきくものに、声をたててわらったものです……。スクルッタおじさんは、ご先祖さまとおしゃべりをしたくなって、よいしょとこしを

さんは、そのあとからついていきました。
ふたりは、雪がちらちらまう中に、すがたをけしていきました。そのうしろすがたには、別れには、いつもつきものの、さびしいかげと、ほっとしたようなようすとがただよっていました。
一日じゅう、雪はひっきりなしにふりしきりました。ますます寒くなりました。まっ白になった地面、旅に出ていって、いなくなった人たち、見ちがえるようにきれいになった家——そんなもののために、その日は、なにもかも、うごかなくなったみたいで、もの思いにしずみたくなるような日でした。ヘムレンさんは、あの木を見あげて立っていました。板ぎれを一まい切って、でも、ころがしたまま、ただ、じっと、木をながめて立っていました。ときどき家にはいって、気圧計のねじをまきました。
スクルッタおじさんは、応接間のソファーに横になって、ものごとのうつりかわりについて、いろいろと考えていました。ミムラねえさんのいつかいったことは、正しかったんだ……。まったく思いがけなく、ふいに、おじさんは、あの小川は、さんずい河だということに気がつきました。いちめんの雪げしきの中を、まがりくねって流れていく、茶色くにごった河でした。どう見ても、茶色い河でした。もう、さかなつりもできませんでした。スクルッタおじさんは、ビロードのクッションに顔をうずめて、なつかしい、おじさんの小川を思いうかべました。

と、フィリフヨンカは、うわのそらでへんじをしました。

「とにかく、あのせとものの花びんは、わたしのおくりものだっておっしゃってくださいね。ところで、あのハーモニカのふしは、なに調でしたっけ。」

「ニ調だよ。」

と、スナフキンはいいました。

「旅のごぶじを祈ります。」

と、ホムサ＝トフトはつぶやきました。すると、ミムラねえさんがいいました。

「スクルッタおじさんのお鼻に、わたしからだといって、キッスしてあげてね。それから、おじさんの好物はびんづめきゅうりで、川は小川だってことを思い出してね。」

フィリフヨンカは、スーツケースを持ちあげました。

「これからは、おじさんが、お薬をちゃんとおのみになるように、気をつけてあげてくださいね。」

と、フィリフヨンカは、きびしい声でいいました。

「おじさんに、おのみになる気があってもなくても、のませてあげてね。百歳ってお年はね、みんなといっしょになってあそぶようなお年ではないんですからね。それから、また、したければ、ときどき、家族の夕べをするといいわ。」

フィリフヨンカは、いちどもうしろをふりかえらずに、橋をわたっていきました。ミムラねえ

と、ミムラねえさんは答えました。
　スクルッタおじさんは、みんなの顔を、つぎつぎとながめました。おじさんは、みんなの大そうじにも、いつまでたっても、とりとめのないことばかり話しているおしゃべりにも、もう、あきあきしていました。
「ここは寒いよ。」
と、おじさんはいいました。おじさんは、よっこらしょと立ちあがると、うちの中へはいっていきました。
「雪になるな。」
と、スナフキンはいいました。
　あくる朝は初雪がふりました。小さなかたい雪が、ひらひらまいおりてきました。背中がぞくぞくするほど、しんしんとひえました。フィリフヨンカとミムラねえさんは、橋の上で、みんなとお別れのあいさつをかわしました。スクルッタおじさんは、まだ、ねているようでした。
「とてもたのしくすごしましたね。いろいろとためになりました。」
と、ヘムレンさんはいいました。
「また、ムーミンたちもいっしょにいるときに、いつかお会いしたいものですね。」
「ええ、ええ。」

「わたし、しないではいられなかったんですもの。あなただって、わたしとおんなじように、したくてたまらないことをすればいいんだわ。わたし、ミムラねえさんにいっているんですけどね。」

「きみょうなことが、一つあるんだよ。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「ぼくは、ときどき、いまいっていることや、していること、それから、いまおきていることなんかが、前にも、そっくりおなじようにあったような気のすることがあるんだ。ねっ、ぼくのいうことの意味、わかるかな。いつかも、いまも、おなじみたいなんだ。」

「で、どうして、ちがっていなくてはいけないの？」

と、ミムラねえさんがききました。

「ヘムレンさんは、いつになってもヘムレンさんで、ヘムレンさんには、ヘムレンさんにおきるようなことしかおきないんだわ。そして、ミムラのわたしには、ときどき、おそうじをさぼって、とびだしちまうことがあるってわけ。」

　ミムラねえさんは、大声をあげてわらいながら、ひざをたたきました。

「あなた、いつも、おんなじでいたいの？」

と、フィリフヨンカが、ふしぎそうにたずねました。

「もち、そうよ。」



があるんだもの。」
みんなは、そろって、ベランダの前の階段にこしかけました。夜になると、とても寒くなりました。でも、みんな、なんとなく別れるのがなごりおしくて、それに、いままでみんなでいっしょにくらしてきた生活がなつかしくて、寒くなっても立とうとしませんでした。
「きれいにおそうじをしてくれて、ありがとう。」
と、心から感心して、ヘムレンさんがいいました。
「どういたしまして。お礼なんて、とんでもない。」
と、フィリフヨンカは答えました。

そんなことをしているひまなんて、あるわけないし、また、する気にもなれないのです。口ぶえは、ときどきふきました。かろやかで、きびきびした身のこなしです。フィリフヨンカは、まるで風のようにうごきまわりました——ここにいたかと思えば、またあっち。そうしているうちに、フィリフヨンカは、きゅうに、また、たまらなくさびしくなりました。おそろしくもなってきました。なぜ、こんな気持ちになったのかしら。わたしは、ただの大きな灰色のごみのかたまりになっちまったじゃないの……だけど、なぜかしら。考えてみても、そのわけは思いつきませんでした。

こんなふうにして、その、まぶしいほどすばらしい大そうじの一日は、ありがたいことに雨もふらずに、おわりに近づいていきました。日ぐれになると、なにもかも、もとどおりのところにおさまりました。みんな、ぴかぴかに光って、きれいになって、すっかり風にかわいて、そしてうちの中は、どっちを見ても、みがきたてのまどがびっくりするほどきれいでした。フィリフヨンカは、頭にかぶっていたハンカチをとり、エプロンをはずして、エプロンかけの木くぎにかけました。

「さあ、これですんだわ。」

と、フィリフヨンカはつぶやきました。

「さあ、こんどはわたしのうちへ帰って、わたしのうちもおそうじしなきゃ。おそうじする必要



たのしそうなおそうじを見ているうちに、スクルッタおじさんだけはべつですが、そのほかの人たちは、みんなうきうきしてきて、自分たちもいっしょになって、おそうじがしたくなりました。水はこびや、じゅうたんふるいや、あちこちのゆかを、ちょっぴりみがいたり、あちこちにわかれてまどをふいたり、みんないっしょになって、そうじをはじめました。おなかがすくと、食べものおきばにはいっていって、家族の夕べのお料理の食べのこりをさがしました。

フィリフヨンカだけは、なに

のかたまりになって、ほうぼうのすみっこに、ちゃっかりおさまっていました。ころころがっていくうちに、大きく太って、髪の毛だらけになり、ぜったいに見つかりっこないと安心しているごみというごみを、フィリフヨンカは、かたっぱしからはきだしました。

はっ、はっ、はっ、ゆかい、ゆかい。がやら、くもやら、げじげじやら、もぞもぞはいずりまわる虫けらどもが、みんな、フィリフヨンカの大きなほうきにかかって、ひっくりかえされ、そのところへ、ザーッとせっけんのあわをぶくぶくたてた、洪水みたいなお湯が流れてきて、すっかり、あらい流してしまうのです。バケツにはいって、つぎつぎと、ドアからおもてにはこびだされていくごみの山も、ちょっとやそっとのものではありませんでした。人生って、まあ、ほんとうに、なんてたのしいんでしょう。

「おなごがそうじをしているときってのは、いつ見ても、すきにゃなれんね。」

と、スクルッタおじさんはいいました。

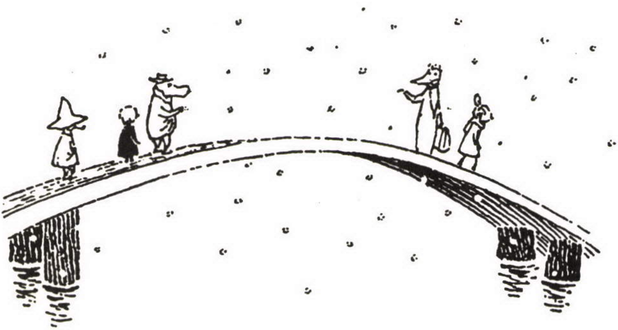
「だれか、あの女に、ご先祖さまの洋服だんすにさわるなって、注意したかね。」

でも、フィリフヨンカは、洋服だんすも、やっぱり、そうじしてしまいました。ほかのところよりも、二倍もねんいりにね。フィリフヨンカが、たった一つだけ、さわらないでおいたのは、洋服だんすの戸のうらがわについている、かがみのところだけでした。そこだけは、あいかわらず、ぼうっとくもっていました。

した。ものすごい大そうじでした。どこでも、だれも、いちども見たことのないほど大がかりな大そうじでした。みんな庭に出て、びっくりしてつっ立っていました。
　フィリフヨンカが、いそがしく出たりはいったり、いったりきたりするのが見えました。頭にハンカチをかぶり、ムーミンママのエプロンをしめていました。エプロンは大きすぎて、からだを三まわりもするほどでした。
　スナフキンは台所にはいって、おきわすれたハーモニカをさがそうと、見まわしました。
「かまどのたなにのせてあるわよ。」
と、フィリフヨンカが、いそがしそうにわきを通りぬけながらいいました。
「わたし、とても気をつかって、とっておいたのよ。」
「もうしばらく、貸しておいてあげてもいいよ。」
と、スナフキンは、口ごもりながらいいました。
　しかし、フィリフヨンカは、そっけなく答えました。
「持っていらっしゃいよ。わたしはいいの。自分のハーモニカを手に入れるから。ほら、ほら、気をつけてよ。あなた、ごみの中に足をつっこんでしまうわ。」
　おそうじが、また、できるようになったなんて、すばらしいことでした。フィリフヨンカはどんなごみがかくれているところでも、ちゃんと知っていました。ごみくずは、ふわふわした灰色

第19章

スクルッタおじさんはねむるのだ



八時半を五分すぎ、といっても、朝まだ暗いうちに、まどがつぎつぎと、みんなひらいていきました。あけはなしたまどのしきいには、マットやら、ふとんやら、毛布やらが、ずらりとならべてほされました。からからにかわいた気持ちのいい空気が、うちの中をふきぬけていき、あつくたれこめた雲の中に、うちの中からさらってきたほこりをまきあげました。

フィリフヨンカが、おそうじをはじめたのです。ありとあらゆるポットがならんで、かまどでお湯がわき、ブラシやぼうきれやおなべが、しまってあった戸だなからおどりだし、ベランダの手すりには、いっぱい敷きものがかかりま

フィリフヨンカは、何時間も、何時間も、食卓にこしかけたまま、感じで音色を追いかけながら、われをわすれて、ハーモニカをふいていました。音色をならべたような感じから、ふしらしくなり、そのうち音楽らしくなってきました。フィリフヨンカは、スナフキンの歌をふきました。それから、自分の作った曲もふきました。フィリフヨンカは、そばに近づきにくいほど、いっしんになってふいていました。心の中は、すっかりやすらかにおちついていました。人がきいていようが、いまいが、もう、とんじゃくしませんでした。

おもての庭は、ひっそりしていました。もそもそはいまわる連中は、みんないなくなりました。だんだん風の強くなる、いつものような、暗い秋の晩というだけでした。

フィリフヨンカは、両手の上に頭をのせて、食卓のところでねむりました。あくる朝の八時半までも、ぐっすりねむりこみました。それから目をさますと、あたりを見まわして、思わずひとりごとをつぶやきました。

「まあ、なんてちらかっているんでしょう。さあ、きょうは、ひとつ、大そうじをやらなくちゃ。」

た。けれど、雨の音しかきこえませんでした。みんな、いってしまったのです。
ほんとは、フィリフヨンカは、うれしくもないし、うきうきしてもいないし、まして、ちっともくたびれてなんていませんでした。まわりのものは、みんな、じっとしているみたいでした。スナフキンは、ハーモニカをテーブルの上におきわすれていきました。フィリフヨンカは、それをとりあげて、両手に持ち、あたりのけはいに耳をすましました。おもての雨の音がきこえるだけでした。

フィリフヨンカは、ハーモニカを口にあてて、ふいてみました。右へうごかしたり、左へうごかしたりしながら、音色に耳をすましました。食卓の上にこしかけました。あれは、どんなふしでしたっけ。ティーデロ、ティーデロ……。ふしをまちがえないでふくのはむずかしいわ。フィリフヨンカは、もういちどふいてみました。いろんな音色をふいてみながら、耳をとがらせました。

最初にきこえる音色が見つかりました。二ばんめは、ひとりでに出てきました。ふしどおりうまくふけそうになって、するっと、ちょうしはずれになりました。でも、また、もとにもどりました。つまり、感じでふいていけば、しぜんにうまくふけるのです。どうだったっけなんて、あれこれ考えながらふくことはないのです。ティーデロ、さあ、もう、あのふしが、そっくりうまく流れだしました。どの音色もぴったり、その音色のところにおさまって、もんくのつけようもありません。

ずをまきながら、さあっとおくのほうまで二つにわれて、また、とじました。例の、原生動物類の動物は、もう小さくなって、もとのすがたにもどっていったのです。なんでもかでも手もとにあつめて、つかまえてしまう、ムーミンパパの水晶玉は、もう、そのどぎまぎしているちびちび虫をすいこもうとして、口をあけていたのでした。

ホムサ＝トフトは家にひきかえして、屋根うらべやに、そっとあがっていきました。それから、うぐいあみの中にちんまりまるまって、たちまちねむってしまいました。

みんながひきあげてしまうと、あとにのこったフィリフヨンカは、げんなりした気持ちで、台所のまん中に立っていました。なにもかも、てんやわんやです。花づなはふみつけられているし、いすはひっくりかえっているし、ムーミンパパのちょうちんは、やたらと、ところかまわず、なんの上にでも、ろうをこぼしていました。フィリフヨンカは、ゆかにおちていたサンドイッチを一きれ、ひろいあげました。なにげなく、ちょっとそれをかじり、それから、ごみバケツの中にぽいとなげすてました。

「いいパーティーだったわ。」

と、フィリフヨンカは、ひとりごとをいいました。

おもてでは、また、雨がふりだしていました。フィリフヨンカは、じっと耳をすましてみまし

音がしました。ホムサは立ちどまって、そっとささやきました。
「しずかに、しずかに……。」
動物は、ホムサにむかってうなりました。かすかに、雨のしとしとふる音がきこえました。かみなりは、ずっと遠くのほうでした。ホムサとその動物は、先へすすんでいきました。すこしも休まずに、トフトは動物に話しかけていました。かれらは、あの水晶玉の前までやってきました。
今夜は、水晶玉が、青色にすみきっていました。玉の中の波のようなうねりが、暗がりに、くっきりうきでていました。
「ちっとも得にならないんだよ。」
と、ホムサはいいました。
「ぼくたちは、かみつかれてはこまるんだ。あいつらにかみつくなんてことは、いつまでたっても、できっこないんだ。ぼくのいうことを、信じてくれよね。」
ちびちび虫は、耳をすましていました。でも、ホムサのいっていることはちっともわからなくて、ただ、ホムサの声をきいているだけかもしれません。ホムサは寒くなってきました。長ぐつはびしょぬれでした。じれったくなっていいました。
「小ちゃくなって、かくれてしまえ！　このままでは、おまえさんは、やっていけないんだ。」
すると、ふいに、水晶玉がぼんやりくもりました。玉の中の、波のような青色のうねりが、う



「おまえね、どっかへいっちまわなくても、いいんだよ。」
と、トフトは、わけを話してやりました。
「ちょっとだけ、ここからはなれてくれれば、いいんだ。」
　トフトは、しばふの上をすすんでいきました。すると、動物は、わきへよけました。なんだかわけのわからない、ぶかっこうなかげがうごいていきます。草むらの中で、ポキポキと、小枝のおれる音がきこえ、動物のすすんでいく道で、草むらが二つにわれました。
（大きくなりすぎちまったんだ。）
と、トフトは思いました。
（あんまり大きくなりすぎて、ひとりでうまくやっていくことができないんだ。）
　こんどは、ジャスミンのしげみで、小枝のおれる

「とにかく、おしまいまでのこったのは、このわしなのだ！」

ホムサは、暗いおもてへ出てくると、お勝手口の階段にじっと立って、待っていました。空は、山よりもすこうしうすあかるく、山々は、ムーミン谷をかこんで、波のようにうねった黒いすがたをうきあがらせていました。あの動物は、なりをしずめていました。でも、ホムサは、動物が、じっと、自分のほうを見ている気がしました。

ホムサ＝トフトは、そっとよんでみました。

「ちびちび虫……電気虫、原生動物……。」

でも、動物のほうは、本に出ていた、へんてこな名まえが自分の名まえだなんて、わかるはずがありません。きっと、めんくらっているばかりで、なぜ、ホムサがうなるような声を出しているのか、さっぱりけんとうがつかないことでしょう。

トフトは、こわいよりも心配になりました。ちびちび虫が、自分かってに、どんなことをやらかすやら不安でした。いま、そいつはとても大きくなったし、おこっているし、おまけに、大きくなったり、おこったりすることに、すこしもなれていないのです。おっかなびっくり、ホムサは、一歩前に出ました。そのとたんに、動物がさっと一歩うしろにさがったのが、感じでわかりました。

やっと、ランプがともりました。スナフキンがマッチを見つけたのです。ヘムレンさんは、てれくさそうにわらいだしました。

「見てくれよ。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「サンドイッチの中に、手首までつっこんじまったよ。」

台所は、いつもの台所のすがたにもどりましたが、だれもこしかけようとはしませんでした。

ホムサがいなくなったのに気がついた人も、いませんでした。

「みんな、このままにしておきましょうよ。」

と、フィリフヨンカは、おちつかないようすでいいました。

「そのままにしておいてくれればいいわ。わたしが、あした、あらうから。」

「でも、もう、帰っちまうつもりじゃないだろうね。」

と、スクルッタおじさんは、どなりました。

「ご先祖さまは、もう、ねにいっちまったんだ。おもしろくなるのは、これからだわい！」

でも、パーティーをつづける気のあるものは、ひとりもいませんでした。みんな、大いそぎで、とてもお上品に、おやすみなさいといいあって、あくしゅをし、あっという間に、すがたをけしてしまいました。スクルッタおじさんは、退散する前に、ドンとゆかをふみつけていいました。

「マッチが見つからないわ。」
と、フィリフヨンカは、かなきり声でくりかえしました。
いすの足が、ゆかをこする音がして、テーブルの上で、なにやらひっくりかえりました。みんな、もう、立ちあがっていました。暗やみの中で、ぶつかりあいました。だれかがシーツにからまり、よろけて、いすにつまずきました。
ホムサ＝トフトは頭をあげました。あの動物がおもてにやってきたのです。重たい、大きなからだが、お勝手口のわきのかべに、ドスンとぶつかりました。かみなりが、また鳴っていました。
「あいつらが、おもてにいるわ！」
と、フィリフヨンカは、かなきり声をあげました。
「うちにはいってくるわ！」
ホムサ＝トフトは、ドアに耳をおしつけて、じっと耳をすましました。風の音しかきこえませんでした。ホムサは、かけ金をはずして、おもてに出ました。出ていったあとに、ドアが音もなくしまりました。

その黒いかげに色がついてきたように思えてきました。かげ絵の人たちは、いきいきと動いているように思えました。スナフキンのハーモニカは、気がつかないぐらいしずかで、かげ絵がおわってから、やっと、ハーモニカをふいていたのがわかったほどでした。もう、ムーミンたちは、うちについていていました。

「じつにいきいきとしたかげ絵だったわい。」

と、スクルッタおじさんは、ひとりごとをいいました。

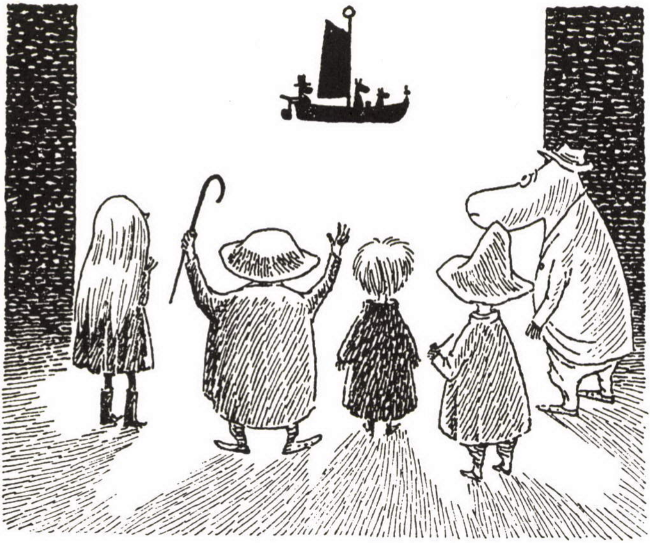
「わしは、かげ絵は、いろいろと見た。見たのは、みんなおぼえとる。しかし、こいつは、その中で、いちばんの傑作だ。」

幕はおりました。音楽がやみました。フィリフヨンカは、台所ランプをふきけしました。台所の中は、まっ暗になりました。みんな、暗やみの中で、じっと、あかりのともるのを待っていました。ちょっと、びっくりしながらね。

ふいに、フィリフヨンカが、声を出しました。

「マッチが見つからないわ。」

暗やみは、たちまち、おそろしい暗やみにかわりました。風がザワザワ鳴るのがきこえました。台所が、だだっぴろくなったように思えました。四方のかべが、おもての夜やみの中にとけこんでいきました。みんな、足の先が、すうっとしてきました。



ヨットはゆるやかに、シーツの海をすべっていきました。どんなヨットもくらべものにならないほど、しずかに、よどみなく、すべっていきました。ヨットには、みんなそろってのっていきました。ムーミントロール・ムーミンママ――ママはバッグを手すりにおしあてて、すわっていました――ムーミンパパは、ぼうしをかぶって、ヨットのともで、かじをとっていました。ムーミン一家は、うちへ帰るところでした。（でも、オールは、あまりかっこういいできではありませんでした。）

ホムサ＝トフトは、ママのところばかり、いっしんにみつめていました。時間はたっぷりありました。こまかいところまで、じっくりと、ながめることができました。

と、フィリフヨンカは、すずしい顔でいいました。フィリフヨンカは、かまどの前にいって、みんなのほうをむきました。
『ふるさとへ帰る』という題のかげ絵でございます。」
フィリフヨンカは、天じょうのあなあきパンを通してつるしておくさおに、シーツをかけてぶらさげました。それから、シーツのうらの、まき入れの箱の上に台所ランプをおきました。そしてちょうちんの火を、つぎつぎとふきけしていきました。
「こんど、あかりのついたときには、最後までのこったひとりが、食べられてしまうんだわ。」
と、ミムラねえさんが、そっとつぶやきました。
ヘムレンさんが、しいっとたしなめました。フィリフヨンカは、シーツのかげにきえました。まっ白い光が、シーツいっぱいにあかるくひろがりました。みんな、かたずをのんで、じっと見つめました。
白い光の中に、かげが一つ、さっととびこんできました。黒いかげ絵でした。ヨットでした。風のささやき声のような、しずかな、スナフキンのハーモニカが流れてきました。
ヨットのへさきには、すごいおちびさんがひとり、すわっていました。髪の毛を、球根みたいな形にゆっていました。
（あれは、ミイね。）と、ミムラねえさんは思いました。（あの子にそっくりだわ。でも、ほんとにうまくできているわね。）

と、フィリフヨンカは、うわのそらでいいました。フィリフヨンカは、長い鼻を上むきにして、鼻のあなをぴくぴくさせていました。かびくさいにおいがしたのです。なにかのくさったような、いやなにおいです。

　フィリフヨンカは、ホムサを見ました。ホムサは目をそらしながら、心の中で思いました。こいつは、電気のにおいだな。

　あたたかな台所にかえってくると、ほっとして、いい気持ちでした。

「さあ、こんどは、魔法を見たいもんだ。」

と、スクルッタおじさんはいいました。

「わしのぼうしの中から、うさぎをとりだせるやつはおらんかな。」

「だめよ。こんどは、わたしの余興の番よ。」

と、フィリフヨンカはきびしい声でいいました。

「なにをするんだか、わかっているわ。」

と、ミムラねえさんがさけびました。

「怪談をするのよ。だれかがへやから出ていって、食べられちまって、また、つぎの人が出ていって、食べられちまって……。」

「わたしのお見せしますのは、かげ絵ですわ。」

「だけど、こんなのって、わけがわからないよ。」
と、ヘムレンさんはさけびました。
　ミムラねえさんは、ヘムレンさんの足をけりました。
「おまえさんたちも、ご先祖さまと、乾杯するのだ。」
と、スクルッタおじさんはいいながら、わきにどきました。
「おや、あのかたは、どこへいっちまったんだろう。」
「わたしたちみたいにわかいものが、あのかたと乾杯するなんて、ですぎたことですわ。」
と、あわてて、フィリフヨンカがいいました。
「きっと、あのかたはおこってしまわれて……。」
「ご先祖さまのために、ばんざいをさけぼう。」
と、ヘムレンさんがどなりました。
「一、二、三、ばんざい、ばんざい、ばんざい！」
　みんなが、また、階段をおりて、台所にもどってきたとき、スクルッタおじさんは、ふりかえって、フィリフヨンカに注意しました。
「おまえさんは、もう、そんなに、おそろしくわかいって年でもあるまい……。」
「ええ、ええ。」

「でも、さめないうちにと思いましたの。いま、オーブンから出したてなものですから……。」
「いいから、とっとけ、とっとけ。」
と、スクルッタおじさんは、じれったそうにいいました。
「だけど、背中のうしろにかくしておけよ。ご先祖さまが、そいつを見て、ますますきげんをわるくするといけないからな。それから、ご先祖さまのために、乾杯できるように、みんなさかずきを持ってくるのだ。」

フィリフヨンカが、手に持ったちょうちんを、高く上にあげました。スクルッタおじさんは、洋服だんすの戸をひらきました。おじさんは、ふかぶかとからだをまげて、おじぎをしました。ご先祖さまも、そのとおりにしました。
「こいつらを、あなたに紹介しようなんてつもりはないんですよ。」
と、スクルッタおじさんはいいました。
「それに、紹介したって、あなたは、すぐに名まえをわすれちまうし、どっちにしろ、そんなことは、たいしたことじゃないのだ。」
おじさんは、ご先祖さまのほうへ、さかずきをさしのべました。ふたりのさかずきがふれあって、カチッと音をたてました。

ティーをはじめてしまったり、とくべつのお客が、階段をおりてくるのをたすけて、おつれしなかったりな。おまえさんたちは、生まれたときがおそすぎたんだ。おまえさんたちは、礼儀作法を知らなすぎるよ。おまえさんたちは、生まれてからいちども、ジェスチャー＝ゲームを見たことがないのかね。礼儀や作法を知らないで、余興だなんて、いったい、どういうつもりだい、とおききしないではいられないね。耳のあなをほじって、これからわしのいうことを、よくきいてくれよ！　余興というものはな、自分のいちばんりっぱな持ちものを、人に見せてやることだ。わしは、これから、おまえさんたちに、わしの友だちのご先祖さまを見せてやるよ。あの人は、くたびれているんじゃないのだ。足は、ちっともよわっちゃいない。おこっているだけなのだ！」

スクルッタおじさんがいきまいているあいだに、フィリフヨンカは、ほかほかしているチーズサンドイッチを、みんなにくばってまわりました。おじさんのきげんをわるくしないように気をつけながら、でも、とにかく、くばってしまいました。スクルッタおじさんは、サンドイッチがくばられていくのを目で追っていました。おじさんのさらにものっかるのが見えました。おじさんの声は、いちだんと高くなり、とうとう大声でどなりました。

「わしの余興のじゃまをするのか。」

「まあ、ごめんあそばせ。」

と、フィリフヨンカはいいました。

「とんでもございませんわ。」
と、ミムラねえさんは答えました。
「わたし、おどらないではいられないんですわ。あなただって、そうしなくちゃ。」
フィリフヨンカは、立ちあがっていいました。
「しないではいられないということと、しなくちゃということとは、ちがいますわ。しなくちゃということは、しないでいてはいけないということと、おんなじことで……。」
フィリフヨンカは演説をはじめる気だな、と思ったものですから、みんなは、さかずきのほうに手をのばそうとしました。でも、フィリフヨンカは、あとをつづけるようすがなかったので、みんな、もっと音楽、音楽と、さけびはじめました。でも、スクルッタおじさんは、もう、あきていました。自分のナプキンをまるめだしました。ナプキンは、どんどん小さくかたまっていきます。
どうも、ご先祖さまは、気分をがいしたらしいな。とくべつのお客は、ちゃんとよびにいって、いっしょにつれてこなくてはいけないのだ。むかしは、そうしたものだよな。みんな、ちっとも、礼儀を知らないんだから。
とつぜん、スクルッタおじさんは立ちあがって、ドンとテーブルをたたきました。
「わしらは、たいへん失礼なことをしてしまったぞ。とくべつのお客がまだこないうちに、パー



音楽と動きまわるけはいでいっぱいでした。ミムラねえさんの長い髪は、きらきらと、日の光がおどっているように見えました。なんて美しいんでしょう。なんて、たのしいのでしょう。

あの動物が、重い足どりで、すさまじいいきおいで、どうしていいかわからずに、むやみと家のまわりをぐるぐるはいまわっていましたが、だれにもきこえませんでした。お客たちは、みんな、足で拍子をとりながら、ディーデリ、ティーデロと歌いました。

ミムラねえさんは、けとばすように長ぐつをぬぎすて、ネッカチーフをゆかになげました。紙の花づなは、かまどのぬくもりでゆれ、みんないっせいに、手をたたきだしました。すると、スナフキンは、一声大きくさけんで、ふきおわりました。ミムラねえさんは、とくいそうに、大声でわらいました。

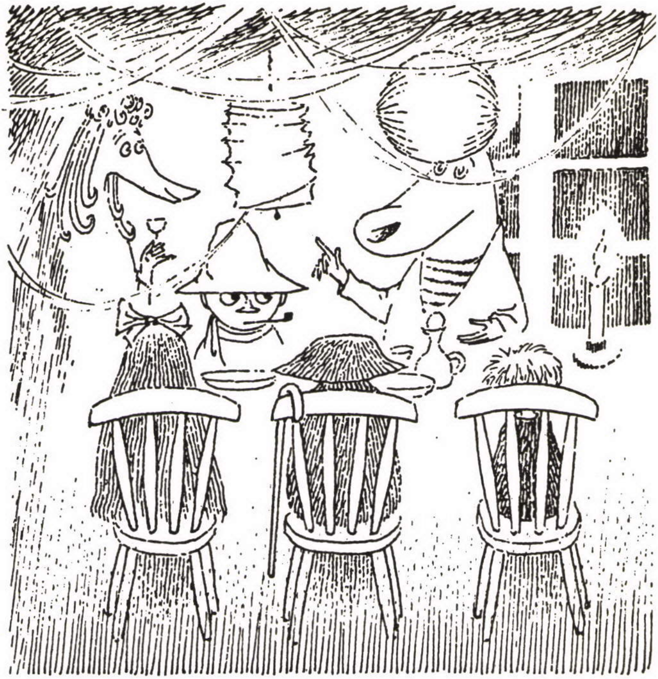
みんな、どっと、さけび声をあげました。

「ばんざい！　ばんざい！」

ヘムレンさんは、心の底から感心していいました。

「ほんとうに、どうも、ありがとうございました。」

のかね。それとも、余興を、のろくさと先へすすめるかね？」
おじさんは、ご先祖さまが心配になってきました。もしかすると、ご先祖さまも、足がくたびれたのかな。階段をおりてこられないのかな。でなかったら、気分をがいしたのかな。それとも、ただ、ねむっているだけなのだろうか。いつも、なにかがくるっとるわい、と、スクルッタおじさんは、はらがたってきました。百歳をこえてしまうと、まったくだらしがなくなってしまうな。失礼だよ、それに……。
「ミムラねえさん。」
と、ヘムレンさんが、名まえをよびあげました。
「おねがいします。ミムラねえさん！」
ミムラねえさんは、はにかみながら、すっかり顔をほてらせて、へやのまん中に出ていきました。髪の毛は、ひざまでたれていました。うまく髪があらえたことは、ひとめでわかりました。
ミムラねえさんは、スナフキンの顔を見て、うなずいて、あいずしました。スナフキンは、ハーモニカをふきはじめました。とてもゆるやかなふしでした。ミムラねえさんは、両手を上にあげて、小きざみに、足さぐりで、まわりだしました。シュー、シュー、ティーデリオ、と、スナフキンは、ハーモニカをふきました。ふしは、知らないうちに、だんだんかわってきて、陽気なちょうしになってきました。ミムラねえさんのおどりが、はやくなりました。もう台所の中は、



「そんなにどなるなよ。どならなくてもきこえるのだ。」
と、スクルッタおじさんは、おうむがえしにいいました。
「で、それは、どういうことだい。」
「はらをたてたときのことですわ。」
と、フィリフヨンカが教えました。
「あはん、なあるほど。」
と、スクルッタおじさんはいいました。
「それで、もう、わからないところはないわい。まだ、なにかを書いたものが、ほかにもいる

こしもおきなかった。歯もするどくないし、つめも、はえたときのままだし、視力もぼんやりしていた。

それにひきかえ、からだのほうは、おどろくほどかさばり、大きくなっていった。ずばりいうなら、一千年ものあいだ、岩のさけめやら、ほらあなの中で、ぼんやりくらしてきた、その連中としては、すっかりとまどったにちがいないほど、大きくなったのだ。

つまり、いま、われわれの目の前にいる動物というのは、まったく、あきれてしまうような体形をもった動物なのである。草食動物に見られる特徴はすべてそなえているとともに、とてつもなく大きくて、のろまな体形をもっており——なんとも説明のつかない、役たたずの攻撃性をそなえたところの……。」

「その、おしまいのほうのことばが、よくききとれなかったが。なんだって？」

と、スクルッタおじさんがたずねました。おじさんは、ずっと、耳に手をあてていていました。おじさんは、あいてのいおうとすることがけんとうのつくときには、耳は遠くならないのですがね。まあ、そんなことは、おじさんと話をするときには、たいがい、だれでもしょうちしていました。

「攻撃性よ。」

と、ミムラねえさんが、むやみと大きな声で答えました。

みんな自分のグラスをのみほしました。いちばんちっちゃな、いちばんきれいなグラスでした。足つきで、グラスのふちには花づなもようがついていました。

乾杯がすむと、みんなは着席しました。

「さて、そこで。」

と、ヘムレンさん。

「いよいよ、余興のはじまりですが、ぼくたちの中で、いちばんぱっとしないやつから、やることにしましょう。つまりですね、いちばんびりっけつのやつを、いちばん先頭に出してやるのは、もっとも正しいやりかたじゃないでしょうか。でしょう？　では、指名します。ホムサ＝トフトくん。」

ホムサは、本のおしまいのほうを手あたりばったりにひらいて、ぼそぼそと、低い声で読みはじめました。むずかしいことばの前にくると、ひと息ついて休んで、また、つづけました。

「二百二十七ページ。いまここで、復元してみようとしている、その動物の体形が、生理学的な観点からの、元来の草食動物の特徴をのこしつつ、同時に、周囲の環境にたいして、いわば攻撃的な体形に、たえず変化していったということは、まったく異例な事態であった。

肉食動物が進化するときに、一般に生ずる変化、たとえば注意力が鋭敏になるとか、すばしっこくなるとか、力が強くなるとか、そのほか狩猟本能に関係あるような、いろいろな変化は、す

と、スクルッタおじさんは、ぶつぶついいながら、さっそく一秒、二秒とかぞえだしました。みんな起立して、グラスを手に持ちました。きんちょうしたいっしゅんでした。「二十四秒、二十五秒、二十六秒。」と、スクルッタおじさんはかぞえていきました。きょうは、足がちょっぴりくたびれていました。ほんとは、おじさんのためにせいしゅくにする、三十秒でなくてはいけないのです。とにかく、おじさんのためのパーティーなんですから。ムーミンの家族のためではなくてね。ムーミンたちは、おなかがいたくならなかったのですからね。それに、おじさんは、ご先祖さまが時間までにまにあわなかったのが、ものたりない気がしていたんです。

お客たちが、ムーミンの家族に敬意を表して、せいしゅくにしていると、おもての、お勝手口の階段のあたりで、かすかに、なにかが、ドシンドシン歩いていくような、ききなれない音がしました。うちのかべづたいに、手さぐりですすんでくるみたいな音でした。フィリフヨンカは、ちらっと、すばやく、ドアのほうを見ました。かけ金はかかっています。目が、ホムサの目とぶつかりました。ふたりとも鼻を上にむけて、くんくんにおいをかいでみました。でも、なにも口に出しませんでした。

「乾杯。」

と、ヘムレンさんがさけびました。

「ぼくたちの友情のために、乾杯！」

オールこぐ手に、ずしりとつたわる重みが

十二月　ムーミン谷にて　ヘムレン

みんな、拍手しました。

「値うちを知る、か。」

と、スクルッタおじさんは、そのことばをくりかえしました。

「いや、いいことばだ。わしの小さかったころには、よく、みんなが、そんなことばを口にしとったよ。」

「ちょっと待ってください。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「拍手してくださるあいては、ぼくではないんです。ムーミンの家族に、感謝の気持ちをしめして、三十秒間、せいしゅくにしてください。ぼくたちは、あの人たちの食料を食べているんです——つまり、食料ののこりをですね。あの人たちの木の下を歩き、あの人たちの作った、おおらかで、友情にあふれて、たのしくくらす、そういうふんいきの中にひたっているんですからね。一分間、ごせいしゅくに！」

「三十秒って、いったじゃないか。」

たしは、詩を一つ書きました。どうぞ、この夕べを、その詩の朗読からはじめさせていただきたいと思います。」

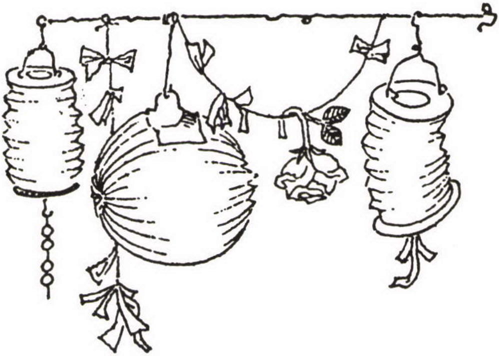
ヘムレンさんは、一まいの紙をとりだして、大声で読みはじめました。感激のあまり、声がふるえていました。

しあわせとは、なんだろう――
日がくれて、自由になったひとときに、ずしりと手につたわるオールの重み
とうしんそうとあしをかきわけ、どろ沼からボートをこぎだし
うなばらにひろがる自由の値うちを知ることだ

ああ、人生とはなんだろう
人生は、ひとときのゆめ、ふきあれる、きみょうなあらしだ
道にまよえば、苦しみはひとしお、なすすべもなく、とほうにくれて
うき世の重みは、十重二十重
ずしりと重たい　荷物のようだ
ああ　こいしい

第18章

シーツの上を「冒険号」は走る



さあ、ちょうちんに、すっかりあかりがともりました。暗いまどガラスをほんのりそめたオレンジ色や、みどり色の自分のほかげを、ちょうちんたちがじっとながめています。お客さんが、台所にはいってきました。みんな、たのしそうにあいさつをかわして、着席しました。でも、ヘムレンさんだけは、こしかけないで、自分の席の、いすのうしろに立っていました。そして、こういいました。

「このパーティーは、わたしたちみんなが、一つの家族であるしるしにもよおす、家族の夕べであります。このとくべつのひとときのために、また、ムーミンパパに敬意を表するために、わ

と、スクルッタおじさんは、ばかにしきってどなりました。
「そんなものは、わすれてきたよ。そればかりじゃない。びっくりするなよ。わしは、また、めがねを八つともぜんぶ、おとしちまったんだ！」
「おめでとうございました。」
と、フィリフヨンカは、そっけなくいいすてました。
「あなた、その花輪を、まっすぐ、洋服だんすのところへ、お持ちになったほうがよろしいんじゃございませんの。そのほうが、もっと、ていねいですわ。」
パタンと、かすかに音をたてて、フィリフヨンカは、また、ドアをしめました。

ほそめにドアをあけて、いいました。
「まだ、早すぎますわ。」
「あっといわせることがあるんだ。」
と、スクルッタおじさんはささやきました。
「招待状がいっているだろう、あの人のところにさ。洋服だんすの中の人だよ。だから、こいつを、おまえさん、その、とくべつのお客の席におくのだ。」
おじさんは、木の葉やこけを輪にして作った、しめっぽい、大きな花輪を、ドアのすきまからつっこみました。フィリフヨンカは、かれ葉を見ると、まゆをしかめました。
「わたしのお台所に、ばいきんを入れるのは、ごめんだわ。」
と、フィリフヨンカはいいました。
「だって、これは、もみじの葉だぞ！　小川であらってきたのだぞ。」
と、スクルッタおじさんは、口をはさみました。
「ばいきんは、水が大すきだわ。」
と、フィリフヨンカはやりこめました。
「あなた、もう、お薬をおのみになったの？」
「パーティーに出るのに、薬が入りようだと、おまえさんは、ほんとうにそう思っているのかい。」

し台の上において、絵をかきはじめました。どういう絵かというと、ヨットに人が四人のっているところです。ふたりは大きな人、ひとりはちょっと小さくて、もうひとりはまるっきりちび。いちばんちびは、へさきにすわっていました。思いどおりにうまくはかけませんでした。おまけにけしゴムもないし。でも、思いつきがかんじんなのです。

絵ができあがると、それを切りぬいて、ヨットのところを、ほうきの柄に、くぎでしっかりうちつけました。てきぱきと、すこしもまごつかないでやりました。ずっと、口ぶえをふきつづけながらね。口ぶえのふしは、スナフキンの曲ではなくて、フィリフヨンカが自分で作ったふしでした。おまけに、その口ぶえときたら、絵をかいたり、くぎをうちつけたりするよりも、ずっとじょうずでした。

夕やみがせまっていました。いよいよ、フィリフヨンカは、台所ランプに火をともしました。きょうはわびしい気持ちはしません。胸がわくわくしていました。ランプの光が、かべを、あわくてらしていました。フィリフヨンカは、ほうきを持ちあげてみました。ヨットにのっているムーミン一家のかげ絵が、かべ紙の上にうかびあがりました。さあ、こんどはシーツを用意しなくちゃ。白い画面の海の上を、かげ絵のヨットがすべっていくんです……。

「おい、あけろ！」

と、スクルッタおじさんが、応接間のドアの外からどなりました。フィリフヨンカは、そっと、

まあ、なんて芸術的におかざりができあがったんでしょう。さあ、こんどは、すこし早めに、ベランダで夕食です。あついさかなのスープでね。七時すぎたら、ほかほかのチーズサンドと、りんご酒。りんご酒は、パパの衣装戸だなの中で見つかったし、くずチーズのはいったかめは、食べものおき場の、いちばん上のたなにありました。このつぼには、「野ねずみのえさ」と書いたラベルがはってありました。

　フィリフヨンカは、おしとやかな手つきで、ナプキンを食卓にならべました。どのナプキンも白鳥の形におってありました。（もちろん、スナフキン用のナプキンはありません。スナフキンは、ナプキンはおことわりなのです。）フィリフヨンカは、しずかに口ぶえをふきました。ひたいには、きちんとカールのかかった髪が、こまごまと、いっぱいかざりのようにならび、見れば、まゆずみもぬってあります。

　かべ紙のうらで、もそもそはっていたなにやらも、はめ板のへりをシュッといっきにこすっていったなにやらも、いなくなりました。ちゃたて虫の音もやみました。いまは、そんなことにかまっているひまはないんです。自分の番にする余興のことで頭がいっぱいなのでした。かげ絵「帰ってきたムーミン一家」という余興です。とてもいいおしばいになるわ、と、フィリフヨンカは、いい気持ちになって、そう思いました。みんな感激しちゃうわよ。

応接間のドアをしめ、それから台所にはいって、ドアにかぎをかけました。ボール箱を、なが

「うそっぱちだ、そんなこと。ムーミンたちはおこったことなんてないんだ。」
「じっとしていてよ。」
と、ミムラねえさんはいいました。
「そんなにはねまわったら、髪をとかせないじゃないの。それから、いっときますけどね。ムーミンパパだってムーミンママだって、ムーミントロールだって、おたがいの顔を見るのもいやになることが、ちょいちょいあるんですからね。さあ、こっちへきて。」
「いくもんか。」
と、ホムサは、大声をはりあげました。
「ムーミンママは、そんな人じゃありませんよだ。ママは、いつも、かわりやしないんだ。」
　ホムサは、応接間のドアをさっとひらき、バタンとしめて出ていきました。ホムサは、ミムラねえさんに、まんまといっぱいくわされたのでした。ミムラねえさんは、ムーミンママのことは、なにも知らないんですから。ママは、いつだってやさしくて、けっしておこったりしないのです。
　フィリフヨンカは、一つのこった花づなを、最後につるしました。青色の花づなでした。それから、一歩うしろにさがって、自分の台所をながめてみました。
　この台所ときたら、世界じゅう、どこにもないくらいにほこりっぽくて、きたならしいのに、

た、なんにもできないんですって。でもさ、とにかく、はらをたてることはできたわね。テーブルの下にもぐりこんでさ、なにもかも、めちゃくちゃにしちまったじゃないの。」

　ホムサは、じっと立っていました。髪をとかしてもらうのはすきでした。

「ミムラねえさん。」

と、ホムサははにかんだ声でいいました。

「もし、きみがさ、とても大きな動物でさ、はらをたてたら、どこへいくと思う。」

　ミムラねえさんは、とっさに答えました。

「うちのうらね。お勝手のうらの、きみのわるい森の中よ。はらがたつと、あそこへいってしまったものよ。」

　ミムラねえさんは、くりかえしくりかえし髪をとかしました。ホムサは、たずねてみました。

「いってしまったって、きみが、はらのたったときのことなの？」

「ちがうわ。ムーミンのうちの人のことよ。」

と、ミムラねえさんはいいました。

「あの人たちは、ゆううつなとき、はらのたつとき、ひとりになってせいせいしたいときには、うらへいったわ。」

　ホムサは、足を一歩うしろへひいて、大声をあげました。



「ちょっと、ちょっと、ホムサちゃん。」
と、ミムラねえさんはいいました。
「あんた、パーティーでなにをするか、もうきめたの?」
「ぼく、なんにもできないもの。」
と、ホムサは、にげごしになって答えました。
「まあ、こっちへいらっしゃいな。」
と、ミムラねえさんはいいました。
「あなた、髪をとかさなくちゃいけないわ。」
　ホムサは、すなおに、ミムラねえさんの前にいって立ちました。ミムラねえさんは、ホムサのもじゃもじゃの髪をとかしはじめました。
「あなた、毎日、十分間ずつでいいから、髪をとかせばいいのに。そしたら、こんなにひどくなりはしないのに。」
と、ミムラねえさんはいいました。
「毛の質だっていいし、色もすてきだわ。まあ、あな

「パーティーがあるぞ！　わしのために、大パーティーをしてくれるんだ！」
ホムサは、走って通りすぎようとしました。でも、スクルッタおじさんは、つえの頭でひっかけて、ホムサをつかまえました。
「わしの話をきくんだ。」
と、おじさんはいいました。
「わしは、ヘムレンさんにいったんだ。ご先祖さまは、わしの親友だってな。その親友は、もう百年間も、パーティーによばれたことがないんだ。だから、よんであげなきゃいけないってな。とくべつのお客としてな。はい、はい、わかりました、と、ヘムレンさんはいったよ。でも、わしはな、おまえたちみんなにいっておくぞ。ご先祖さまがこなければ、わしは、パーティーにいかないぞ。わかったかな。」
「はい。」
と、ホムサはつぶやきました。
「わかったよ。」
でも、ホムサは、頭の中で、あの動物のことしか考えていませんでした。
ベランダでは、ミムラねえさんが、いすにこしかけて、うす日のさす中で髪をとかしていました。

だろう、と、ホムサは、ほんきで考えてみました。パイプをすうのは、かっこうがいいにきまっているけれど。おそらく、だれのさしずもうけずに、自分のすきなところへいって、とじこもっているからかもしれません。だけど、そんなことは、ぼくだってしているんだ。でもりっぱだなんて、だれも思ってくれやしない。ぼくがちびすぎるせいだな。

ホムサは、庭をぶらぶら歩きながら、あの、大きなつぼのところまでやってきてしまいました。そこまでくると、思いました。ただ、しんせつなだけで、人のことが、ほんとうにすきではないような友だちなら、ほしくないや。自分がいやな思いをしたくないから、しんせつにしているだけの人もいらないや。こわがる人もいやだ。ちっともこわがらない人、人のことを心から心配してくれる人、そうだ、ぼくは、ママがほしいんだ。

秋になると、大きなつぼのおいてあるところは、気のめいるようにさびしくなります。つぼのかげに、なにやらかくれて、待ちぶせしているように思えます。

でもホムサは、もう、あの動物は、そこにはいない気がしていました。どこかへいってしまったのです。新しくできた歯を、ギシギシかみならしながら、いってしまったのです。その歯を、あの動物にあげたのはホムサ＝トフトでした。

スクルッタおじさんは、橋の上にすわっていねむりをしていました。ホムサがそばを通ると、びくっと目をさまして、どなりました。



んにもしていないのかもしれません。ただ、だまってすわっていて、それで、だれよりももの知りなんです。スナフキンのいうことは、なんでもすてきにきこえるし、ほんとうだという気がします。ところが、スナフキンと別れて、あとでひとりになってみると、いまきいてきたことの意味が、さっぱりわからなくなっていて、といって、また、ききにひきかえすのもはずかしいという気になるのです。それに、ききにいっても、答えてなんてくれません。紅茶の話や、お天気の話をしながら、パイプをかんで、あの、すごくおこったような、わけのわからない音を出すので、ききにいった人は、なんだか、できっこないことを、たのんでしまったような気になります。
なぜ、みんなは、スナフキンを尊敬するん

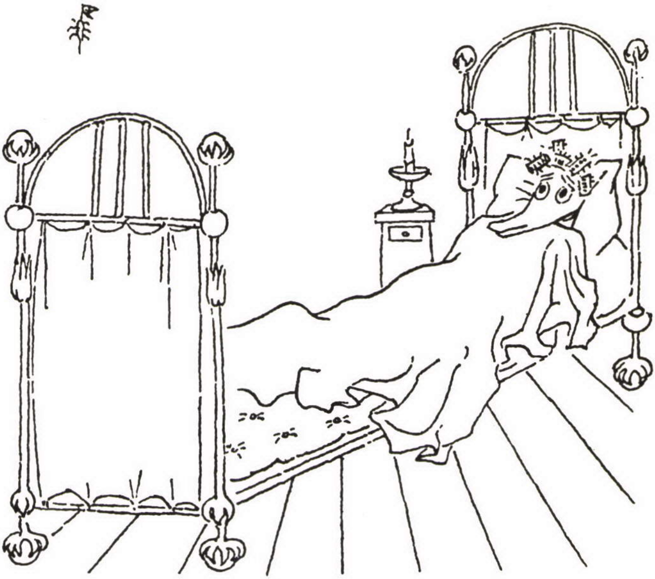
いんです。ホムサも、そのことは知っていました。それに、うんとはしゃいで、ぺちゃくちゃ、おしゃべりもしないといけないんじゃないかな。ホムサは、ちっともはしゃぐ気持ちにはなれませんでした。

それよりも、なぜ、日曜日のお昼ごはんのとき、あんなにひどくはらがたったのか、ひとりきりで、とっくり考えてみたい気がしていました。まるっきり、いつもの自分とちがう自分が、自分の中からとびだしてきたなんて、ほんとに、そらおそろしいことでした。それは、自分の知らない人みたいな自分でした。あんな自分が、もういちどあらわれたりしたら、みんなの前で、まままた、はずかしい思いをしなくてはなりません。

あの日曜日のあとからは、木の家は、ヘムレンさんがひとりで作っていました。もう、大声でどなって、ホムサをよびはしませんでした。おたがいに、気まずい思いをしていたのでした。

どうして、あいつがあんなにしゃくにさわる気になったんだろうと、トフトは、あれこれと考えてみました。なんにも、しゃくにさわることなんてないし、いままでだって、いちども、はらのたったことはなかったんだ。なにかが、むくむくとわいてきて、あふれだして、そうして、ああなっただけなんだ。滝になったみたいだったんだ。ぼくは、ほんとは、とてもおとなしいんだ。

その、おとなしいホムサは、川に水をくみにいきました。バケツにいっぱいくんで、テントの前におきました。テントの中では、スナフキンが、きっと、木のさじを作っています。いや、な



なかかえこんで、台所へ持っていき、ながし台の上にひろげました。それから、髪をしめらせて、毛巻き紙でセットしました。そうするあいだずっと、フィリフヨンカは、しずかに口ぶえをふきつづけていました。すきとおった、きれいな口ぶえで、自分では気がつかないけれど、とてもじょうずな口ぶえでした。

みんなのしているパーティーの話はホムサ＝トフトの耳にもはいっていました。ヘムレンさんは、そのパーティーを、家族の夕べなんてよんでいました。家族の夕べとなると、みんながひとりずつ、なにか余興をしなくてはいけな

て。」
そういって出ていくと、なんとまあ、器用に、ひょいと足でドアをしめました。
フィリフヨンカは、心臓が、どきどきしてきました。わたしが芸術家ですって。ヘムレンさんが、わたしは芸術家だっていったんですって。なんて、しびれちゃうことばでしょう。
フィリフヨンカは、いくども、芸術家、芸術家とささやくような声で、ひとりでくりかえしました。
夜がふけて、ひっそりしずかになると、フィリフヨンカは台所ランプを持って、ムーミンママの衣装戸だなの上につってある戸だなの中から、おかざりを見つけてくるために、台所を出ていきました。ちょうちんとリボンのはいっているボール箱は、いちばん上のたなの右手の、いつものおき場所にありました。みんな、すっかりもつれあって、ろうが、いっぱいこびりついていました。イースターにつかうおかざりや、ばらもようのついた誕生祝いのプレゼントの、古い包み紙もはいっていました。包み紙には、お祝いのもんくが書いてあって、まだきえていませんでした。「愛するパパへ」「誕生日おめでとう。ヘムレンくん」「わたしたちの、かわいいミイちゃん。だいて、ほおずりしてあげる」「まごころより、しあわせをお祈りする。ガフサンへ」
あの人たち、ガフサンは、ほかのみんなほどすきでなかったようね。
さて、いよいよ、紙で作った花づなが出てきました。フィリフヨンカは、あれやこれや、みん

と、ミムラねえさんはいいました。

「それは、わるくないわね。そして、それから、ひとりずつきえていって、おしまいには、ぽっかり、あなのあいたようなへやに、ねこだけのこって、からだをぺろぺろなめるのね。」

フィリフヨンカは、ぶるっと身ぶるいしました。

「もう、お湯がわいているんじゃないの？」

と、フィリフヨンカはいいました。

「ねこなんて、ここにはいないわよ。」

「あんなのわけなく作っちゃうわよ。」

と、ミムラねえさんは、にやりとわらいました。

「空想して、ねこがいるわ、と思えばいいのよ。そしたら、もう、あんたにも、ほんとにねこがいるのよ。」

ミムラねえさんは、お湯のなべを火からおろして、ひじでドアをあけました。

「おやすみなさい。」

と、ミムラねえさんはいいました。

「髪をゆうのをわすれないでね。それから、ヘムレンさんがいっていたわよ。あなたに、お台所のおかざりをしてもらいたいって。あなたみたいな芸術家は、みんなの中にはいないからですっ

と、ミムラねえさんはきめつけて、水を火にかけました。
「ほんとは、あなた、そういうあなたでいるのがいちばんたのしいのね。わたし、パーティーには髪を長くたらすことにしたの。」
「パーティーですって？　どこのパーティー。」
と、フィリフヨンカが、声をとがらせてききました。
「スクルッタおじさんのためのパーティーよ。」
と、ミムラねえさんは答えました。
「あした、お台所で、みんなでパーティーをするの。あなた、知らないの？」
「まあ、そうなの。それはニュースだわ。」
と、フィリフヨンカは、大声をあげました。
「とてもいいニュースだわ。知らないものどうしが、漂流して陸にうちあげられたり、大雨や大風で、とじこめられたりしたときには、みんな、そういうパーティーをするのよ――そして、パーティーのさいちゅうに、ふっと、ろうそくをけすのよ。すると、もういちど火をつけたときには、みんなの心がしっくりとけあって、ひとりの人みたいになっているの。」
ミムラねえさんは感心したように、まじまじと、フィリフヨンカの顔をながめました。
「あなた、ときどき、びっくりしてしまうような、いいことをいうわね。」

一日じゅうで、いちばんすてきに思えるのは、どらを鳴らしてもいいときと、暗くなって、ごみバケツを、お勝手口の階段に出しにいくときでした。スナフキンは、毎晩のようにハーモニカをふいていましたから、フィリフヨンカは、もう、その曲をおぼえてしまいました。でも、口ぶえでその曲をふくのは、ぜったいにだれにもきこえないと、安心できるときだけでした。

ある晩、フィリフヨンカは、ベッドのはじにこしかけながら、ベッドにはいらなくてもいいような口実をなにか見つけようとしていました。

「もう、ねむったの?」

と、ドアの外から、ミムラねえさんがききました。それから、へんじを待たないで、ずんずん中にはいってきていいました。

「わたし、髪をあらうのに、雨水が入りようなんだけど。」

「まあ、そう。」

と、フィリフヨンカ。

「川の水だっていいように思えるけれど。そのまん中のバケツが雨水よ。そっちが井戸水だわ。でも、雨水で髪をあらってもいいわよ。そうしなくてはならないのならね。ゆかに、はねをとばさないでね。」

「あなた、また、いつものあなたにもどったみたいよ。」

第 17 章

大パーティーの準備



フィリフヨンカは、洋服だんすのおくにいた、例の、あれたちの話は、もうしなくなりました。こまごまと、うちの中のせわをやくことばかり考えて、そういうことで、いつも頭をいっぱいにしようとしていました。せわやきにはなれていますからね。でも、夜になると、かべ紙のうらを、なにかがはっているような、ききとれないぐらいかすかな音がきこえました。はめ板のへりを、シュッと、いっきにこすっていくような音のするときもありました。――いちどなど、まくらもとのかべの中で、ちゃたて虫が、カラカラ音をたてたことまでありました。人が死ぬのを知らせる音です。

「だがな、いっとくが、わしのききたくないことは、もう二度と話さんでくれ。わしはな、パーティーをしてもらえるまでは、ほんとに、はればれした気持ちにはなれんぞ……。」

「おじさんの長ぐつをぬがせておあげなさい、トフト。」

と、ヘムレンさんがいいました。

「長ぐつをぬがせてあげるんだ。おなかがいたくなったら、いちばん先に、それをやらなきゃ。」

ホムサは、スクルッタおじさんの長ぐつのひもをほどいて、ぬがせました。と、かたっぽうのくつの中に、しわくちゃになった白い紙があったので、ひろいだしました。

「手紙だ！」

と、スナフキンがさけびました。スナフキンは、そっと手紙のしわをのばして、読みあげました。

「どうぞ、ストーブで火をたかないでくださいね。中にご先祖さまがすんでいますから。

ムーミンママ」

と、ミムラねえさんは、にやりとわらいました。
「見つかったぞ！」
と、ヘムレンさんが、おもてでどなりました。応接間のドアが、ぱっとひらいて、たちまちへやの中は、ざわざわと、なだれこんだ人たちでいっぱいになりました。
「バスケットは、ベランダの下にあったぞ。」
と、ヘムレンさんはさけびました。
「ブランデーは、川のむこう岸においてあった。」
「小川だよ。」
と、スクルッタおじさんはいいなおしました。
「まず、ブランデーをいただこうかい。」
　フィリフヨンカが、ちょっぴりひとたらし、ブランデーをつぎました。おじさんが、それをのみほすあいだ、みんな、まばたきもしないで、じっと見つめていました。
「お薬は、一種類だけめしあがるの。それとも、あれこれ、すこしずつめしあがる？」
「なにも、いらんよ。」
と、スクルッタおじさんは答えて、ため息をつきながら、クッションの中にからだをうずめました。

なって、思いました。おなかのいたみは、おさまっていました。

　ミムラねえさんがはいってきて、ベッドのはしにこしかけました。

「あのねえ、スクルッタおじさま。」

と、ミムラねえさんはいいました。

「おじさまは、とても元気だわ。ちっともわるいところなんてないのよ。わたしとおんなじよ。」

「そうかもしれないな。」

と、スクルッタおじさんは答えました。

「だがな、わしはおきないぞ。パーティーをしてもらえるまではな。長い人生を生きてきた年よりのために、ほんのささやかなパーティーでいいんじや。」

「おどりのすきなミムラねえさんのために、大パーティーをしてもらってもいいわね。」

と、ミムラねえさんは、考え考えいいました。

「そんなのは、だめだ！」

と、スクルッタおじさんはどなりました。

「わしと、ご先祖さまのために、ごうせいにやってもらうのだ。ご先祖さまは、もう百年間も、パーティーをしてもらっていないんだぞ。洋服だんすの中で、かなしんでござるわ。」

「そう思うんなら、どうぞ、おかまいなく、そう思ってくださいな。」

おじさんは、上に、毛布を何まいもかさねてかぶって、ソファーに横になりました。それから、ぼうしを顔にのっけました。

「あなた、ほんとは、おいくつなの。」

と、フィリフヨンカは、おそるおそるたずねてみました。

「わしは、まだまだ、死ぬなんて思っちゃいないぞ。」

と、おじさんは、うきうきした声で、いってのけました。

「ところで、おまえさんのほうは、いくつなんだい。」

フィリフヨンカは、応接間からきえてしまいました。うちの中では、あっちでもこっちでも、ドアがあいたり、しまったりしていました。庭は庭で、走りまわる足音や、どなり声で、そうぞうしいかぎりです。みんな、スクルッタおじさんのことで、頭がいっぱいでした。

（あんなちっぽけなバスケットだから、どこにだって、おいとけるものな。）

と、おじさんは、なんとなく、安心したような気持ちに



「ムーミンママは、だれかが病気になると、黒い、すぐりのジュースを作っていたわ。わたし、知っているわ。でも、それはとにかくとして、わたしはわたしで、すぐりのジュースを作ったのよ。」

「さあ、もう、しずかにしてくれよ。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「そしたら、どうしたらいいか、話すからさ。つまりだね、問題なのは、薬びんと、ブランデーと、手紙が一通と、めがねが八つなんだ。それをさがすことなんだ。さあ、谷の中とうちの中を、手わけしてさがそうじゃないか……。」

「そう、そう、そうね。」

と、フィリフヨンカはいいました。それから、応接間の中へ鼻をつっこんで、心配そうな声でいいました。

「おかげんはいかが。」

「いともかなしい気持ちだね。」

と、スクルッタおじさんは答えました。

「スープにまくができたときには、こんなふうになっちまうんだ。それでな、わすれようとしても、そのことが、こびりついてしまうんだ。」

まったと、とくいになっているところに、いきなり思い出させられちまうのだ。ああ、おなかがいたい。あんまりはらがたって、おなかまでが、いたくなっちまうわい。」

　おじさんは、いままでとんとわすれていた、持ってきた薬のことを、ふと思い出しました。でも、どこにおいたのかは思い出すことができませんでした。

「薬は、バスケットの中にはいっているんだよ。」

と、ヘムレンさんは、なんどもくりかえしました。

「おじさんがいったもの。バスケットの中に入れたって。そのバスケットが、応接間にはないんだ。」

「庭のどっかに、おじさん、おきわすれたのかもしれないわ。」

と、ミムラねえさんはいいました。

　すると、フィリフヨンカがさけびました。

「おじさんは、わたしたちのせいだっていうんだわ。どうして、わたしのせいになるのかしら。わたしは、あったかい、すぐりのジュースを作ってあげただけじゃないの。おじさんの好物なんだもの。」

　フィリフヨンカは、ちらっとミムラねえさんを横目で見て、いいました。

と、スクルッタおじさんは、きげんのわるい声でいいました。
「わすれたきゃわすれたって、わしの自由だ。わすれるってことは、じつにいかすよ。ちょっとした、ゆかいなことだけは、すこしばかりおぼえているが、あとのことは、みんなわすれたよ。ゆかいなことは、まあ、だいじじゃからな。さあて、どれ、ご先祖さまと、おしゃべりしにいくとするか。あの人は、わしの気持ちがわかっとる。おまえさんらは、わしの気持ちを想像するだけだが、あの人とわしとは、おたがいにわかりあっとる。」
ご先祖さまは、いつものとおりのかっこうでした。でも、首にナプキンをかけていました。
「やあ。」
と、スクルッタおじさんは、声をかけました。
「わしは、いま、たまらなくかなしいんだよ。あいつらが、わしにどんなしうちをしたか、わかるかね。」
おじさんはことばをきって、あいてがなにかいうのを待ちました。ご先祖さまは首をそっと横にふって、トントンと足ぶみしました。
「そのとおりさね。」
と、スクルッタおじさんはいいました。
「わしの休暇を、めちゃめちゃにしおった。ここへやってきて、なにもかにもうまくわすれてし

しまいました。
「あっ、手紙！」
と、スクルッタおじさんは気がつきました。
「どっかで、手紙を見つけたな。どこかに、かくしておいたっけ。」
「どこにかくしたんだい。」
と、スナフキンがききました。
もう、みんな、いっせいにテーブルをはなれて、立ちあがっていました。
「どっかだよ。」
と、スクルッタおじさんはつぶやきました。
「どれ、ちょっくら、また、さかなをとりにいってくるかな。こんな、おもてで食べる食事なんて、わしはすかんよ。たのしくないのだ。」
「おじさん、よく考えてみてくださいよ。」
と、ヘムレンさんがたのみました。
「思い出してみてくださいよ、てつだうからさ。この前、手紙はどこで見たの？　ねえ。もし、いま、その手紙を見つけたとしたら、どこにかくすと思う？」
「わしは、いま、のんびり、休暇中なのだ。」

「これで、せっかくおもてで食事したのも、なにもかも、だいなしだわ。」

「あのねえ、フィリフヨンカ。」

と、ミムラねえさんは、重々しい声でいいました。

「食卓をお外にうつしたぐらいではね、ムーミンママにはなれないんですからね。」

フィリフヨンカは、すっくと立ちあがって、大声をはりあげました。

「あっちでもムーミンママ、こっちでもムーミンママ、そんなにムーミンママがえらいんですかね！　ムーミンなんて、だらしのない一家じゃないの。おそうじができるくせに、うちの中だって、ちっともおそうじしやしないし、ひとこと手紙に書いておけばいいものを、それもしないし、ちゃんと知っているくせしてね、ほら、わたしたちがここへ……とにかく、知りながらね。」

フィリフヨンカは、やりきれなくなって、だまって



「屋根なんて、まるっきりつけないことにするのさ。ぼくは、いまこうしていながら考えたんだけど、ムーミンパパは、星を見るのがすきだと思わないかい。どうだい？」

ふいに、トフトが大声を出しました。

「そう思うのは、きみだけだよ。きみなんか、パパのこと、なにも知らないくせに。」

食事をはじめていたみんなは、食べるのをやめて、いっせいに、ホムサの顔を見つめました。

ホムサ＝トフトは、テーブルクロスのはしを、ぎゅっとにぎりしめて、かなきり声をあげました。

「おまけに、きみは、自分かってなことばかりしているんじゃないか。なぜ、そんなに大きなことばかりしようとするんだい。」

「いやだ。ほら見てよ。」

と、ミムラねえさんは、たまげていいました。

「ホムサが、歯をむきだしているわよ。」

ホムサ＝トフトは、あんまりあわてて立ちあがったので、いすがひっくりかえりました。ホムサは、テーブルの下にかくれてしまいました。

「まあ、ホムサみたいなおとなしい子がねえ。」

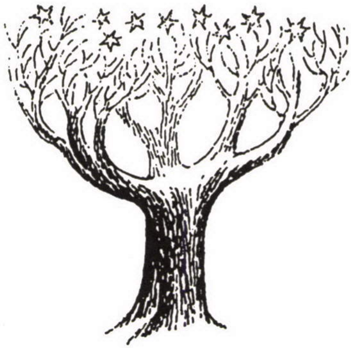
と、フィリフヨンカは、むっつりした顔でいいました。

もいいのよ。とにかく、すきなようにしてくださいな。」
食卓は、でこぼこの地面の上においたので、かしいでいました。ヘムレンさんは、両手でさらをおさえていました。
「ぼくは、ちょっぴり、心配ごとがあるんだ。」
と、ヘムレンさんはいいました。
「まる屋根が、うまくできないんだよ。ぼくのさしずにしたがって、ホムサが板をのこぎりで切るんだけれど、ちっともうまく板と板とがかみあわないんだ。それでもういちど、その板を切りなおすと、こんどは短くなりすぎて、ころがりおちてしまうんだ。どういうことだか、わかるだろう。」
「あたりまえの屋根にしたら、どうなんだい。」
と、スナフキンはいってみました。
「やっぱり、おっこちてしまうんじゃないかな。」
「わしは、スープのまくがきらいなのだ。」
と、スクルッタおじさんは、むきになって、食べないわけをいいました。
「まあ、こうすればいいっていうやりかたも、あるにはあるんだ。」
と、ヘムレンさんはつづけました。

「きょうはな、やってみたいとおりにやってみる日なんだとさ。あの女のいうのにはな。」
やっと、フィリフヨンカが、料理をはこんで、おもてへ出てきました。料理は、オートミールのスープでした。つめたい風が、よわよわしく、すうっと谷間をふきぬけていきました。スープにうすいまくがはりました。
「はずかしがらないで、えんりょなくめしあがってね。」
フィリフヨンカは、ホムサの頭をやさしくたたいて、そういいました。
「なぜ、おもてで食べなくちゃならないんだね。」
と、スクルッタおじさんは、気にくわないようすでいいました。おじさんは、スープのまくを、さらのふちにつまみあげました。
「スープのまくも、食べなくてはいけませんわ。」
と、フィリフヨンカは口を出しました。
「なぜ、台所で食べちゃいけないんだね。」
と、スクルッタおじさんはくりかえしました。
「思いつきだって、ときにはやってみるものですわ。」
と、フィリフヨンカは、じれったそうにいいました。
「すきなところへ持っていって食べていいのよ。それから、そうね。ちっとも食べない人がいて

第16章

ムーミンからの手紙はどこだ



そのあくる日は日曜日でした。スナフキンは、みんなから、お昼ごはんによばれていました。ところが、二時になっても二時十五分になっても、フィリフヨンカは、まだ、あいずのどらを鳴らしません。二時半になったとき、スナフキンは、どうしたのかと思って、まっさらの鳥の羽をぼうしにさして出かけていきました。食卓が、ベランダの外に出ていました。ホムサとヘムレンさんが、いすをはこびだしているところでした。

「おもてで食事をするんだとさ。」

と、スクルッタおじさんが、めいった声で教えました。

と、スナフキンはいいました。
「ムーミンたちは、いつかまた、帰ってくるよ。」
「いつかだって！」
と、ホムサは大声をだしました。
「いま、ムーミンママが帰ってこなくちゃいけないんだ。ぼくが会いたいのは、ママだけなんだ。」
スナフキンは、肩をすぼめました。パン二きれにバターをぬりながらいいました。
「ママのほうが会いたいのは、だれかしらね……。」
ホムサは、それいじょう、なにもいいませんでした。ホムサが帰るとき、スナフキンは、うしろからさけびました。
「あんまり、おおげさに考えすぎないようにしろよ。なんでも、大きくしすぎちゃ、だめだぜ。」
スナフキンのハーモニカが、また、きこえてきました。お勝手口の階段に立って、フィリフヨンカはごみバケツをそばにおいたまま、じっと耳をすましていました。ホムサは、まわり道をして、フィリフヨンカのそばも、バケツのそばも通らないように、気づかれないように、うちにはいっていきました。

と、ホムサはささやいて、テントの中へはいっていきました。中にはいったのははじめてでした。パイプたばこと、土のいいにおいがします。とても気持ちのいいにおいでした。ねぶくろのわきの、さとうのはいった箱の上に、ろうそくがともっていました。ゆかには、木ぎれが、いっぱいちらばっていました。

「その木ぎれで、木のさじを作るんだよ。」

と、スナフキンはいいました。

「きみ、こわがっているみたいだけれど、なにがこわいんだい。」

「ムーミンたちは、もう、いなくなっちまったんだ。」

と、トフトは答えました。

「ぼく、だまされちまったんだ。」

「ぼくは、ちがうと思うな。」

と、スナフキンはいいました。

「ちょっと、のんびりしにいっただけだと思うよ。」

スナフキンは、魔法びんを出して、ジョッキみたいな茶わん二つに、紅茶をいっぱいつぎました。

「そこに、おさとうがあるよ。」

くもって、きりがいっぱいかかっていました。夜の暗やみと見わけのつかないぐらい、暗い、こいきりがかかっていました。魔法のガラスの中を、きりがはげしく流れていました。おくへ、おくへとすいこまれていくきりは、たえず、黒いうずをまきながら、しだいにふえていきました。

　ホムサは水晶玉のところを通りすぎ、川のふちにそって歩いていきました。ムーミンパパのたばこ畑のそばをぬけ、大きなつぼのおいてある、もみのき林の中にはいっていきました。とうしんそうのかれ葉が、まわりでサラサラと鳴りました。長ぐつが、ずぶりと沼地にはまりました。

「おまえ、そこにいるんだろう？」

と、ホムサはそっとよんでみました。

「ちびちび虫くん、元気かい。」

と、暗やみの中から、その動物は、ウウーッとうなり声をあげて、ホムサに答えました。

　ホムサは、すごくこわくなって、めくらめっぽう、いまきたほうへかけだしました。つまずいたり、ころんだり、ころぶと、四つんばいになって立ちあがりながら、やみくもに、むちゅうで走りました。テントのあるところで、ほっと立ちどまりました。テントは、夜のやみの中に、やさしく、みどり色に光っていました。あかりがともっているようでした。中ではスナフキンが、ひとりでそっとハーモニカをふいていました。

「ぼくだよ。」

フィリフヨンカがはいってきました。
「どうも、ありがとう。」
と、ホムサは、おじぎをしていいました。
「すごくいい毛布だね。」
フィリフヨンカは、にっこりわらいました。
「どういたしまして。ムーミンママだって、きっとこうしたはずなのよ。」
フィリフヨンカは、毛布をゆかの上において、なにかものたりなさそうに、ちょっとまごまごしていて、それからいってしまいました。
ホムサは、できるだけていねいに、フィリフヨンカの毛布をたたんで、天じょうにつるしたたなの、いちばんおくにおしこみました。それから、うぐいあみの中にもぐって、また、本のつづきを読もうとしました。でも、もう、だめでした。いままでよりも、ひどいんです。おなじところを、なんどもくりかえして読んで、それでも、さっぱり、なんのことやらわかりません。とうとう本をとじて、ろうそくをけしました。そしておもてへ出ました。
水晶玉をさがしあてるのはほねがおれました。なんども道をまちがえました。まるで、知らないところを歩いているみたいに、庭の木立のあいだを、手さぐり足さぐりですすんでいきました。やっと水晶玉が目の前にあらわれました。しかし、青色に光っていた水晶玉は、いまはすっかり

した。

「ぼうや、寒くないかしら。だいじょうぶなの。」

「だいじょうぶだよ。ありがとう。」

と、ホムサ＝トフトはいいました。

フィリフヨンカは、両手を投げだすようにひらいて、ホムサの顔をのぞきこむように、からだをのりだしました。それから、すがりつくような声でいいました。

「ほんとに、だいじょうぶなの。」

ホムサ＝トフトは、たじたじとなって、あとずさりしました。フィリフヨンカが、おっかないにおいになりました。

ホムサは、あわてていいました。

「毛布が一まいあると、いいかもね。」

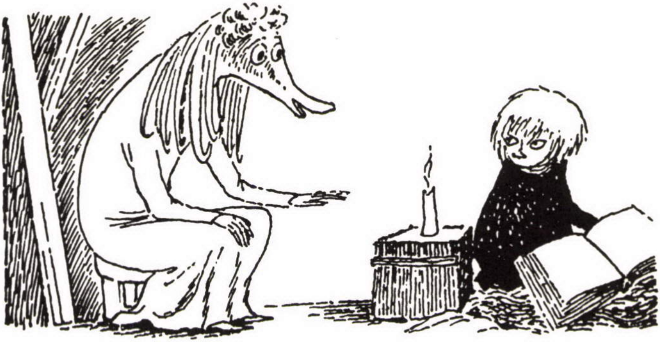
フィリフヨンカは、さっと立ちあがりました。

「すぐ、持ってきてあげるわよ。」

と、大声をあげました。

「ちょっと待っててね。一分もかからないわ……。」

足音が、階段をとぶようにかけおりていって、また、ひきかえしてきました。毛布をかかえた



フィリフヨンカは、手をのばして、髪の毛をもとのようにかきあげてやりました。それから、とてもまじめな顔になっていいました。

「ゆうべ、あなたのことが、きゅうに気になってきたの。あなた、なんていう名まえでしたっけ。もういちど教えてよ。」

「トフト。」

と、ホムサはいいました。

「そう、トフトなのね。」

と、フィリフヨンカは、くりかえしてみました。

「すてきな名まえだわ。」

なにか、いいことばはないかしら、やさしいことばをかけてやりたいけれど、と、フィリフヨンカは、ことばにつまってしまって、いろいろと考えました。ああ、もっと、小さい子のことをよく知っていて、子どもずきだったらよかったんだけど、と思いました。やっと、こういってみま

ホムサ＝トフトは、長いあいだ、くせになっていたので、お話を自分にしてきかせないと、なかなかねつくのがたいへんでした。で、やたらと、あの本をむさぼり読みました。読んでいけばいくほど、わからないところだらけになりました。もう、どこを読んでも、動物のからだの中が、どうのこうのということしか書いてなくて、すごくたいくつでした。

そんなある晩、フィリフヨンカが屋根うらべやのドアをノックして、そっとあけました。

「こんばんは、ぼうや。」

ホムサは、本から目をはなして顔をあげました。だまっていました。

フィリフヨンカの大きなからだがはいってきて、ホムサのわきのゆかに、こしをおろしました。首をかしげてききました。

「いったい、なにを読んでいるの。」

「本だよ。」

と、トフトは答えました。

フィリフヨンカは、大きく息をすると、ぶるっとからだをゆすっていいました。

「小さいのに、えらいわね。ママがいないと、つらいこともおおいでしょうに。」

ホムサは、髪の毛をたらして、顔をかくしました。はずかしかったんです。そして、だまっていました。

の家を作りはじめていました。スクルッタおじさんは、毎日二ひきぐらいずつさかなをとりました。フィリフヨンカは、口ぶえをふきはじめました。

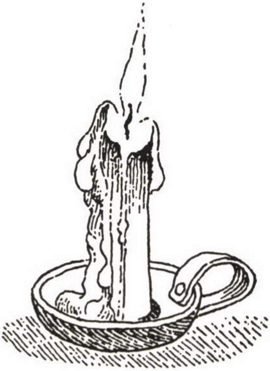
あらしのこない秋でした。大きなかみなりも、あれからはもう、ひきかえしてきませんでした。ずっと遠くのほうで、小さなつぶやき声をきかせるだけで、かみなりは通りすぎてしまいます。かみなりが遠くで鳴ると、谷間はいっそうしいんとしずまりかえるように思えました。かみなりが鳴るたびに、あの動物がどんどん大きくなっていくことを知っているのはホムサだけでした。

動物は、もう、とても大きくなっていました。すがたも、びっくりするほどかわりました。口をあけて、白い歯をむきだすこともありました。ある日の夕がた、黄色い入り日をあびながら、動物は、水の上にかがみこみました。そのときはじめて、水にうつった自分の歯を見ました。口を大きくあけて、あくびをしてみて、それから歯をかみしめて、ギーッと、ほんのちょっぴり歯ぎしりしてみました。もう、ぼくは、なんにもいらないぞ。こんなにすごい歯を持っているんだからな。

とうとうホムサは、もうこれいじょう、この動物を大きくするのはこわくなりました。頭の中の動物の絵すがたにおおいをかぶせて、すみっこにとじこめてしまいました。でも、かみなりは、あいかわらずかすかに鳴りつづけています。もう、動物は、自分ひとりの力で、かってに大きくなっていくみたいです。

第15章

ちびちび虫，うなる



いちだんと日が短くなり、寒さもましてきました。雨はほとんどふらず、毎日お昼ごろ、ほんのしばらく、ちらっと日の光が谷底にさします。すると、地面がぱっとあかるくなって、はだかの木のかげが、黒々とうかびあがります。でも、昼前も昼すぎも、夕がたのようにうす暗くて、そのうちに、とっぷりと、暗やみにつかってしまいます。入り日は、もう、まるっきり見られなくなりました。日のしずむころは、空が黄色にそまって、まわりの山々が、かげ絵のようにくっきりうきでて見えるきりです。毎日が、井戸の中の一日のようなんです。

ヘムレンさんとホムサは、ムーミンパパの木

「なるほどね。あなたは、もう、ストーブの中にはすんでいないんですな。」
と、スクルッタおじさんはいいました。
「あなた、年はおいくつですか。いつも、めがねをかけていないんですか。」
おじさんは、からだじゅうがかっかしてきて、自分のことばに、もっと熱を入れるために、ドンと、つえでゆかをつきました。ご先祖さまも、そのとおりにしました。でも、へんじはしませんでした。
（耳がきこえないんだな、このじいさんは。）
と、スクルッタおじさんは、心の中で思いました。
「耳がきこえない、もうろくじいさんなんだ。でも、まあ、なんといったって、年よりになった気持ちがわかるあいてに会えたってことは、ゆかいなこったさ。」
おじさんは、ずいぶん長いあいだ、じっとあいてを見つめて立っていました。おしまいに、ぼうしをちょいと頭の上に持ちあげて、おじぎをしました。ご先祖さまも、そのとおりにしました。
ふたりとも、いらいらしたようすでわかれました。



ろうそくの火が、ずっと小さく見えます。ちらちら、かすかに、暗やみにういています。でも、おじさんは、ご先祖さまのすがたが、まん前にはっきり見えました。つえをついて、ぼうしをかぶっていました。なんだか、まぼろしみたいに見えます。着ているナイトガウンは、すそが長すぎました。ゲートルをつけていました。めがねはなし。スクルッタおじさんが一歩前に出ると、ご先祖さまも、そのとおりにしました。

応接間から、スクルッタおじさんが声をかけました。
「おびえているのよ。」
と、ミムラねえさんは答えて、二階へいく階段をのぼっていきました。
「おびえているんだわ。洋服だんすの中に、なんだかいるって。」
もう、おもてはまっ暗やみでした。みんな、暗くなるとねるきめにしていました。みんな、よくねむりました。日は、どんどん短くなりますから、ねむる時間がますます長くなります。ホムサ＝トフトは、かげのように、すうっとベッドにすべりこんで、おやすみなさいとつぶやきました。ヘムレンさんはねがえりをうって、かべと鼻をつきあわせました。ヘムレンさんは、パパの木の家のてっぺんに、まる屋根をのせることにきめていました。まる屋根は、みどり色にぬるといいなあ。そして、金の星もちりばめるんだ。ムーミンママのたんすの中には、たいてい、金の塗料がはいっていましたし、まき小屋で、青銅色の塗料も見たことがあったんです。
みんながねむってしまうと、スクルッタおじさんは、ろうそくを一本持って、階段をのぼっていきました。大きな洋服だんすの前までくると、声をひそめてよびかけました。
「もしもし、中にいるんでしょう。わかっているんですよ、中にいるって。」
おじさんは、うらがわにかがみのついたたんすの戸を、そうっとしずかにひっぱりました。たんすの戸がパタンとひらきました。たんすをおいてある階段のおどり場は、いやにまっ暗でした。

が煮くずれて、なんだかわからなくなっちまったじゃがいもを、こっそりくわえました。

フィリフヨンカは、ますますこうふんしてきて、とうとうたまらなくなり、ねむっているミムラねえさんのそばに走りよって、よびおこしました。

「ねちゃだめよ。あなた、なんにも知らないから、そんなにのんきにねむれるんだわ。」

ミムラねえさんは、目をさましました。じっと横になったまま、フィリフヨンカの顔を見つめました。

「あなたは知らないのよ。」

と、フィリフヨンカは、するどい声でささやきました。

「知らないんだわ。この谷間に、なにが野ばなしになったか、知らないんだわ。きみのわるいものが、たんすから出ていって、うじゃうじゃしているのよ。」

ミムラねえさんはからだをおこして、フィリフヨンカにききました。

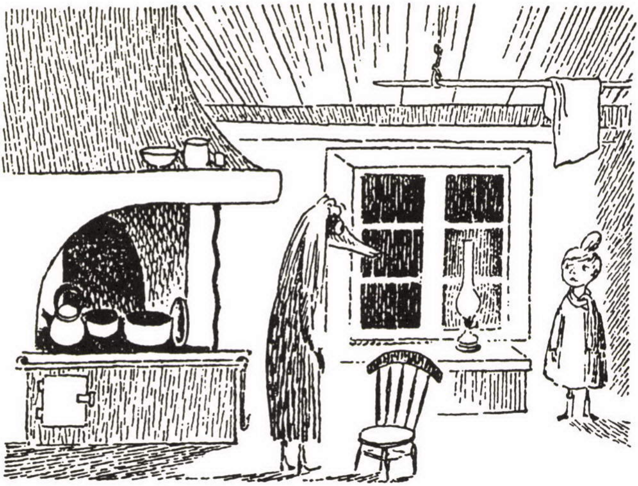
「それで、あなた、長ぐつを、はえとり紙でまいているの？」

ミムラねえさんは、あくびをしながら、鼻の頭をこすりました。ドアまでいってふりかえると、いいました。

「ご安心なさいよ。ここには、わたしたちよりもわるいものなんて、いっこないんだから。」

「あの女、おこっているのかい。」

それだけのことよ。」
フィリフヨンカは、プディングパンをせっせとねりながら、コツコツとゆかに足音をたてて、台所の中をいったりきたりしました。ふいに、いらいらしてきて、おちつかない気持ちになりました。
「じゃあ、どうちがうのよ。」
と、フィリフヨンカ。
「ムーミンママは、ごはんのしたくをするとき、いつも口ぶえをふいていたわ。」
と、ミムラねえさん。
「なにもかも、ちょっぴり、なんかしら――よくわかんないけど――ちがっているのよ。あの人たちは、食事を持って、どこかへきえちまうことだってあるし、ちっとも食べないことだってあるわ……。」
ミムラねえさんは、ねむたくなって、頭をかかえこみました。
「わたしのほうが、あなたより、ずっとくわしくムーミンママのことをおぼえているんじゃないかしら。」
と、フィリフヨンカはいいました。
それから、なべに油をしきました。それから、その中に、きのうののこりのスープをあけ、形



ムーミンたちがとっておいたパンくずのふくろを、フィリフヨンカが見つけてしまったんです。

台所の中は、あたたかでした。かまどの中では、パチパチと音をたてながら火がもえ、ゆらゆらゆれるほのおが、天じょうにうつっていました。

「いまなら、前と、ちっともかわらないみたいね。」

と、ミムラねえさんは、ひとりごとをつぶやきました。

「ムーミンママのいたときと、かわらないっていうことかしら。」

と、フィリフヨンカは、なんの気なしに、こまかくいいなおしました。

「どういたしまして、大ちがいよ。」

と、ミムラねえさん。

「わたしのいっているのは、かまどのことよ。

「ぼく、そんなこと考えてみたことなかったよ。」
と、話をかわして、さっそく、ホムサはヘムレンさんをすきかきらいか考えてみました。
　ミムラねえさんは、ぴょんと、まきわり台からとびおりて、いってしまいました。あたりはどんどんうす暗くなっていきました。ちち色のきりが、川面からわいてきました。すごくひえました。
「あけてちょうだいな。」
と、台所のドアの外から、ミムラねえさんが声をはりあげました。
「あなたのお台所にはいって、あったまりたいの。」
「あなたのお台所」なんていわれたのは、はじめてのことでした。フィリフヨンカは、すぐさまドアをあけました。
「わたしのベッドに、こしかけてもいいわよ。」
と、フィリフヨンカはいいました。
「でも、ベッドカバーをしわにしないように、気をつけてね。」
　ベッドは、ながしと、かまどのあいだのすきまにおしこんでありました。ミムラねえさんは、ちんまりまるくなって、その上にこしかけました。フィリフヨンカは、あしたの朝のプディングパンにする粉のねりかけを、またこねはじめました。じつは、小鳥のえさにしようと思って、

すすめました。ことばではまちがいそうで、あぶなっかしいんです。なにしろ、動物はどんどん進化してきて、いま、とてもだいじな時期に近づいていたのです。すがたがかわりだしました。もう、かくれたりしません。あたりに目をくばり、耳をすましながら、ゆだんしないで、しかし、ちっともこわがらずに、黒いかげのように、森のふちを、すうっと、音もなくすべっていきました……。

「あなた、くぎをぬくの、すきなの？」

と、ミムラねえさんが、ホムサのうしろから声をかけました。ミムラねえさんはまきわり台にこしかけていました。

「えっ。」

と、ホムサはききました。

「あなた、くぎぬきするの、きらいなくせに、しているんでしょう。」

と、ミムラねえさん。

「なぜかと思って、ふしぎなのよ。」

ホムサは、かの女の顔を見つめて、だまっていました。ミムラねえさんって、ペパーミントみたいなにおいだな。

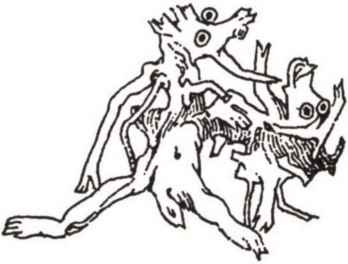
「おまけに、ヘムレンさんだって、あなたはきらいなんでしょう。」

と、ホムサは答えました。
「なにか、やらかすためにはね。」
と、ヘムレンさんは、きこうとしたわけを話しました。
「だれかが大工になって、もうひとりが板はこびをする。だれかが、新しいくぎをうちつけて、もうひとりが古いくぎをひっこぬく。そうすることに、そうばがきまっているんだ。わかるかい。」
ホムサはヘムレンさんの顔を見つめたきり、なにもいいませんでした。もうひとりって、ぼくのことにきまっているんだからな。
ふたりは、まき小屋へいきました。ホムサはくぎをぬきはじめました。板ぎれや、木ぎれにくっついているくぎです。その板ぎれや木ぎれは、みんな、ムーミンたちが海べからひろいあつめてきたものでした。もう、しらちゃけていて、すっかりかたくひきしまった木のはだに、くぎは、きっちり、さびついていました。
ヘムレンさんは、かえでの大木の下までいって、でっかい鼻を上につんとむけ、木を見あげながら考えていました。
ホムサは、うんうんりきみながら、くぎをぬきました。きえていく入り日が、ほのおのように黄色くもえあがりました。ホムサは、あの動物のお話をしました。話せば話すほど、じょうずになっていきます。もう、ことばにはしないで、頭の中に絵をつぎつぎとうかべるだけで、お話を

での大木が、黒々とうきでています。
そうだ、秋の夕やみがせまるころ、パパも、これとそっくりおんなじけしきを見てたんだ、と、ヘムレンさんは思いあたりました。
するとたちまち、こうすればいいということがわかりました。パパのために、あのかえでの大木に、うちを作ってあげるといいんだ。ヘムレンさんは、うれしくなって、にこにこしてしまいました。そうだ、木の家、それにきまった。見あげるように高い、黒々ともりあがった、太い木のまたに作るんだ。家族は遠くにはなれていて、心のびのび、ゆめいっぱい。天じょうにはカンテラをつるして、そして、ぼくたちふたりはそこにすわって、かべをたたく南西の風の音をきき、ふたりしておしゃべりするんだ。ほかのことなど気にしないで、おしゃべりするんだ。
ヘムレンさんは、かけだしていって玄関にとびこみ、大声でよびました。
「ホムサ！」
ホムサは、屋根うらべやから出てきました。
「また、本を読んでいたんだろう。」
と、ヘムレンさんはいいました。
「あんまり本ばかり読んでいると、毒だよ。ねえ、きみ。きみ、くぎをぬくのって、すきかい？」
「きらいみたいだな。」

人からわすれられてしまうようなところともいえました。
まわりの青色のかべには、パパのつるした、きみょうな形の木の枝がぶらさがっていました。ボタンの目をくっつけた枝もありました。難破船の絵のついたカレンダーもかかっていました。ベッドの上のところには、板ぎれで作ったたながあって、その上にウイスキーのびんがおいてありました。戸だなの上には、めずらしい形の石とか、こがねのつぶとか、旅に出るまぎわになってすてそこなってしまったぼろきれのきれっぱしとか、なにやかやとのっかっていました。
かがみのすぐ下には、とんがり屋根の、模型の灯台が立っていました。さしこみ式の、小さなドアがついていて、あかりべやのまわりには、しんちゅうのくぎで、手すりができています。おまけに、パパが銅線で作ったたなわばしごまでついています。どのまどにも、銀紙がはりつけてあります。
ヘムレンさんは、とっくり、ひととおりながめてみて、そうしているうちに、パパのことを思い出してみようとしました。ムーミンパパって、どんなことをしてたっけ、どんな話をしてたっけなあと。でも、だめでした。で、ヘムレンさんは、まどぎわにいって、おもての庭をのぞいてみました。
かれてしまった花壇のまわりで、うす暗がりに、ぼうっと白く光っているのは、花壇のまわりにしきつめた貝がらです。西の空は、もう、黄色くそまっていました。夕日を背にうけて、かえ

第14章
ムーミンパパに，木の上の家を



わかりきったことですが、ムーミンパパのへやでねる人もムーミンママのへやでねる人も、ひとりもいませんでした。ママのへやは東むきでした。ママは朝がすきなんです。パパのへやは西むきでした。夕空をながめると、パパは、いつもロマンチックな気持ちでいっぱいになるからでした。

ある日の日ぐれどき、ヘムレンさんは、こっそりムーミンパパのへやまでいってみました。いずまいをただして、ドアの前で立ちどまりました。天じょうがななめになった、ちんまりした小べやでした。しんそこから、ひとりきりになれるところです。そこにずっといつづけると、

きく、強くなって、もう、人にだまされたり、おどおど、人のことなど気にしなくてもすむようになるのを待っていました。この章おしまい。

んと暗くなります。フィリフヨンカは、年から年じゅう、夜がきらいでした。なにがいやだといって、まっ暗やみを見ているぐらい、いやなことはありません。たったひとりで、底なしのあなの中に、ぐうんとおちこんでいくような気がします。ですから、ごみバケツをお勝手口の階段に出すときだって、目にもとまらない早わざで、さっとおくが早いか、中にひっこんで、ドアをしめてしまいます。いままでは、いつだってそうでした。

　でも今夜は、階段に出ると、立ちどまって、じっと暗やみのほうにむかって、耳をすましました。スナフキンが、テントの中でハーモニカをふいていました。きえいるようにかすかに、夜の底から流れてくる美しいしらべでした。フィリフヨンカは、人も自分も気がついていないけれど、ねは音楽ずきでした。フィリフヨンカは、こわいのをわすれていました。気がつけば、ぞっとしたでしょうに。台所のあかるい光を背中にあびて、ひょろ長いフィリフヨンカのすがたが、くっきりうきだしているのです。暗やみの中にひそんで、おっかない連中が、えものをねらっていたら、さあ、つかまえてくださいといっているようなものです。でも、なんにもおきませんでした。しらべがやむと、フィリフヨンカは大きなため息をついて、ごみバケツを下において、うちの中にもどりました。バケツのごみをすてたのはホムサでした。

　ホムサ＝トフトは、屋根うらべやでお話をしました。いま、その動物は、ムーミンパパのたばこ畑のうらにある、大きなつぼのそばにはいっていって、そこでじっと待っていました。うんと大



のは、たいしてむずかしくないでしょう。どの島も、海図にちゃんとのっているんですからね。ボートのあなもふさげたことだし。でも、そんなことをしたって、どうなるんだ、と、スナフキンは思いました。ほうっておいたらいいんだ。島だって、のんびりしたいにちがいないんだから。

　スナフキンは、もう、あの五つの音色を、やっきになってさがそうとはしませんでした。やってきたくなったら、きっと、音色のほうからやってきます。ほかにも、曲なら、たくさん持っているんです。今夜はちょっぴり、ハーモニカをふこうかな、と、スナフキンは思いました。

　もう、秋も末ですから、夜になると、ぐ

なをつかまえるとしよう。こんどのさかなは、わしひとりで食べるのだ。」
おじさんは、つえをつかんで出ていきました。首のまわりに、ナプキンをぶらさげたまんま。

「ごちそうさまでした。」

と、ホムサはおじぎをしました。スナフキンもいいました。

「とてもけっこうな、プディングでした。」

「まあ、そう思ってくださるの。」

と、フィリフヨンカは、ちょっとはずかしそうに、にっこりして答えました。頭の中は、ちがうことに気をとられていました。

食事がすむと、スナフキンは、パイプに火をつけて、海べのほうへ出かけていきました。のんびりした足どりでした。やっと、はじめてひとりきりになれた気がしていました。更衣所まで足をのばして、小さなドアをギーッとひらいてみました。むっと、かびくさいにおいや、海草のにおいがたちこめていて、すぎさった夏のにおいが鼻につきました。気がめいってくるにおいでした。

ああ、家ってやつは、どれもおんなじだ、と、スナフキンは思いました。下のほうが、水の中にきえている、小さな急階段にこしかけました。灰色の海は、しずかにないでいて、島々のすがたは見えませんでした。すがたをかくした島を見つけだして、もとどおりのところにひきもどす

「いい考えがあるぞ。ムーミンパパが帰ってくるまでに、ぼくたちめいめいで、パパをあっというわせるようなことをしておいたら、どうだろう。」

みんな、だまっていました。

「スナフキンは、桟橋の修繕ができるだろう。」

と、ヘムレンさんはつづけました。

「ミムラねえさんは、ぼくたちの服のせんたく、フィリフヨンカは大そうじ……。」

フィリフヨンカは、持っていたおさらを、ガチャンとゆかにおとしました。大声をあげました。

「だめよ！　わたし、もう、おそうじなんて、ぜったいにしないから。」

「なぜなの。」

と、ミムラねえさんがききました。

「あなた、おそうじ、大すきじゃないの。」

「やりかた、わすれちまったのよ。」

と、フィリフヨンカは、ぼそぼそつぶやきました。

「それでいいんだ。」

と、スクルッタおじさんはいいました。

「ふゆかいなことは、みんな、わすれちまわなきゃいけない。どれ、わしは、もう一ぴき、さか

「おほほほほ。」
と、フィリフヨンカは声をたてました。もういちど、おほほほほ、と、くりかえして、スナフキンの顔を見ました。
みんなが食べはじめると、しいんとしずかになりました。フィリフヨンカは、お給仕をしながら、かまどとテーブルのあいだを、いったりきたりして、ジュースをついだり、まあ、こぼしたのね、気をつけてちょうだいよ、なんていったりしました。いきいきしていて、ほんとに、くったくなさそうでした。
「父の日のために、ばんざいをさけばないか。」
と、ふいに、ヘムレンさんが、みんなを見まわしました。
「わしは、ぜったいに反対だ。」
と、スクルッタおじさんはいいました。
「ぜったいに、ばんざいをやろう。」
と、ヘムレンさん。
「ゆかいじゃないか。ゆかいになりゃ、それでいいんだ。それに、ムーミンパパだって、おとうさんじゃないか。わすれたのかい。」
ヘムレンさんは、まじめくさって、ひとりひとりの顔を見ながらいいたしました。

「まるごと料理しなきゃ、いけなかったんだ。そして、わしひとりで、たいらげるはずだったんだ。」

「まあ、そうだったんですの。」

と、フィリフヨンカはいいました。

「なるほど、父の日ですものね。でも、だからといって、自分かってはゆるされませんよ。」

年よりをたてて、しきたりどおりにうやまってばかりいられないときもあるんですからね、と、フィリフヨンカは心の中で思いました。

「父の日なんて、祝ってもらうのはおことわりだね。」

と、スクルッタおじさんは、ひとくさりぶちました。

「父の日とか、母の日とか、しんせづなホムサたちみんなの日だとか、いやなこった。いや、わしは、親戚や家族がきらいなんだ。でっかいさかなの日っていうのを、祝えないもんかね。」

「だけど、これは、ちゃんとしたお料理だよ。」

と、ヘムレンさんは、おこったようにいいました。

「それに、みんなでたのしく、大家族みたいにテーブルをかこんでいるんじゃないか。さかな料理のできるのは、フィリフヨンカしかいないんだって、ぼくがしょっちゅう、口ぐせみたいにいっているだろう。」

さんは、自分のさかなのことが気がかりで、料理のすむまで、ずっと、まどの外に立ちどおしだったんです。フィリフヨンカには、ちゃんとわかっていました。さあ、いよいよ、そのおじさんも、やっと中に入れてもらえるのです。

「お食事なのね。」

と、ミムラねえさんはいいました。

「ありがたいわ。きゅうりと、肉桂ビスケだと、食べあわせがよくないんだもん。」

「ただいまからはね。」

と、フィリフヨンカはいいました。

「食べものおき場には、かぎをおかけいたします。お台所をするのはわたくしでございますから。さあ、お席におつきになって、さめないうちにおめしあがりになって。」

「わしのさかなは、どこにいったんだい。」

と、スクルッタおじさんがたずねました。

「プディングの中にいますわ。」

と、フィリフヨンカは答えました。

「そんなことしちゃ、さかなのすがたが見えないじゃないか。」

と、スクルッタおじさんは、がみがみいいました。

おっかないものなんてありません。めまいもひっこんでしまいました。そんなものは、みんな、ずっと遠くのほうにひっこんで、胸のすみっこに小さくなって、かぎをかけてとじこめられてしまいました。

ほんとに、まあ、ありがたいこと、と、フィリフヨンカは思いました。おそうじは、もう、できっこないけれど、お料理はできるんですものね。すてたものじゃないわね。フィリフヨンカはドアをあけて、ベランダへ出ていきました。ぴかぴか光るしんちゅうのどらをはずして手に持ちました。ムーミンママのどらです。とくいまんめんの、まんぞくそうな自分の顔が、どらにうつりました。ばちをつかみました。まるい木のぼっちに、かもしかの皮をかぶせたばちです。どらを鳴らしました。ジャラン、ジャラン、ジャランと、谷じゅうに、どらの音がひびきわたりました。

食事だよ。さあ、早くいらっしゃい。

みんな、大声をあげながら、鉄砲だまみたいにとんできました。

「なんだ、なんだ。なにがあったんだ。」

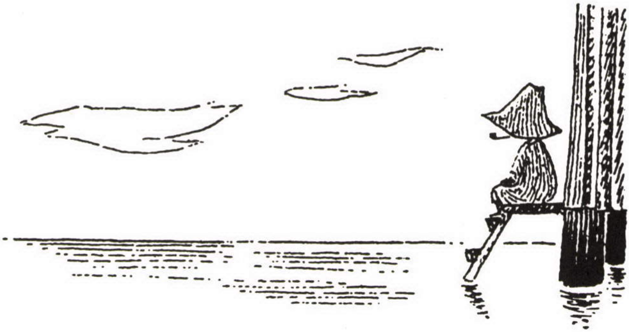
フィリフヨンカは、すこしもあわてないで、ものしずかにいいました。

「食事ができたのよ。」

食卓には、六人分の食器がならんでいました。スクルッタおじさんの席はまん中でした。おじ

第13章

フィリフヨンカのさかな料理



二時きっかりに、さかなは、すっかり料理されました。さかながかくれている、うす茶色の大きなプディングから、ほかほかゆげが立っています。台所の中は、しびれるように気持ちのいい食べもののにおいで、いっぱいです。いかにも台所らしくなりました。

安心してまかせておいて、すっかりめんどうをみてくれるへや、ひみつをいっぱいためた、うちの中の心臓、いちばんいごこちのいい、うちの中の奥の院になったのです。

虫だって、一ぴきもはいってこないし、かみなりだって、この中にははいってきません。

ここは、フィリフヨンカの天下です。もう、

道直下（どうちょっか）のジャングルのあらしを手（て）ににぎっているなんて、だれひとり知（し）らないのです。

「すごいかみなりだったな。どうだね。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「こわかったかい？」

「いや。」

と、ホムサは答（こた）えました。



ぼくなんだ。ぼくはホムサだ。ぼくのほんとのことは、だれも、なんにも知らないんだ。

ぼくの作ったかみなりで、ぼくはムーミンママをしかってやったんだ、と、トフトは思いました。そして、じっと、おとなしくしていて、このことは、ちびちび虫と、それから自分に話すだけにして、だれにも、なんにも話すまい、ときめました。トフトには、ほかの人の持っている電気なんて、ちっとも関係ありませんでした。なんだか、近くに、電気くさいにおいがしましたけれど、トフトには、まるっきりおぼえのない、関係のない電気でした。

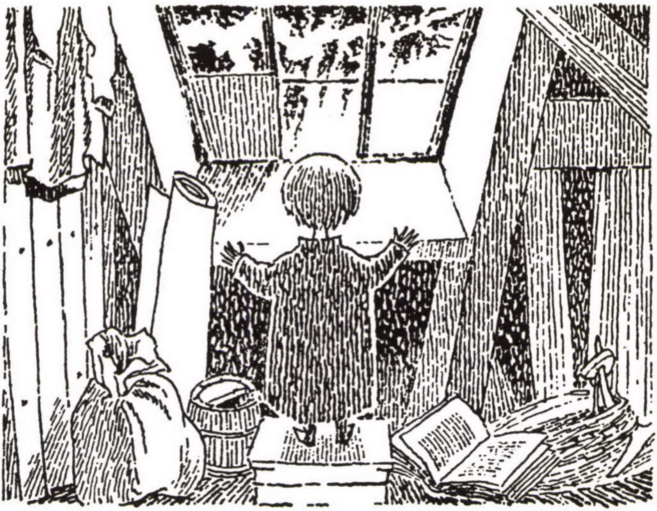
トフトの作ったかみなりは、トフトだけのものでした。谷間じゅう、人っこひとりいないといいなあ、それから、もっと大きなゆめを作れるぐらいひろいといいなあ、と、トフトは思いました。ほんとに、ねんにはねんを入れた、いいゆめを作るためには、うんとひろくて、うんとしずかでないといけないんだ。

天じょうにぶらさがったままで、まだ、こうもりはねむっていました。かみなりなんて、どこふく風というように。

下のほうから、庭でヘムレンさんが大声でどなるのがきこえてきました。

「おうい、ホムサ！　ちょっくら、手をかしてくれや。」

ホムサは、屋根うらべやから出ていきました。髪の毛をぱらりとたれさがらせて、顔をかくし、おとなしそうにねこをかぶって、ヘムレンさんのところへおりていきました。このホムサが、赤



だか、火の玉こぞうになったみたいな気がしました。まっかに燃える火の玉にね。

ホムサ＝トフトは、屋根うらべやの天まどから、空を見あげました。ぴかりと、ムーミン谷の空に、いなずまの走るのが見えました。ホムサはとくいでした。ぞくぞくするほどうれしくて、それから、ちょっぴりこわい気もしたみたいでした。あれは、ぼくのかみなりなんだ、と、トフトは思いました。ぼくが、あのかみなりを作ったんだ。とうとう、ぼくは、はっきり、目に見せてやりながら、話してやれる。さあ、話してやろう。生きのこりのちびちび虫に。原生動物類からかわってきた、ちび電気虫に……ぼくだぞ、かみなりをころがすのは。いなびかりを投げつけるのは、

まったよ。」

フィリフヨンカは、ため息をつきました。

「あなたがたって、なぜ、そんなに、みんなふうがわりなのかしら。このうちにいると、頭がおかしくなっちまいそうだわ。さあさあふたりとも、あっちへいってよ。昼ごはんのしたくにかかるんだから。」

フィリフヨンカは、ドアにかけ金をかけて、いわなをひろいあげました。ムーミンママの台所の中を、ぐるっと見まわしました。もう、頭の中には、どうしたら、さかなをちゃんと料理できるかということしかなくて、ほかのことは、みんなわすれていました。

あの、ちょっとの間、はげしくかみなりが鳴っているうちに、ミムラねえさんは、すっかり電気がかかってしまいました。パチパチ、火花は髪の毛からとびちるし、腕や足の小さなうぶ毛まで、ぴんと立って、びりびりふるえました。さあ、もりもり力がわいてきたわ、と、ミムラねえさんは思いました。

いまだったら、どんなことだってできるわ。できるからって、するわけじゃないんだけど。なんだって、したいことができるなんて、すごくすてきじゃないの。

ミムラねえさんは、羽ぶとんの上に、ちんまりまるまって、うずくまりました。すると、なん

「さあ、もう、あなたは、お台所から出ていかなくてはだめよ。わたし、ひとりにならなきゃ、お料理にかかれないんだから。」
「ほう、さようですか。」
と、台所の外に立っていたスクルッタおじさんが、ドアのすきまに鼻をつっこんで、大声をあげました。
「まあさ、あの女は、なんだかんだいったって、料理するのがすきなんだな。」
フィリフヨンカは、さかなをゆかにほうりだしました。
「だけど、きょうは、父の日なんだがなあ。」
と、スナフキンはつぶやきました。
「ほんとう？　それ、まちがいないの？」
と、フィリフヨンカは、うたがわしそうにいいました。それから、きつい目で、スクルッタおじさんを見つめていいました。
「あなたは、お子さんがおありなんですか。」
「ありっこないさ。」
と、スクルッタおじさんは答えました。
「わしは家族なんてきらいでな。ひ孫がいくたりもいるけれど、そいつらのことは、わすれち

ないことがわかったからです。
「スクルッタおじさんが、やっと一ぴき、さかなをつかまえたんだ。」
と、スナフキンはいいました。
「ところがね、ヘムレンのやつ、さかなの料理ができるのは、ヘムレンさまだけさ、なんていってるんだ。ほんとうかねえ。」
「そんなの、うそっぱちにきまってるわよ。」
と、フィリフヨンカは、大声をあげました。
「さかなを料理できるのは、フィリフヨンカしかいないわよ。ヘムレンさんだって、そのことは、よく知っているはずよ！」
「だけど、きみ、たった一ぴきだけじゃ、みんなにいきわたるように、料理できっこないよね。」
と、スナフキンは、しょげかえっていいました。
「まあ、そう。あなた、そう思ってるの。」
フィリフヨンカは、そういうが早いか、やにわに、そのいわなをひったくりました。
「このわたしでも、六人まえに料理ができっこないっていうおさかな、とっくりと見てみたいもんだわ。」
フィリフヨンカは、台所のドアをさっとひらくと、まがおになっていいました。

「さかなをとったぞ！」

おじさんは、両手でいわなをつかんでいました。うれしくて、うちょうてんになっていました。

「煮たらいいかな、焼いたらいいかな、どう思う。」

と、おじさんはききました。

「こいつを薫製にできるかまどはあるかな。形をくずさないで、このさかなを料理できるようなやつはいるかな。」

「フィリフヨンカさ。」

と、スナフキンはいって、けらけらわらいました。

「おじさんのさかなの料理なら、フィリフヨンカが、もってこいだよ。」

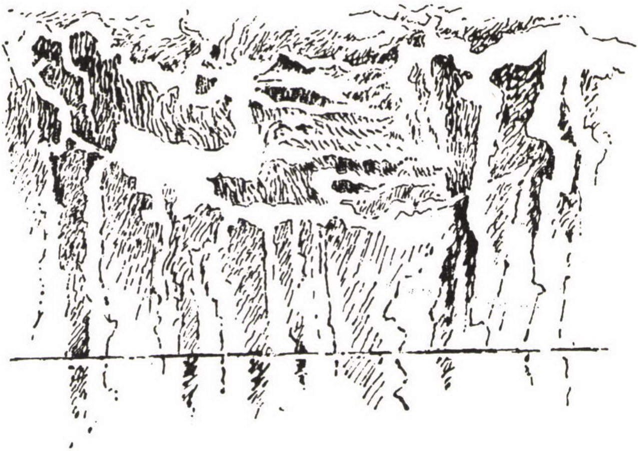
フィリフヨンカは、ドアのすきまから、鼻をぶるぶるふるわせながらつきだしました。鼻の頭のねこひげまで、ぶるぶるふるえています。スナフキンを台所の中に入れると、ドアのかけ金をかけました。それから声をひそめて、

「わたし、へいきだったわ、と思うわ。」

といいました。

スナフキンはうなずきました。フィリフヨンカがへいきだったというのは、かみなりの話では

じゅうをてらしだしました。
スナフキンは、すっかり感心してしまって、うれしさのあまり、思わず、ドスン、ドスンと足をふみならしました。
このいなずまに、風と雨がくわわってくるのが、いまは、ただ、待ちどおしいばかりです。でも、そいつは、あてがはずれました。山の峰と峰のあいだで、うんと重たいボールをころがしているみたいに、あっちでゴロゴロ、こっちでゴロゴロ、かみなりがいったりきたりしているだけです。こげくさいにおいがしてきました。と、ドドドドッと、勝ちどきをとどろかすように、すさまじい音がひびいたかと思うと、ドスン、ガラガラガラッと、鳴りわたりました。それからしずかになりました。ひっそりしてしまいました。いなびかりも、ぷっつり、きえてしまいました。
へんなかみなりだなあ、と、スナフキンは思いました。いったい、どこにおちたのかなあ。と思うまもなく、下のほうの、川の土手で、おそろしいさけび声がひびきました。スナフキンは、背中が、すうっとつめたくなりました。かみなりは、スクルッタおじさんのところにおちたんだ!
スナフキンが、おじさんのところにいってみると、おじさんは、ぴょん、ぴょん、ぴょんと、両足とびではねていました。
「さかなだ、さかなだ、さかなだぞ!」
と、おじさんは、大声をはりあげました。



それは、海からわきおこった、ほんとうにすごいかみなりでした。白やむらさきのいなずまがきらめきました。スナフキンは、こんなにきれいないなびかりを、いちどきに、こんなにたくさん見たのは、生まれてはじめてでした。ふいに、谷間の空が暗くおおわれました。フィリフヨンカは、スカートをつまみあげ、庭をすっとんで、帰っていきました。台所にとびこむと、バタンとドアをしめて、とじこもってしまいました。

スナフキンは、つんと鼻をあおむけにして、よく、風にさらしてみました。鉄みたいにつめたい空気が鼻にふれます。電気の火花みたいなにおいです。いなずまが、びりびりっと、大きく空をさいて走りました。と、目もくらむようにまばゆい光の柱が二本、さっと立って、谷

て、むだよ。」

と、フィリフヨンカは、しずんだ声でいいました。

「わたしをねらっている虫なんて、どっかにいっちまった。そんなもの、いやしない。あいつらは、ちびで、おとなしいんだ。なんて、あんた、いうかもしれないけれど、そんなことといったって、むだよ。わたしには、なんにもならないんだから。」

スナフキンは、じっと、フィリフヨンカの顔を見つめていいました。

「虫のやつが、ぜったいにはいってこないところがあるよ。台所なんだ。台所には、ぜったいにはいってこないよ。」

「それ、ほんとう？　まちがいない？」

と、フィリフヨンカは、問いつめるようにききました。

「そうさ。そんなこと、わかりきったことさ。」

と、スナフキンは答えました。

またかみなりが、ゴロゴロッと鳴りました。こんどはすぐ近くで鳴りました。スナフキンは、フィリフヨンカの顔を見て、にやりとしました。そして、

「まあ、口でいおうと、いうまいと、とにかく、かみなりはやってくるよな。」

といいました。



「ねえ、おもてへ出てしまったのよ。洋服だんすの戸をあけたら、出ていってしまったの。もう、いつ、どこから出てくるかしれやしないのよ……きみわるい虫が、そこいらじゅうにうようよしていて、じっと待ちかまえているのよ……。」

「ほかにも、それを見た人がいるのかい。」

と、スナフキンは、そっときいてみました。

「いるわけないじゃないの。」

と、じれったそうに、フィリフヨンカは答えました。

「わたしを待ちかまえていたんだもの。」

スナフキンは、トントンとパイプの灰をおとして、なにかいうことばを見つけようとしました。かみなりがまた鳴りました。

「かみなりがやってくるから、なんていったっ

たとき、のどのずっとおくのほうできこえるような音でした。

ひと足、ひと足、フィリフヨンカは階段をおりていきました。あのきみわるいなにやらは、ちりぢりばらばらにちらばっていったとは思えませんでした。どこかじめじめした、すみっこの暗がりに、くっつきあってひとかたまりになり、じっとようすを見ていると思うほうが、ほんとうらしい気がしました。おち葉にうずもれて、くさりかかったくぼ地の中に、なりをひそめてかくれているのです。でも、そのはんたいかもしれないわ。ベッドの下やら、戸だなの中やら、長ぐつの中やら――どこにもかしこにも、いるのかもしれないわ。

まあ、不公平だわね、と、フィリフヨンカは思いました。わたしの知っている人は、だれも、こんなめにあったことないわ。わたしだけだわ。いらいらしてきて、フィリフヨンカは、すごい大またで、とぶように、テントのところへ走っていきました。テントの入り口はしまっていました。フィリフヨンカは、むちゅうで、テントの入り口を手さぐりでさがしながら、ひそひそ声でいいました……。

「わたしよ。ねえ、フィリフヨンカよ。」

テントの中にはいると、いくらか気持ちがおちつきました。フィリフヨンカは、ねぶくろに深深とすわりこんで、ひざっこぞうをかかえながらいいました。

「でも、なんのことだか、ちっともわかんないなあ。」
と、ホムサは、小さな声でつぶやきました。
「なんだか、ただ、おしゃべりしているみたい……あんまり早口でしゃべりすぎるんだ。でなきゃ、ちゃんと、わかるはずなんだ。」
ホムサは、両手で髪の毛をかきむしりながら、思いつくままに、半分やけっぱちで、お話をつづけていきました。その動物は、だんだんからだが小さくなって、生きのびていくことが、とてもむずかしくなったことだけは、ホムサにもわかりました。
かみなりの音が、だんだん近づいてきました。いなずまがきらめくたびに、あたりいちめんが、ぱっとあかるくなりました。パチッ、パチッ、電気の火花のちる音がして、木立がぶるぶるふるえました。その動物は、いまだ、と思いました。そして、ぐんぐん大きくなっていきました。……いなびかりが、ますますはげしくなりました。白く、ぴかり、むらさきに、ぴかり、息つくひまもなくきらめきました。その動物は、ますます大きくなりました。親も兄弟もいらなくなるくらい、とても大きくなりました……。
ここまでお話しすると、気持ちのわるいのが、すこしなおってきました。ホムサ＝トフトは、ごろっとあおむけになって、天まどを見あげました。まどは、灰色の雲でぬりつぶされていました。ゴロゴロゴロ、ずっと遠くのほうで、かみなりが鳴りました。人が、ほんきでおこりそうになっ

「あいつは、ほんとにいるんだ。ぼくが、いま、あいつを出してやったんだ。」
「まあ、なにを出してやったの。」
と、フィリフヨンカは、心配そうな顔できました。
ホムサは、首をふりました。
「なんだか知らないよ。」
「でも、あなたは、それを見たんでしょ。よく考えてみてよ。どんなかっこうしていたの。」
でも、ホムサは、屋根うらべやにとびかえって、とじこもってしまいました。心臓がどきどき、波うっていました。
ほんとうだったんだ。どきどきは、だんだんはげしくなって、のどまでどきどきしてきました。ホムサは、さっそく、本のあのところをひらいて、できるだけいそいで字をたどっていきました。
「その後、この動物は、からだの構造を新しい生活環境に適合させていくとともに、新しい生活環境にうちかつ必要から、生存を可能にする構造上の諸条件を、しだいにととのえていった、と推測できるふしがある。こうして、まったくの仮定、つまり仮説としての生存を、どのくらいともわからない期間つづけていきながら、この動物は、えたいのしれない進化をとげるのである。このような行動様式は、いわゆる正常なことのなりゆきからすると、判断にくるしむものなのではあるが……。」

「ホムサ！　きてちょうだい！」
ホムサ＝トフトは、屋根うらべやから出てきました。顔をしわくちゃにして、目をぱちぱちさせて、まるで知らない人みたいにフィリフヨンカを見つめました。ホムサは、ぷうっと、鼻のあなをふくらませました。電池みたいなにおいが、ぷうんと、強くにおいました。鼻をつく、息づまるようなにおいです。
「たんすの中から出ていったの！」
と、フィリフヨンカはさけびました。
「こん中にいたんだけどね。おもてへ出てしまったの！」
洋服だんすの戸がバタンとひらきました。ぞうっ。中でなにかが動くのが、ちらっとフィリフヨンカに見えました。
――かの女は、かなきり声をあげました。でも、それは、戸のうちがわについている、ただのかがみでした。それだけのこと。たんすの中は、あいかわらずからっぽ。
ホムサ＝トフトは、口に手をあてながら、たんすに近づきました。まっ黒な目をまんまるにして。電気のにおいは、ますます強くにおいました。
「ぼくが出してやったんだ。」
と、ホムサは、声をひそめていいました。

フィリフヨンカは、そっと立ちあがりました。からっぽのたんすが目にはいりました。ほこりっぽい、たんすの中の暗がりから、ぞっとするような、えたいのしれないにおいがしてきました――もののくさった、息づまりそうな、とろけるようなにおいでした。

　たんすの中には、虫くいの、もめんのコーヒーぶくろと、灰色にほこりをかぶった、やわらかそうな敷きものしかはいっていませんでした。フィリフヨンカは、ぞくっと身ぶるいしながら、からだを下にこごめてみました。ほこりの中に、針でつついたような、小さな足あとがあるみたいだけれど。見おとしそうなくらい、まるっきり小さな足あとが……たんすの中になにかがいて、それが、戸があいたので出ていったんだわ。石をひっくりかえしてみると、石の下からはいだしてきたり、くさった木の下で、もそもそ動きまわっている、そういうものよ。それが、いま、たんすの外に出ていってしまったんだわ、ということが、フィリフヨンカにわかりました。サラサラ、小さな足音をたて、背中の甲を、かたこと鳴らし、触角をぴくぴく、白いぶよぶよのおなかをちらちらさせて、はいだしていったのです……フィリフヨンカは、かなきり声をあげました。



きいの上にいすをおいて、こしかけていました。
「かぎなんて、かけっこないよ。ムーミンたちは、そんなことをするもんか。」
と、スナフキンはいいました。
「おお、寒い！」
と、フィリフヨンカは大声を出しました。
「どうして、あなた、わたしがきらいなの。どうして、わたしにさせることを、なにか、思いつけないの。」
「台所におりていけばいいじゃないか。」
と、スナフキンはつぶやきました。
「あっちのほうが、あったかだよ。」
フィリフヨンカは、へんじをしませんでした。かすかに、ずっと遠くで、かみなりが鳴りました。
「かぎなんか、かけっこないよ。」
と、スナフキンはくりかえしました。スナフキンは、洋服だんすのところへいって、戸をひらいてみました。たんすの中はからっぽでした。スナフキンは、トントントンと、階段をいちもくさんにおりていきました。

おじさんは、さっそく、スナフキンのそばからはなれていきました。スナフキンは、さがしものをつづけました。スナフキンは、ムーミントロールの手紙をさがしていたのです。お別れのあいさつの手紙です。ムーミントロールは、さよならをいうのを、けっしてわすれたりしませんから、手紙は、どこかにあるのにちがいないのです。でも、いつもムーミンがなにかをかくしておくところは、どこを見ても、からっぽでした。

スナフキンに、どんな手紙を書けばいいのか知っているのは、ムーミントロールだけでした。かいつまんで短く。約束するだの、こいしいだの、かなしいだの、ということは、いっさい、これっぽっちも書きません。そして、おしまいは、げらげらわらいだすようなことでむすぶんです。

スナフキンは、うちの中へはいって、二階へあがっていきました。階段の手すりの、でっかちの木のかざりをねじって、はずしてみました。でも、はずしてみても、その中も、やっぱりからっぽ。

「からっぽだわね。」

と、スナフキンのうしろから、フィリフヨンカが声をかけました。

「あんた、ムーミンたちの貴重品をさがしているのなら、そんなところにはないわよ。洋服だんすの中にはいっているのよ。でも、たんすには、かぎがかかっているわ。」

フィリフヨンカは、足に毛布をかけ、きつねのえりまきに鼻までうずまって、自分のへやのし

「いや、まったく、おまえさんのいうとおりだとも。むかしはな、くる日もくる日も、わしは、さがしものにあけくれていた。ものをさがすばかりじゃない。ことばだの、名まえだのを、必死に思い出そうとして、頭の中じゅうさがしていたもんだ。そのとき、いちばんいやになったのは、ほかのやつらが、手をかそうとしたことだ。」

　おじさんは、スナフキンのコートのすそにしがみつきながらいいました。

「どんな毎日だったか、わかるかな。つまりだな、みんなに、最後にそれを見たのは、どこだったの。さあ、思い出して。それは、いつのことなの。どこのことなの。なんて、うるさくきかれどおしなんだ。あっはっはっ。もう、そんなことは、みんなおしまいだ。わしは、わすれものだって、おとしものだって、すきほうだいにしてやるんだ……。」

「スクルッタおじさん。」

と、スナフキンはいいました。

「秋には、さかなは、海岸のほうにいっちまうんだぜ。川のとちゅうになんて、いやしないよ。」

「小川のとちゅうだ。」

と、スクルッタおじさんは、うきうきしながらいいなおしました。

「いや、もっともだ。そんな、もっともなことをいわれたのは、朝からいままで、いまがはじめてだ。」

いつもより、すこしぞんざいな気がしました。ヘムレンさんは、スナフキンのそばまで、もう近づいていました。するだけの理由はありました。

スナフキンは、だまっていました。じっと立っていました。ふいに、スナフキンは、橋のらんかんのそばの、郵便箱のところへとんでいきました。ふたをあけて中をのぞきました。と、また走りだして、かえでの木のところへいき、幹のほらあなの中へ腕をつっこみました。

スクルッタおじさんが立ちあがって、どなりました。

「おうい、おまえさん、手紙のくるあてでもあるのかい。」

もう、スナフキンは、まき小屋までいっていました。まきわり台をひっくりかえしてみました。小屋の中へはいって、大工仕事台の上のほうの、まどにつってある小さなたなのうらを、手さぐりでさぐってみました。

「おまえさんは、めがねをさがしているのかい。」

と、おじさんは、気になってきてききました。

スナフキンは、また歩きだしながらいいました。

「ぼくのさがしているのは、おせっかいされないことさ。」

「よくいった！」

と、スクルッタおじさんは大声でさけんで、せいいっぱいいそいで、あとからついていきました。

ヘムレンさんだって、スナフキンが看板ぎらいのことぐらい、きいているはずでした。なにしろ、立入禁止とか、境界とか、閉鎖とか、しめだしとか、ひとりじめをあらわす感じのことばは、なにがなんでも、スナフキンは大きらいなのです。――スナフキンのことを、すこしでも気をつけている人だったら、この世の中には、たった一つだけ、スナフキンをおこらせ、かなしませ、きちがいみたいにさせるものがある――それは看板だってことを知っているはずでした。もう、スナフキンは、きちがいみたいになっていました。かなきり声をふりしぼり、手をふり、足をふみならし、世界じゅうのくぎというくぎを、みんなひっこぬいてしまわなければ、気がおさまらなくなったみたいでした。

ヘムレンさんは、ベニヤ板を、するっと川に流しました。たちまち、板に書いた字は、ぼやっとしてきて、読めなくなりました。川の流れが板をさらって、板は、ずんずん、海のほうにむかって流されていきました。

「ほら、きみ、ごらんよ。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「流れていっちまったよ。まあ、ぼくの思っていたほど、そう重要なものではなかったんだろうよ。」

ヘムレンさんの声の調子は、いつもと、ちょっと――ほんのちょっと――ちがっていました。

「まあ、安心していられるからじゃないかな。名まえってものには、ちょいとちがったものがあるだろう。わかるかい、ぼくのいうこと。」
「わかんないな。」
と、ミムラねえさん。
ヘムレンさんは、ポケットから太いくぎを一本つかみだしました。ベニヤ板を、橋のらんかんに、くぎでガンガンうちつけだしました。スクルッタおじさんは、びくっと目をさまして、ぶつぶつつぶやきました。
「命をたすけたんだ、ご先祖さまの……。」
と、鼻までぼうしをま深くかぶったスナフキンが、すごいいきおいで、テントからとびだしてきました。かなきり声でさけびました。
「なんだ、なにしているんだ。やめろ、すぐにやめろ。」
スナフキンが、きちがいみたいにとりみだすところなど、いままで、いちども見たことがありません。みんなびっくりして、ばつがわるそうに、顔をそむけました。
「めんくらった顔なんかするの、よせ！」
と、スナフキンは、くってかかるようにどなりました。
「よく、わかっているはずだ！」



こんで、ベニヤ板に大きな字を書いています。赤茶色の染料で、ムーミン谷と書こうとしています。

「それ、だれのために書いているのよ。」

と、ミムラねえさんがききました。

「ここまでやってきた人だったらさ、ここへやってきたんだってこと、わかるんじゃないの。」

「ちがうんだな。これは、人のために書いているんじゃないんだ。」

と、ヘムレンさんは説明しました。

「ぼくたちのためさ。」

「なぜよ。」

と、ミムラねえさん。

「そ、そんなこと、わかんないよ。」

と、ヘムレンさんは、どぎまぎしながら答えました。なぜかな、と、頭の中で考えながら、ヘムレンさんは、最後の字を書いてしまって、こういってみました。

みの中にかくれて、外界から身をまもりながらくらしていたのである。」

「そうなんだな。」

と、トフトは、小さな声でつぶやきました。

「もう、かれのそばに、だれでもいけるようになっちまったんだもの。……かれには、電気がなくなってしまって、ただ、もそもそはいまわっているだけなんだ。自分がどこにいったらいいのかもわからないんだ……。」

ホムサ＝トフトは、うぐいあみの中に、ちんまりまるくなって、お話をはじめました。

まず、その虫を、ある谷間にいかせました。そこには、放電するあらしを作れる、あるホムサがすんでいます。白いいなびかりや、むらさき色のいなびかりが、ぴかぴかっと光るたんびに、谷間はあかるくてらしだされました。いなびかりは、はじめは遠くのほうで光っていました。それから、だんだんと近づいてきました……。

スクルッタおじさんのさかなとりのあみには、ちっともさかながはいってきませんでした。小さなさかな一ぴきもです……。おじさんは、鼻の上まで、ぼうしを深々とかぶって、橋の上でねむっていました。そばには、ミムラねえさんがねそべっていました。炉ばたの敷きものを下にしいて、茶色い川の水を見おろしていました。郵便箱の前には、ヘムレンさんが、どっかりすわり

第12章

ちびちび虫は，むくむくむく



とてもてまどりながら、ホムサ＝トフトは、それでも、いっしょうけんめい読みすすんでいきました。

「放電がやんだときには、たいへんな大さわぎになったにちがいないが、その混乱期のことは、とてもことばでは、うまくいいあらわすことができない。このちびちび虫、つまり、なにがどうあろうとも、いまなお原生動物の一族である、このきみょうな虫は、その時期に進化がかなりおくれ、一時は進化が阻止されさえしただろうことも、じゅうぶんに考えられる。この虫の、燐光を放出する能力は停止した。みじめにも、この虫は、しばらくは岩のさけめや、深いくぼ

スナフキンは、ごろんとあおむけにひっくりかえりました。こんどは、はらばいになってみました。鼻をねぶくろにおしつけてもみました。だけど、どんなことをしてみても、連中のまぼろしは、テントの中へはいってきました。ずっと、テントの中にはいりっきりなんです。——ヘムレンさんのおどおどした目つき、ベッドになきふしているフィリフヨンカ、じっと地面ばかり見つめているホムサ、とんちんかんなことばかりいう、スクルッタおじさん……その人たちで、テントの中はいっぱいでした。スナフキンの頭の、まんまん中にまでいました。おまけに、テントの中には、ヘムレンさんのにおいがしみついていました。

（ぼくは、連中のところへ出かけていかなきゃいけない。）と、スナフキンは思いました。（思い出してばかりいるよりも、いっしょにいたほうが、まだましだ。連中ときたら、ムーミンたちとは大ちがいだ。）

はっと、きゅうにスナフキンは、ムーミン一家がこいしくて、たまらなくなりました。ムーミンたちだって、うるさいことはうるさいんです。おしゃべりだってしたがります。どこへいっても、顔があいます。でも、ムーミンたちといっしょのときは、自分ひとりになれるんです。いったい、ムーミンたちは、どんなふうにふるまうんだろう、と、スナフキンはふしぎに思いました。夏になるたびにいつも、ずっといっしょにすごしていて、そのくせ、ぼくが、ひとりっきりになれたひみつがわからないなんて。

わしのたのしいゆめを、ぶちこわさないでくれよ。」
「そうね、そうするわ。」
と、ミムラねえさんはいいました。
スクルッタおじさんは、すっかりこうふんしていました。大きな足音をたてながら、テントの前にいってどなりました。
「おうい、中にいる人！ こいつは小川かね、さんぼん川かね、さんずい河かね。さかなはいるかね、いないかね。どうして、なにもかも、むかしとちがっているんだい。おい、いつになったら、おまえさん、おもてへ出てきて、ほんきで話をきく気なんだい。」
「もう、すぐにさ。」
と、スナフキンは、きげんのわるい声で答えました。スナフキンは、いっしんに耳をすませました。でも、スクルッタおじさんは、それいじょう、なにもいいませんでした。
（ぼくは、テントから出て、みんなのところへいかなくちゃならないんだ。）と、スナフキンは思いました。
（こんなふうではだめだ。いったい、どうして、ぼくは、この谷へもどってきたんだろう。ぼくは、この連中とは、まるっきり関係がないんだ。あいつらは、音楽のことなんて、ちっとも知りやしないんだ。）

人は、川ってよんでいるの。だから、川っていっているのよ。これがさんずい河だってことがわかるのは、わたしきりだわ。どうして、あなたは、ほんとうはないものや、ほんとうはおきなかったことばかり、わあわあいうの。」
「胸をわくわくさせるためさね。」
と、おじさんは答えました。
ミムラねえさんは、くりかえしくりかえし、髪をとかしました。とかすたびに、サラサラと、髪はかすかに音をたてました。ものうく、あじけなく、波うちぎわをあらってきえる、波の音みたいでした。
スクルッタおじさんは、立ちあがりながら、さもえらそうにいいました。
「それでだ。もし、おまえさんが、これを河だとわかったとしてもだな。なんで、それを口に出していう必要があるんだい。いや、おそろしい子どもだよ。なんで、わしをかなしませるんだい。」
ミムラねえさんは、はっとして、髪をとかす手をやすめました。
「わたし、おじさまをすきなのよ。かなしませようなんて気はないわ。」
と、スクルッタおじさんはいいました。
「そいつはけっこう。」
「でもな、それなら、ひとつ、あれはこう、これはこうだなんていうのをやめてくれないかな。

「もうすこしで、ご先祖さまが焼け死んじまうところだったんだ。」
「だけど、死ななかったわ。」
と、ミムラねえさんはいいました。
　スクルッタおじさんは、やっきになって説明しました。
「ちかごろのわかいもんときたら、たいへんなことがおきても、わからんとみえる。おまえさんたちは、勘がにぶいのだ。わしのことなど、ちっとも尊敬しとらんのだろう。」
　おじさんは、川の中にしかけておいたさかなあみを、ひっぱりあげました。中はからっぽでした。
「春でなきゃ、川にさかなはいないわよ。」
と、ミムラねえさんはいいました。
「これは、川じゃないぞ。小川だぞ。」
と、スクルッタおじさんはどなりました。
「こいつは、わしの小川だ。さかなが、いっぱいいるんだ。」
「あのねえ、スクルッタおじさん。」
と、ミムラねえさんは、おちついた声でいいました。
「これはね、川でもないし、小川でもないのよ。さんずい河なのよ。だけど、ムーミンのうちの

と、スクルッタおじさんは、テントの外からどなりました。
「わしは、ご先祖さまの命をたすけたぞ！　わしの友だちの、ご先祖さまの命をたすけたんだ。あの女は、ご先祖さまが、ストーブの中にすんでいるのをわすれておった。こんなだいじなことをわすれるなんて、いま、あの女は、自分のベッドでわんわんないとるよ。」
「だれのことだい。」
と、スナフキンはたずねました。
「もちろん、きつねのえりまきの女さ。」
と、スクルッタおじさんは、声をはりあげました。
「ぞっとしちまうよ、まったく。」
「なかなくたって、いいのにね。」
と、スナフキンは、テントの中でつぶやきました。
　スクルッタおじさんは、びっくりしました。ひょうしぬけして、がっかりしてしまいました。つえで、ドンと地面をついて、さんざん、ひどいことばをならべたてました。それから、橋の上にすわって髪をとかしているミムラねえさんのところにおりていきました。
「わしがご先祖さまの命をたすけたところを、きみは見ていただろう。」
と、おじさんは、問いつめるようにききました。

にこしかけて、コーヒーをのんでいました。フィリフヨンカは、みんなを見まわしました。スクルッタおじさんのぼうしはしわだらけ。ホムサの髪はもじゃもじゃ。ヘムレンさんの太い首は、朝のつめたい空気にあたって、ちょっぴり赤みがさしています。みんな、そろっているわ。それからミムラねえさん、まあ、なんてきれいな髪の毛なんでしょう――ふいに、フィリフヨンカは、どっと、からだじゅうのつかれがでてきて、（だけど、あの人たち、みんな、わたしをきらいなんだわ。）と思いました。

　フィリフヨンカは、応接間のまん中に立ちどまって、まわりを見まわしました。ヘムレンさんが、もう、時計のねじも、気圧計のねじも、まいてしまっていました。へやの家具は、どれも、おかれたところに、きちんとおさまっていました。このへやでは、いままで、いろいろのできごとがあったはずでした。でも、へやの中はよそよそしく、しんとしずまりかえっていて、フィリフヨンカには、さっぱり、どんなことがあったのか、けんとうもつきません。

　いきなり、フィリフヨンカは、鉄砲だまのようないきおいで、台所に、まきをとりにはいっていきました。応接間のストーブの火を、がんがんもやして、この寒々としたうちの中も、ここにすもうとしている人たちも、あたためてあげよう、と思ったのです。

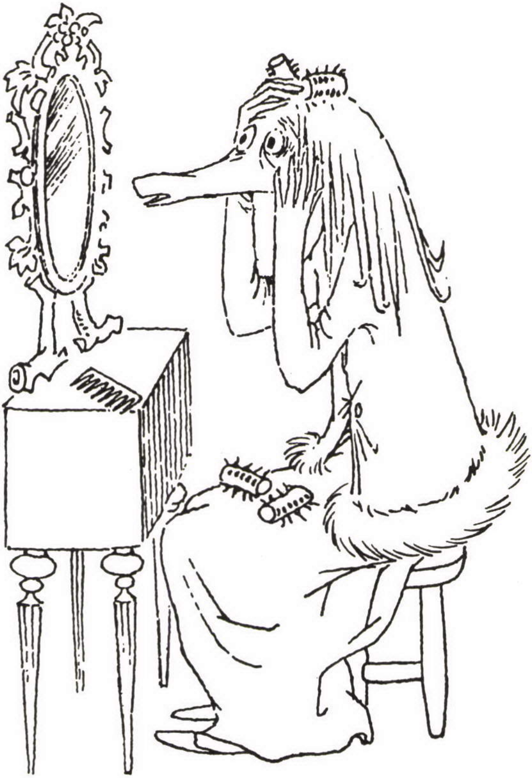
「おい、おまえさん。テントの中の人。ええと、おまえさんの名まえは、なんだったっけ。」

きのへやでくらすのね、と思いました。自分のうちにいるときでさえ、そうなんです。べつに、そうするのがすきなわけではなくて、しようと思ったことが、いつも、反対の結果になってしまうだけなのです。髪の毛は、まだ、じゅうぶんにかわいていませんでした。こんなしめっぽいへやでは、それもあたりまえです。巻き髪がくずれて、ぱらりとたれてきました。どすっとおちてきて、たけがのびた自在かぎみたいでした。なにもかも、うまくいかないのね。どれもこれもよ。朝ととのえる髪型っていうのは、とてもだいじなのに。それに、このうちの中には、ミムラねえさんだって、ほかの人だって、おおぜい、わたしを見る人がいるんだわ。うちの中はしめっぽくて、かびくさくて、ほこりっぽくて、空気を入れかえなくては、だめだわ。どのへやも、風通しをよくして、かわかして、お湯をどっさりわかして、大々的に、徹底的に、大そうじをしなくちゃ……。

しかし、フィリフヨンカは、大そうじ、ということばが頭にうかんだだけで、もう、くらくらっとめまいがして、からだじゅう気分がわるくなり、いっしゅん、深いあなのふちに立っているような気持ちになって、ぞっとしました。わたしは、もう二度と、おそうじができなくなったんだ、ということが、よくわかりました。

「おそうじもできない、お料理もできないでは、生きていたってしょうがないじゃないの。ほかには、するねうちのあるものなんて、なにもないもの。」

ぶらりぶらり、フィリフヨンカは、階段をおりていきました。ベランダでは、みんながベンチ



んだわ。まどなんて、ほんとにあてにならないんだから。風で、バタンとあいてみたり、また、しまってしまったり……。北の客間は、おもてよりもきびしくひえこみました。

　フィリフヨンカは、かがみの前にこしかけて、ちょっぴりくしゃみしました。髪から、毛巻き紙をはずしました。わたしって、いつも北む

ヘムレンさんが、うちのほうへ歩きだしたときには、一日のはじまる前の、しずかな朝のひときは、おしまいになっていました。もう、みんながおきだしていました。だれも、ヘムレンさんがすばらしいもうけものをしたことを知りませんでした。フィリフヨンカは、空気を入れかえようとして、まどをひらきました。

「おはよう。」

と、ヘムレンさんはどなりました。

「ぼくは、テントの中でねてきたよ。夜の音を、すっかりきいてきたんだ。」

「なんの音ですって。」

と、フィリフヨンカは、あいそうのない声でききながら、とめ金で、まどをしっかりひらきました。

「夜の音さ。」

と、ヘムレンさんはくりかえしました。

「つまりさ、夜、きこえてくる音ってことでね……。」

「なるほど。」

と、フィリフヨンカ。

フィリフヨンカは、まどがきらいでした。みんな、まどのことが、なんにもわかっちゃいない

思いっきり羽をのばしてね。ときどきさ、ねえ、きみ。ときどき、ぼくはとてもムーミンパパと似ているな、と思うときがあるんだよ。その、つまり、ほんのちょっぴりだけどね。でもね、それでもね。」

スナフキンの口から、わけのわからない声が、またもれました。

「そう、ほんとなんだ。」

と、ヘムレンさんは、しずかにうなずきました。

「それでさ、ムーミンパパのヨットの名まえは、冒険号っていうんだろう。あれは、意味深長だよね。」

ふたりは、テントの前で別れました。

「すてきな朝だったよ。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「ぼくの話しあいてになってくれて、ほんとにありがとう。」

スナフキンは、テントの中にとじこもりました。テントの色は、夏を思わせるようなみどり色で、テントの中にいると、おもてには、明るい日の光がふりそそいでいるような気持ちになれるのです。

んだ。そして、タールをその上にぬるんだ。ワニスじゃなくてね。そうだろう？　ぼくは、毎年春にね、海に出ていく前に、タールをぬるんだ。ねえ、きみ。きみにたすけてもらいたいことがひとつあるんだけどな。帆のことなんだ。白にしたらいいか、赤にしたらいいか、まよっているんだ。白は、まあ、いつだっていいにきまっているよな。古典的だもの。だけど、そのあとで、ふと、赤を思いついたんだ。なにかしら、赤って、勇ましいだろう。きみは、どう思う。みんなにさからっているみたいに思えるかい。」

「いや、そうは思わないよ。」

と、スナフキンは答えました。

「赤にしたら、もんくなしだ。」

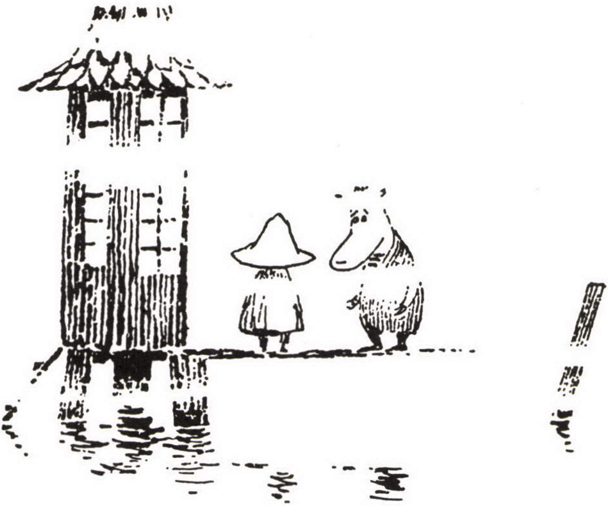
スナフキンは、ねむたくなっていました。テントの中にもぐりこんで、とじこもってしまいたくてたまりません。ほかのことは、なんにもする気がおきません。

帰るとちゅうも、のべつまくなしに、ヘムレンさんは自分のヨットの話をしていました。

「いや、ふしぎなんだけどねえ。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「ぼくは、ヨットのすきな人が、みんな親戚みたいな気がするんだ。たとえばさ、ムーミンパパだよ。ある晴れた日に、パパが帆をあげて、海に出ていくんだ。ただ、出ていくだけなんだよ。



寒々とした海べでした。こんなに寒々とした海べなんて、世界じゅう、どこをさがしたってありません。

「ねえ、きみ。」

と、ヘムレンさんはいいました。

スナフキンは、パイプをかみしめながら、水の上を見おろしていました。

「うん、うん。」

と、スナフキンはうなずきました。それから、すこし間をおいていいました。

「小さなボートは、どんなときでも、よろいばりにしなくちゃいけないな。」

「ぼくもそう思うよ。」

と、ヘムレンさんは、あいづちをうちました。

「ぼくのヨットも、よろいばりだよ。小さなヨットには、あれがぜったいにいちばんいい

スナフキンは、先へすすんでいきました。浜べには、目のとどくかぎりいちめんに、みち潮や、あらしのためにうちあげられた、ありとあらゆるものが、黒く、山になってもりあがっていました。すてたもの、おきわすれたもの、海草やあしのあいだにころがりこんだものなどが、うずたかくなっていました。みんな黒ずんで、水をすって重たくなっていました。ひびのはいった材木には、くぎだの、ねじまがった金具などが、やたらとくっついていました。海は浜べをむしばんで、立ち木のあるところまで、波のおしよせたあとがのこっていました。その立ち木の枝には、海草がひっかかっていました。

「大風がふいたばかりのあとだな。」

と、スナフキンはいいました。

「やあ、いま、ぼくも、そういおうと思っていたんだ。すごく、そう思っていたんだぜ。」

と、スナフキンのうしろから、ヘムレンさんはどなりました。

「ぞっとするくらい、すごくだよ。」

スナフキンは、いつものくせで、なにやらわけのわからない声を出しました。わかったよ、でも、いいたすことはなんにもないよ、という意味でした。スナフキンは、桟橋の上に出ていきました。桟橋の下の砂底には、茶色いかたまりがぎっしりつまっていて、波のまにまにゆれていました。あらしでずたずたにちぎれた海草でした。さっと、きりがきえました。見わたすかぎり、

に見えました。ひっそりしたしずけさにとけこんで、はてしなくひろがる荘厳なけしきでした。
ヘムレンさんは、ふと、自分のヨットを思いうかべました。でも、口には出しませんでした。いつのまにか、スナフキンのあとについて、海べまできてしまいました。わずらわしいことなど、また、ひとつもなくなりました。なんでも、みんな、たいせつな意味が、いっぱいあるように思えてきました。

更衣所の桟橋はもとどおりでした。ヨットは、すがたをけしていました。わたり板や、さかなを入れるびくは、みち潮でもさらわれなくてすむところにおかれていました。そして、小さなわたし船は、立ち木の近くまで、ひっぱりあげられていました。きりは、しのびやかに水の上をはって、沖へきえていきました。なにもかも、しっとりと、灰色にくすんでいました。浜べも、空気も、しずけさも。

「きみにわかるかい、いまのぼくの気持ち。」

と、ヘムレンさんは大声をはりあげました。

「まるっきり――まるっきり、いつもとちがう気持ちなんだ！　もう、耳だっていたくないよ。」

ふと、ヘムレンさんは、ほかの人がたのしくすごせるように、自分が、いつも、なんでも、きちんとかたづけようとしている話をしてみたくなりました。でも、ちょっとはずかしかったし、それに、いいたいことをうまくいいあらわすことばが見つかりませんでした。



「ヨットは、もう、あそこにつないでないと思うな。」と、スナフキンは、コップを下におきながらいいました。

（ムーミンたちは、ヨットにのって出かけたのにちがいないんだ。）と、スナフキンは思いました。（でも、こんなヘムレンさんなんかと、ムーミンたちの話はしたくないや。）

しかし、ヘムレンさんはからだをのりだして、まじめくさっていいました。

「つないであるかどうか、見にいかなくちゃね。きみとぼくと、ふたりきりでね。ふたりきりのほうが、たのしいものな。」

ふたりは、しだいに晴れあがって、ちっていくきりの中にはいっていきました。森には、きりがどこまでも、白い屋根のように、木々のこずえにかぶさっていました。黒い木の幹が、屋根をささえている柱みたい

ヘムレンさんは、からだの前のほうが、もう、ぽかぽかあたたまってきました。こしもいたくなくなりました。ふうふういうような、あついコーヒーでした。

「きみといっしょにいると、ほんとうにたのしいよ。」

と、ヘムレンさんは、すっかりうちとけていいました。

「ほんとに、きみは、口数がすくないんだもの。きみは、なんにもいわないから、きっと、おそろしくりこうなんだろうな。ぼくのヨットの話をきいてもらいたくなっちまうよ。」

きりは、ちりはじめていました。ほんのすこしずつ。しっとりぬれた黒土が、ふたりのまわりに、ヘムレンさんの、どえらく大きい長ぐつのまわりに、しずかに、すがたをあらわしてきました。でも、ヘムレンさんの頭は、あいかわらず、きりの中にはいっていました。

ヘムレンさんは、耳のほかは、どこもかしこも、人ごこちがついてきました。コーヒーをのんでおなかがあたたまると、きゅうに、いやな気分がけしとんで、元気がでてきて、いいました。

「ねえ、きみ。ぼくときみとは気があうね。ムーミンパパのヨットは、更衣所の前の桟橋につないであるんだろう。どうだい。」

とんがり屋根で、赤やみどりのまどガラスがあって、そして、水の中にきえている、短い、きゅうな階段のある更衣所。その更衣所から、さびしそうに、遠くのほうまで海の中につきでている、黒ずんだ棒ぐいの上にのった桟橋。ふたりは、その桟橋を思い出しました。

と、スナフキンはいいました。

ヘムレンさんは、ねぶくろを頭にかぶったまま、たき火のそばにはいだしてきました。ヘムレンさんは、ねむたくて、寒くてたまりませんでした。でも、あいそよくしなくちゃ、と思っていました。

「野宿って、すばらしいね。」

と、ヘムレンさんはいいました。

スナフキンは、ヘムレンさんにコーヒーをすすめました。

「それにさ、考えてもみろよ。」

と、ヘムレンさんはつづけました。

「いっぱいひみつのあるみたいな、いろんな音が、ほんもののテントの中に、夜の暗やみの中からきこえてくるんだぜ。きみ、耳をほじくるものなんて持っていないだろうね。」

「うん、持っていないよ。」

と、スナフキンはいいました。

「きみ、コーヒーにおさとうを入れるかい。それとも入れないほうがいいかい。」

「入れてくれ。できれば四つな。」

と、ヘムレンさんは答えました。

す。横になって、ちぢこまって、できるだけ体温がにげないようにして、じっとしたまま、ゆめを見よう、見ようと思えばいいのです。

きりにつつまれると、谷はすみずみまで、しんとしずかになりました。

スナフキンは、けものみたいに、すぐ目がさめます。ぱっちりさめてしまいます。あの五つの音色が近づいていたのです。

「しめたぞ。」

と、スナフキンは思いました。

「ブラックコーヒーを一ぱいのんだら、もう、ぼくのものだ。」（ほんとは、コーヒーなんて、はぶくべきだったんです。）

たき火に火がついて、朝ぎりの中でもえだしました。スナフキンは、コーヒーポットに小川の水をいっぱい入れて、火の上にのせました。一歩うしろにさがりました。と、のけざまに、ヘムレンさんのくまでの上にひっくりかえってしまいました。ガラガラ、ガラン、すさまじい音をたてて、シチューなべが、小川のふちをころがりおちていきました。

ヘムレンさんが、でっかい鼻を、テントの中からつきだしていいました。

「よう、おはよう。」

「よう、よう、おはよう。」

第 11 章
さびしい心は，おしゃべりになる



　きえかかった秋の夜が足ぶみして、遠い夜あけを待つあいだに、海からきりが流れてきました。きりは山はだをつたって峰をこえ、むこうの谷間に流れていって、すみずみまでたちこめました。スナフキンは、朝は早おきしようと、ねるときから心にきめていました。そうすれば、ほんのひとときでも、ひとりきりでのんびりできるからです。

　たき火は、もうとっくにきえていました。でも、スナフキンは、寒さなんて感じませんでした。ちょっとかわったことのできる方法を知っているからです。しごくかんたんなやりかたですが、自分の体温がひえないようにできるので

といいました。そして、ろうそくをけしました。

べやにねそべって、本を読んでいました。わきから、ろうそくが、小さな光の輪をなげかけていました。こんなにだだっぴろい、よそのうちにいても、ろうそくの光の下では、気持ちがしっとりおちつきました。

「前述のとおり。」

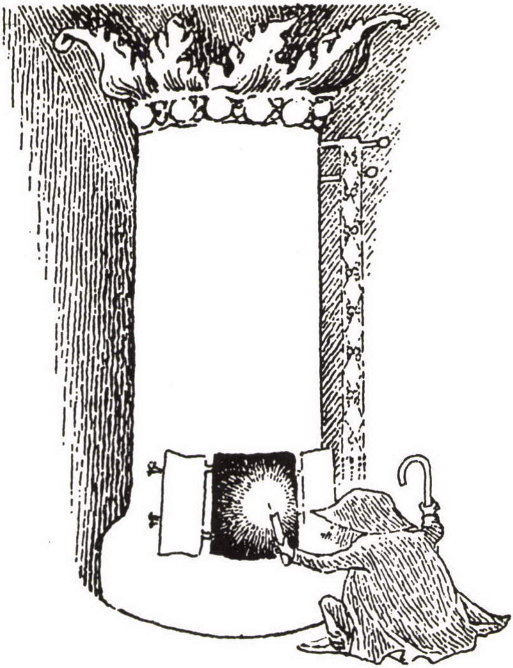
と、ホムサは、声を出して読みはじめました。

「この珍種は、定期的に谷間に生まれる放電を受けて、力をたくわえ、白とむらさき色の光をはなって、夜をあかるくてらしだした。最後に生きのこったちびちび虫が、しだいに海面に近づき、水たまりの底からわきだすあわに、いなずまの光がきらめくジャングルの中の、はてしない沼地をもとめてすすんでいき、ついに、本来の自分のすがたから、まるでちがったものにかわっていく過程を想像してもらいたい。」

その虫は、ひとりぼっちだったんだろうな、と、トフトは思いました。みんなと、顔もすがたも似ていなかったので、家族の人がかまってくれなかったんだ。だから、うちを出ていってしまったんだ。いま、いったいどこにいるのだろう。どこかで、その虫に会えるかな。ぼくが、その虫のことを、目に見えるように、はっきりとお話しすれば、すがたをあらわすかもしれないぞ。

ホムサ＝トフトは、そう思って、

「この章、おわり。」



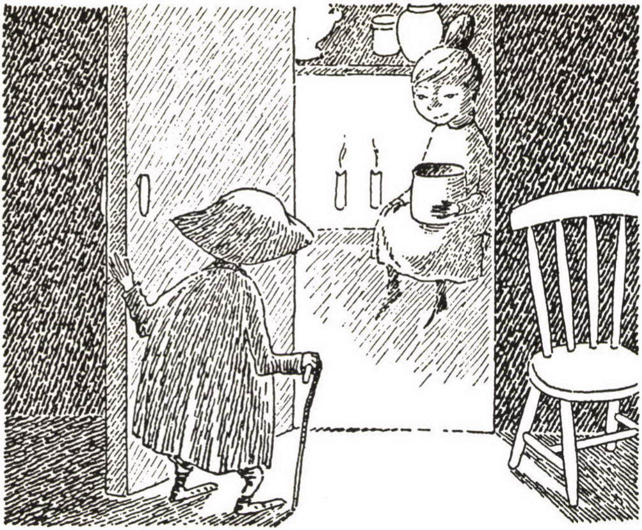
と、思い出そうとしてみました。思い出せません。で、おじさんは、手紙を安心できるところにかくして、ろうそくをふきけし、クッションの下に、ふたたびもぐりこみました。

　みんなでパーティーをしたら、ご先祖さまもきてくれるかしらん、と、おじさんは、思いつめたように考えこみました。まあ、それはそうと、きょうは、とてもたのしい一日だったわい。いかにも、わしの一日らしい一日じゃったわい。

　ホムサ＝トフトは、屋根うら

ミムラねえさんがいいました。
「ご先祖さまをおこそうとしても、むだだわよ。四月の一日にならなきゃ、目をさまさないもん。まあ、あなた、きゅうりのびんづめを、もう、半分もたいらげちゃったのね。」
　スクルッタおじさんは、ふくれっつらをして、まゆをしかめ、きゅうりと肉桂ビスケを、両方のポケットにつめこみました。それから、ろうそくを一本持って、パタパタ足音をたてながら、応接間へひきかえしました。ストーブの前のゆかにろうそくを立てて、ストーブの火口の戸を、両がわにひらきました。中は、ただまっ暗。スクルッタおじさんは、ろうそくを持ちあげて、中をてらしながら、もういちどのぞいてみました。紙の包みが一つ、それから、えんとつのすすがちょっぴりおちているだけでした。
「もしもし、いるんでしょう、中のおかた。」
と、おじさんはどなりました。
「おきてくださいよ。あなたのおすがたを見たいんでさあ。」
　でも、ご先祖さまは、へんじをしませんでした。もみの葉っぱをおなかにつめこんで、もう、冬眠していました。
　スクルッタおじさんは、ストーブの中から、紙包みをひろいだしてみました。それは、一通の手紙でした。おじさんは、どっかりゆかにこしをすえて、わしは、めがねをどこにおいたのかな

と、おじさんは、ゆかいそうにいいました。
「ふたつきのはちの中には、なにを入れてあるのかな。」
「もみの葉っぱだわ。」
と、ミムラねえさんは答えました。
「冬ごもりの前になると、ムーミンたちは、針葉樹の葉っぱをたらふく、おなかにつめこむのよ。」
ミムラねえさんは、ふたをあけながらいいました。
「いままでに、いちばんいっぱいつめこんだのは、ご先祖さまのようね。」
「どこのご先祖さまだい。」
と、スクルッタおじさんはききながら、こっそり、きゅうりのところにうつっていきました。
「ストーブの中にいる、ご先祖さまよ。」
と、ミムラねえさんは説明しました。
「年は三百歳よ。もう、冬ごもりして、ねむっているわ。」
スクルッタおじさんはだまっていました。——わしよりも、もっと年よりがいるなんて、うれしいことだろうか、はらのたつことだろうか——。おじさんは、その問題に、すごくきょうみがわきました。ひとつ、ご先祖さまをおこして、知りあいになってやれ、と決心しました。
「ねえ、あなた。」



「ほら、びんづめきゅうりはあそこにあるわよ。肉桂ビスケはあそこだわ。あのびんはピクルス。あれは食べちゃだめよ。からすぎて、おじさまには毒だわ。」

と、いきなり、おじさんはピクルスのびんをつかんで、むしゃむしゃ食べはじめました。こいつは、おいしくないや、と、おじさんは思いました。でも、おいしくてもまずくても、とにかくどんどん食べました。

ちょっと間があきましたけども、ミムラねえさんは、またいいました。

「あなたのおなかに、ピクルスはむりよ。おなかがはれつして、いっぺんに死んじまうわよ。」

「休暇中には、死なないことになっているのだ。」

か、やっぱり、うちの中には、人っこひとりいないような気がしていました。

スクルッタおじさんは、いちばん上等の、ビロードのクッションに鼻をうずめて、応接間でねていました。すると、だれかがこっそり、へやからぬけだして、台所へしのびこんでいく足音がきこえました。コップがカチャンといいました。ききとれないぐらい小さな音で。おじさんは、暗がりの中におきあがって、きき耳をたてました。やっちょるな、パーティーを、と、おじさんは思いました。

また、もとどおり、しいんとなりました。スクルッタおじさんは、つめたい廊下に出ていって、こっそり、台所のドアに近づきました。台所の中もまっ暗でした。でも、食べものおき場のドアの下から、ほそい光がもれていました。

なるほど、と、スクルッタおじさんは思いました。やつらめ、食べものおき場にかくれよったな。おじさんは、ぐいとドアをひっぱってあけてみました。と、中で、ミムラねえさんが、たなの上にこしをかけて、びんづめきゅうりを食べていました。横には、ろうそくを二本ともして、おいてありました。

「おやおや、あなたも、わたしとおんなじことを思いついたのね。」

と、ミムラねえさんはいいました。

ベランダには、ムーミンのうちの、大きなどらがつるしてありました。フィリフヨンカは、あのしんちゅうの鳴りもので、食事時を知らせるようになれたらいいなあと、いつも思っていました。ジャラン、ジャラン、ジャラン、というどらの音が、谷間いっぱいにひびきわたると、みんなが口々に、

「食事だ！　食事だ！　きょうのおかずはなんだろう。ああ、おなかがぺこぺこだ！」

なんてさけびながら、かけだしてくるのです。

フィリフヨンカの目に、なみだがうかびました。そんなたのしみを、ヘムレンさんがうばってしまったのです。あとかたづけだって、わたしがするわよ。よろこんで。ただ、人からいわれてするのでさえなければね。女ですもの、うちの中のことは、フィリフヨンカがするのよ。それに、ミムラねえさんだって、てつだってくれるはずだし。

あかりをむだづかいしないように、フィリフヨンカはろうそくをけしました。そして、頭まですっぽり、毛布をかぶりました。屋根うらへいく階段で、トントントンと音がしました。下の応接間から、かすかに、ほんのかすかに、カタカタ音がしてきました。人っこひとりいない家のはずなのに、どこかで、パタンとドアがしまりました。へんだわ。こんなにたくさん音がきこえるなんて、だれもいないはずなのに、と、フィリフヨンカは首をひねりました。すると、いや、ちがう、うちの中には、人がいっぱいいるんだったと気がつきました。それでも、どういうわけだ

スナフキンは、火にかけていたフライパンをおろしました。さかなはまっ黒こげでした。パイプにたばこをつめて、ちょっと間をおいてから、おそるおそるきいてみました。

「きみ、きみは、テントでねるのになれているのかい。」

ヘムレンさんは、元気のない声で答えました。

「いや、野宿のようにすてきなものを、ぼくは、ほかに知らないね。」

もう、あたりはまっ暗でした。でも、ムーミンの家には、まどあかりが二つ見えました。夜がくるたびに見えていた、あのあかりのように、やさしい、たのもしい光でした。

北の客間では、フィリフヨンカが、鼻先まで毛布をかぶってねていました。頭には、首すじがいたくなるほど、いっぱい、毛巻き紙がくっついていました。フィリフヨンカは、天じょうのふしあなをかぞえていました。おなかは、グーグー鳴っていました。

はじめっからずっと、フィリフヨンカは、食事のしたくをするのは、わたしだと思っていました。戸だなの中をかたづけて、小さなびんやふくろを、きれいにならべるのもすきでしたし、新しいくふうをして、古いのこりものを、だれも気がつかないように、プディングやコロッケの中に入れてしまうのもたのしみでした。なるべくけちけちして、お料理するのが大すきでした。小麦粉のふるいかすを、ぴんのきりまで、むだにしないですむことも知っていました。

るっとまわして、手をあらって、手をふいた青い葉っぱを一まい、ぽいとすてればいいんだ。なんでもないことだ。いったい、このふたりは、なんの話をしているんだい。）
「ねえ、ヘムレンさんたら、いつだって命令しようとするでしょう。」
と、フィリフヨンカがたずねました。
「それが重大なところなのよ。」
　スナフキンは立ちあがりました。すこし、ふたりがこわくなりました。なにかいわなきゃ、と思いました。なんていったらいいのだろう。でも、頭の中がぼうっとかすんでいて、いったらいいと思うことばがうかんできません。
　とつぜん、ヘムレンさんがどなりだしました。
「ぼくは、命令なんかしないぞ。ぼくは、これからテントでくらすぞ。うるさいのは、もうごめんだ。」
　ヘムレンさんは、テントの入り口のきれをひきちぎって、中にもぐりこみました。大きなからだがテントにはいると、テントの中はもう、すきまもありませんでした。
「ほらね。ごらんのとおりよ。」
と、フィリフヨンカが、小さな声でいいました。そして、ちょっとようすを見ていて、それからいってしまいました。

「晩ごはんを食べることができないんだよ。」
と、ヘムレンさんがへんじをしました。
「ごはんのあとで、あとかたづけをする人がきまらないものでね。」
「ホムサにさせるのよ。」
と、フィリフヨンカがいいました。
「だめだ、ホムサはだめだぞ。」
と、ヘムレンさん。
「ホムサは、もう、庭仕事を、ひとしきりてつだったんだ。うちの中のことは女の役目だ。フィリフヨンカと、ミムラねえさんの役目だ。そうだろう。ぼくのいっていることは正しいよね。ぼくはコーヒーをわかしたり、みんなが気持ちよくなるようにするんだ。それから、スクルッタおじさんは、すごく年よりだから、すきにさせてやるんだ。」
「また、命令ね。ヘムレンさんたら、命令ばかりしようとするのよ。」
と、フィリフヨンカはさけびました。
　ふたりとも、スナフキンはどう思うかと、心配そうに、じっと、その顔を見つめました。
（あとかたづけのことか。）と、スナフキンは思いました。（このふたりときたら、なんにも知っちゃいないんだな。あとかたづけなんて、わけないじゃないか。小川の中で、おさらをくるく

第10章

ご先祖さまは冬眠中



暗いテントの中です。スナフキンは、ねぶくろからはいだしました。例の五つの音色は、まだ近づいていませんでした。歌のしらべらしいものは、かげも形も見えません。テントの外は、ひっそりとしずかです。雨はやんでいました。スナフキンは、さかなを焼くことにして、まきをとりに、まき小屋へいきました。

まきに火がついて、ぼうっともえあがったときに、ヘムレンさんとフィリフヨンカが、またテントにやってきました。だまって、火のそばに立ったまま、さかなを焼くのを見ています。

「もう、晩ごはんはすんだのかい。」

と、スナフキンはきいてみました。

した。ほかのことは、みんな関係のない、よその世界のことでした。ミムラねえさんは、ゆめなんて見ません。ねむたくなればねむり、おきたほうがいいときにはおきる、それがミムラねえさんなのです。



した。いま、そのふとんは、南の客間で、レースでふちどりしたカバーをかぶって、だいじにつかってくれる人を待っています。ミムラねえさんは、足の先にあんかを入れることにきめました。あんかをしまってあるところはわかっていました。ミムラねえさんは、五日めごとに、雨水で髪あらいをすることにしていました。それから日がくれてくると、ひとねいりすることにもしていました。夜になれば、食事のしたくで、台所があたたまっているにちがいありません。

橋の上にねそべって、流れていく水をながめるのもいいものだわ。思いっきり走ってみるのも、赤い長ぐつをはいて、ジャブジャブ沼をわたるのも気持ちがいいわ。からだをまるめて、屋根の上の雨の音に、じっと耳をすますのもいいものよ。たのしくすごすって、ほんとにわけのないことよ。

きょうも、また、十一月の一日がしずかにくれていきました。ミムラねえさんは、羽ぶとんの中にもぐりこみました。足をのばすと、こつんとつま先がぶつかったので、つま先をまげて、あんかをはさみました。

おもては雨でした。一、二時間たてば、ちょうどいいかげんにおなかがすいて、フィリフヨンカのお料理が、おいしく食べられるでしょう。おしゃべりしたい気も出てくるでしょう。いまは、ぬくぬくと、なにもかもわすれて、あったかにしていればいいんです。ミムラねえさんには、いま、すっぽりとからだをくるんでいる、大きなやわらかいふとんだけが、この世の中のすべてで

スナフキンが、テントの中へもぐりこむのが見えました。
「よくきたね。とてもうれしいよ。」
と、ヘムレンさんはくりかえしました。
しばらく、ふたりは、そのまま雨の中に立って、ようすを見ていました。
「ねむっちまったよ。」
と、ヘムレンさんが、小さい声でいいました。
「あいつ、つかれているんだな。」
ヘムレンさんとフィリフヨンカが、うちのほうへもどってくるすがたが目にとまると、ミムラねえさんは、まどをしめました。ていねいに、髪を、きちんと、かわいらしい、みごとなまげにゆいあげました。

なにがすてきだといったって、たのしくすごすことぐらいすてきなことは、ほかにないし、また、わけないこともないんです。ミムラねえさんは、だれかと出会って、すぐあとで、その人のことをわすれたからといって、ちっとも気にしませんでした。その人たちといっしょになって、なにかをしようともしませんでした。みんなのことも、みんなのいざこざも、人ごとと思って、ただ、びっくりして見ているだけでした。

羽ぶとんの色は青色でした。ムーミンママは、羽ぶとんに入れる羽を、六年がかりであつめま

した。最後まで、さびしそうにちりのこっていた木の葉が、しがみついていた木の枝からはなれて、ベランダの中にしずんでいきました。雨は、だんだん大ぶりになってきました。

「よう!」

と、スナフキンがよびかけました。みんなは、スナフキンのほうをむいて、目でうなずきあいました。

「雨がふりだしたみたい。」

と、フィリフヨンカは、そわそわした声でいいました。

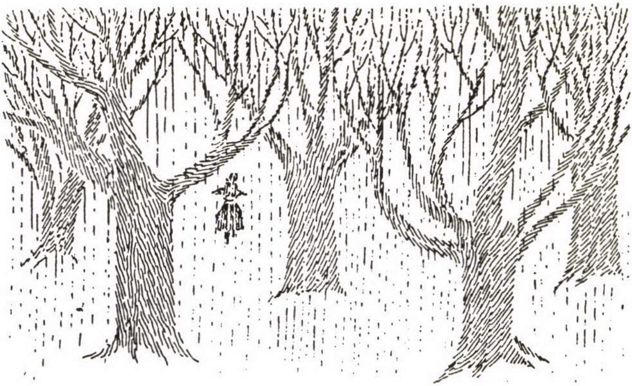
「うちには、だれもいないのよ。」

ヘムレンさんは、すかさずいいました。

「よくきたね。とてもうれしいよ。」

スナフキンは、もそもそ、にえきらない身ぶりをして、ぼうしのかげに顔をふせ、くるっと背中をむけると、川のほうへあともどりしていきました。ヘムレンさんも、フィリフヨンカも、そのあとについていきました。ふたりは、すこしはなれたところに立って、スナフキンが、テントを橋のわきにはりおわるまで待っていました。





のです。と、スナフキンが橋をわたってくるのが見えました。そうです、スナフキンです。あんな、こいみどり色の服を着た人なんて、ほかにいませんもの。

　スナフキンは、ライラックのしげみのわきで立ちどまって、しばらくながめていました。それから、こちらへ近づいてきました。こんどは、いままでの歩きかたとちがって、とてもゆっくりやってきます。

　ミムラねえさんは、まどをあけました。ヘムレンさんが、くまでをほうりだしました。

「命令は男がするんだ。男だ、男だ。」

と、ヘムレンさんはいいました。すると、フィリフヨンカは、つんと上をむいていいかえしました。

「ムーミンママのいるころは、ちがっていましたようだ。」

　ホムサは、じっと下をむいたまま、フィリフヨンカの長ぐつを見ていました。くつがほそすぎて、足がきゅうくつそうでした。雨あしは、もう、ここまでのびてきま

ねえさんの古いくしが、洗面台の、ワッフル形のテーブルかけの下に、きっとおいてあるはずです。ミムラねえさんは、テーブルかけをめくってみました。くしはおいたまんまでした。ミムラねえさんは、まどぎわにこしをかけ、髪をほどいて、くしでとかしはじめました。長い、美しい髪です。まどの下では、朝っぱらから、まだ、口げんかがつづいています。まどがしまっているので、まどガラスごしに、いいあっているのが見えるだけで、音はきこえませんけどね。

　ミムラねえさんは、くしで、なんどもなんどもとかしました。髪の毛から、パチパチ電気の火花がちりました。とかせばとかすほど、髪は、つやつや光ってきます。秋がきて、見ちがえるようにさびしくなってしまった、だだっぴろい庭を、ミムラねえさんは、ものめずらしそうな目でながめました。立ち木は、まるで、灰色のつばさがひろがっているよう。一つ、また一つと、きりさめにけむって、そびえているこずえは、どれもこれもまるはだか。

　ベランダの前では、あきもせずに、音なしのいいあいっこが、まだつづいています。手をふってみたり、あっちへちょこちょこ、こっちへちょこちょこ走ってみたり。それを見ていると、立ち木も、そのすがたも、なんだか、ほんとうのものではないような気がします。ほんとうのものらしいのはホムサだけ。ホムサは、地面を見つめながら、じっと立っています。

　大きなかげが、山はだをつたって、谷間の上にひろがってきました。また、雨雲がやってきた

よ！」
ヘムレンさんは、あいかわらず、おち葉かきをつづけました。がんこで、お人よしのヘムレンさんは、顔にしわをよせていました。
「気持ちよくしてやっているんだ。ムーミンパパのためにな。」
ヘムレンさんは、むっつりした声でくりかえしました。
「わたしのいうこと、でたらめじゃないんだから。」
と、フィリフヨンカは、おどかすような声を出しながら、ヘムレンさんに近づいていきました。
ミムラねえさんは、だまって見ていました。古い葉っぱですって——と、ミムラねえさんは思いました。まあ、おかしな人たちばかりだこと……。
ミムラねえさんは、うちの中へはいっていって、屋根うらへあがりました。とてもひえこみました。南の客間は、前どおりでした。白い洗面台、色のさめた、大むかしのあらしの絵、青色の羽ぶとん。水さしはからっぽで、底に、死んだくもが一ぴきおちていました。ゆかのまん中には、フィリフヨンカのスーツケースがおいてあり、ベッドの上には、ピンクのネグリジェがのっていました。
ミムラねえさんは、スーツケースとネグリジェを北の客間へはこんでいき、ドアをしめて出てきました。南の客間は、ミムラねえさんがつかうことにきまっているのです。その証拠に、ミムラ

「ホムサさ。」
ヘムレンさんは、ミムラねえさんに教えました。
「ちょっくら、ぼくの庭仕事をてつだっているんだ。」
「ムーミンママに、とてもきれいな、せとものの花びんを持ってきたんだから。」
と、フィリフヨンカは、とんがり声になりました。
「あっ、そう。」
と、ミムラねえさん。
「あなた、おち葉かきをしているのね。」
「そうさ、気持ちよくしてやっているのさ。」
と、ヘムレンさんは、あいづちをうちました。
ふいに、フィリフヨンカが、大声でどなりました。
「古い葉っぱにさわっちゃ、だめよ。くわばら、くわばら。手がくさっちまうんだから。」
フィリフヨンカは、毛布をひきずりながら、ベランダの手すりのほうにかけだしました。
「古い葉っぱには、ばいきんが、いっぱいついているのよ。」
と、もう、かなきり声をはりあげました。
「虫もついているのよ。毛虫もついているのよ。げじげじもついているのよ。さわっちゃ、だめ

いるわ。もちろん、あそこには、なくなるとたいへんな、たいせつなものばかりしまってあるんだわ。」

　ミムラねえさんは、つくづくと、フィリフヨンカをながめてみました。心配そうな目つきをしています。髪の毛はカールして、ひとつひとつ、ヘアピンでしっかりかためています。首にまいているのは、自分のしっぽにかみついている、きつねのえりまきです。フィリフヨンカは、前とちっともかわっていませんでした。

　さて、こんどは、庭の道を、ヘムレンさんが、こちらにむかってやってきました。おち葉をかきかき、近づいてきます。そのうしろからは、かいたおち葉をかごにつめながら、ちびっこホムサが走ってきます。

「よう。」

と、ヘムレンさんが声をかけました。

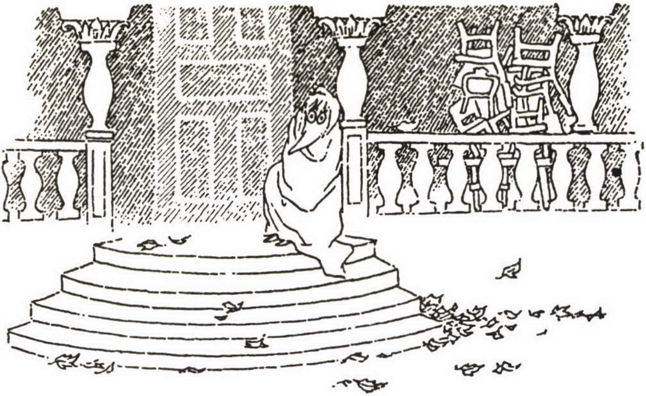
「なるほど、きみたちもきていたのかい。」

「あの人、だれよ。」

と、ミムラねえさんが、ヘムレンさんにききました。

「わたし、おみやげを持ってきたのよ。」

ミムラねえさんのうしろから、フィリフヨンカが口をはさみました。



と、ミムラねえさんは声をかけました。ミムラねえさんには、ひと目見てすぐに、うちの中がるすだとわかりました。
「こんにちは。」
と、フィリフヨンカも、あいそうよく、でも、なんとなくよそよそしいようすで答えました。ミムラの仲間にむかうときには、フィリフヨンカは、いつもこうなのです。
「みんな、おるすよ。ひとことも、人にことわりなしに、るすにしているのよ。でも、玄関にかぎがかかっていなかったのだけは、まあ、よろこばなくちゃ。」
「あの人たち、かぎなんて、かけたことはないわよ。」
と、ミムラねえさんはいいました。
「それがね、じつは、かけたのよ。」
と、フィリフヨンカは、声をひそめて、ミムラねえさんのすぐそばまで、からだをのりだしました。
「かけたのよ。二階の洋服だんすには、かぎがかかって

らあとから、水にういたり、半分しずんだりしながら、いろんなものが流れてきます。流れてきてはきえていきます。あとからあとから、流れてきてはきえていきます……。スクルッタおじさんは、見ているうちに、目がいたくなってきました。目をつぶりました。すると、おじさんの思っていた小川が、目の底にうかんできました。水がきれいにすんでいて、川底の砂が見えます。きらきら光りながら、さかなが、すいすいとおよぎまわっています……。

（どうも、ここには、なにかわしの考えていたことと、くいちがっているものがあるぞ。）

と、おじさんは、心配になってきました。

（橋は、わしの思いどおりの橋なのだ。この橋でいいのだ。だが、このわしときたら、いままでと、どこかがちがっちまってて……。）

おじさんは、そんなことを考えているうちに、頭がだんだんぼうっとしてきました。そして、ねむってしまいました。

ベランダには、フィリフヨンカが、足を毛布にくるんで、こしかけていました。まるで、この谷が、そっくり自分のものみたいな、それだって、べつにうれしくないみたいな顔をしていました。

「こんにちは。」

「そう思うのなら、思ってもいいわよ。なんとでも、かってに思いなさいよ。」
ミムラねえさんは、ちっとも気にとめないで、そう答えました。それから、
「あなた、ミイちゃんを見なかった？」
ときいてみました。
　スクルッタおじさんは、あみを、よいしょとたぐりあげました。あみの中はからっぽでした。
「ミイちゃんは、どこにいるの。」
と、ミムラねえさんはききました。
「大きな声を出さないでおくれ。」
と、おじさんはどなりました。
「わしの耳は、よくきこえるのだ。そんな大きな声を出すと、さかなたちがこわがって、にげちまうじゃないか。」
「もう、とっくににげているわよ。」
と、ミムラねえさんはそういいながら、またかけだしました。スクルッタおじさんは、鼻をすすって、こうもりがさのおくのほうにもぐりこみました。おじさんの小川には、いままで、いつも、いっぱいさかながいたものでした。おじさんは、川をのぞきこんでみました。
　橋の下には、茶色くにごった水が、波がしらを光らせて、うねりながら流れています。あとか

通ってすすんでいきます。くぼ地は、雨水がたまって、水の中のけしきのようでした。

早足で歩いていきました。かけだすときもありました。自分が、かるがると、スマートに走れるのがわかって、うれしくなるからでした。

ミムラねえさんは、ずっと前、ムーミンの家に養女にいった、妹のミイに会ってみたくなっていました。ミイは、いまでも、やっぱり、むっつりしていて、おこりんぼうかしら。いまでもまだ、おさいほう道具を入れるかごを、自分のへやにしているかしら。

ミムラねえさんがムーミン谷にきてみると、スクルッタおじさんが橋の上にすわりこんで、手製のあみでさかなをとろうとしていました。おじさんは、ナイトガウンを着て、足にゲートルをまき、ぼうしをかぶっていました。おまけに、頭の上に、こうもりがさをさしていました。ミムラねえさんは、近くでおじさんを見るのははじめてでした。ちょっぴり興味を感じて、ていねいによくながめてみました。おじさんは、びっくりするくらい、ちびでした。

「おまえさんがだれだか、ちゃんとわかっているのだ。」

と、おじさんはいいました。

「わしは、スクルッタおじさんなのだ。人ちがいをしちゃいけないぞ。おまえさんは、こっそりパーティーをひらいているな。わしは、ちゃんと知っているぞ。おまえさんのうちのまどには、夜どおし、あかりがともっているものな。」

第9章

たまねぎまげのミムラねえさん



　ミムラねえさんが、森の中から、ひょっこりあらわれました。森をまっしぐらに、つきぬけてきたのです。とてもじょうきげんです。
（わたし、ミムラに生まれて、ほんとうによかったわ。頭のてっぺんから足のつま先まで、とてもいい気持ちだもの。）
　すらっとした、長い自分の足も気にいっていました。足にはいた、まっかな長ぐつもすきでした。頭の髪の形は、ごじまんのミムラ形。小つぶのたまねぎみたいに、きちっとしまったうすオレンジ色に光るまげが、ちょこんと、頭の上にのっかっています。ミムラねえさんは、池をわたって、山をこえ、低いくぼ地をいくつも

レンさんを見つけたのです。
　ホムサ＝トフトは、だんだん、まぶたが重くなってきました。あの、しあわせなムーミン一家の話を、自分にしてきかせようとしました。が、だめでした。で、そのかわりに、あの夜光虫のすがたをしていた、電気のすきな、ひとりぼっちのちびちび虫の話をしました。



「この原生動物類の、めずらしいかわり種のことは。」
と、トフトは、声を出して読んでみました。
「いくら考えても、かんぜんに知りつくすことはできない。この虫が、ほかに例を見ない進化のしかたをした理由についても、もちろん、事実にもとづいての判断はできないものの、からだに電気をおびていたことが、このように、最後まで生きのこる条件となったのであろう、と推定することはできる。
　この当時には、あきらかに、電気をおびたあらし、つまり雷雨が、きわめてしばしばおきた。しかも、先に述べた氷河時代以後の山脈は、この、はげしい電気をおびたあらしの暴力に、たえまなくさらされていた。そして、これらの山脈に隣接していた海が、強い電気をおびていくことになったのだ。」
　ホムサ＝トフトは、本を持つ手を下にさげました。なにをいっているのか、よくわかりませんでした。長たらしくて、意味がつかめません。でも、そのふしぎなことばは、美しい気がしました。それに、自分の本なんて持ったのは、これがはじめてです。ホムサは、うぐいあみの下に本をかくしました。そして、じっと横になったまま、考えました。ぼろぼろになった天まどの下には、小さなこうもりが一ぴき、さかさまにぶらさがってねむっていました。
　フィリフヨンカのかなきり声が、また、おもての庭できこえました。フィリフヨンカは、ヘム

ホムサ＝トフトは、ゆかにまるめておいてある、うぐいあみのところへはってもどりました。もういちど、あみの中に、いごこちのいいくぼみを作って、そこへはいって、本のつづきを読みはじめました。とてもあつい、大きな本です。はじめのページもおしまいのページもちぎれています。どのページも、黄色く色がかわって、はしっこを、ねずみにかじられています。

ホムサは、本を読むのはふなれでした。一字一字たどりながら、一行読むのに、とても時間がかかりました。ホムサは、その本を読んでいけば、ムーミン一家の人たちが、なぜいってしまったのか、いま、どこにいるのか、わかるような気がしていたのです。でも、本に書いてあるのは、まるっきりべつの話でした。ふしぎな動物やら、暗いけしきのことが書いてあって、ホムサの知っている名まえは、ひとつも出てきませんでした。

本に書いてあるのは、海のずっと底のほうの、深いところでくらしている、電波虫だの、生きのこりの、ちびちび虫のことです。こんな虫のことは、ホムサは、いままでまるっきり知りませんでした。

ちびちび虫のなかには、仲間の虫に似ていない、とてもかわった種類の虫がいました。その虫は、はじめは夜光虫みたいなすがたをしていましたが、そのうちに、だんだん、どんな虫にも似ていない虫になっていきました。とても小さな虫だったことにはまちがいなくて、おびえると、ますます小さくなるのです。

中には、ちびっこホムサがすわっていました。目をまるくして、フィリフヨンカのほうを、じっと見つめています。胸には、大きな本をだいています。おびえているようすです。

「みんな、どこにいるのよ。どこにいるのよ。」

と、フィリフヨンカはどなりました。

ホムサは本をほうりだして、はいながら、うしろのかべのほうへ、あとずさりしました。いや、まったく、むりもありません。見も知らない人が、いきなりとりみだしたようすであらわれたのですからね。でも、においをかいでみると、おっかない人ではないことがわかりました。においからすると、おびえている人の感じです。

「ぼく知らないよ。」

と、ホムサは答えました。

「だって、わたし、あの人たちに会いにきたのよ。」

と、フィリフヨンカは、たまらなくなってさけびました。

「おみやげまで持ってきたのよ。とってもすてきな花びんなの。わたしにだまって、ぷいとどっかへいってしまうなんて、ひどすぎるわよ。」

ちびっこホムサは、だまって首を横にふりながら、フィリフヨンカをじっと見つめていました。

フィリフヨンカは、ドアをしめていってしまいました。



もっと、ひえびえとしていました。冬は戸じまりして、人がすまない、夏の家の中みたいに、つめたい空気がこもっていて、からだの心までひえてきます。フィリフヨンカは、つぎつぎと、かたっぱしからドアをあけていきました。どのへやの中もがらんとしていて、うす暗く、カーテンがおりていました。だんだん、不安な気持ちになってきて、衣装戸だなの戸まであけてみはじめました。洋服だんすの戸もひらこうとしました。でも、そこはかぎがかかっていました。フィリフヨンカは、もう、くるったようになって、両手で、ドンドン、たんすの戸をたたきました。それから、屋根うらの小べやまでとんでいき、へやのドアを思いっきりひっぱりました。

をぬいで、ストーブのへりを、そっと指でなでてみました。灰色につもったほこりの表面に、白いすじがつきました。

「こんなことって、ありっこないわ。」

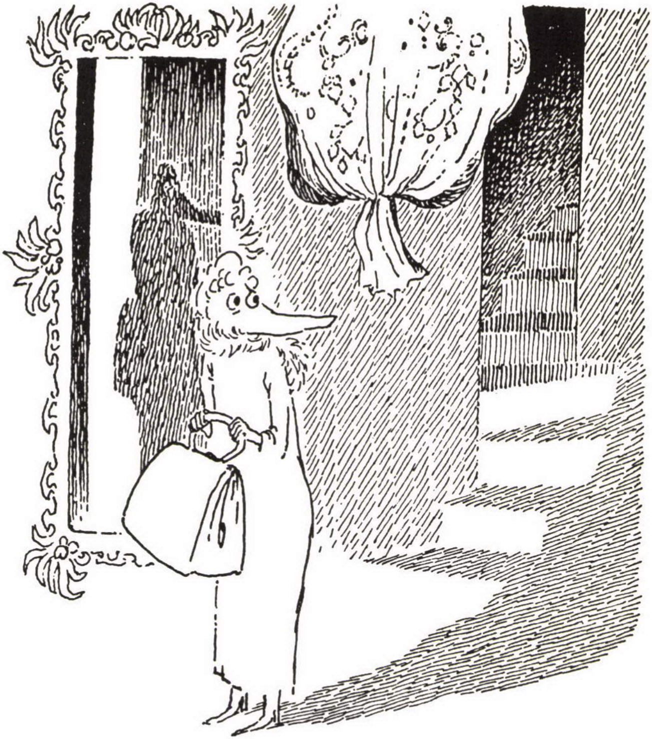
と、思わず、フィリフヨンカは、小さな声をもらしました。身ぶるいがするほど、からだじゅうが、頭の先から足のつま先まで、かっかとしてきました。

「おそうじするのをよしちゃったってことよね。自分かってに……。」

フィリフヨンカは、スーツケースを下において、まどのところへいってみました。そこも、やっぱりよごれていました。雨がふきつけてできた、うらぶれた、長いしまのもようが、まどガラスにこびりついていました。

気がついてみると、どのカーテンも、みんなおりています。そこではじめて、うちの人がみんなるすだということがわかりました。見ると、クリスタルのシャンデリアは、うすいベールでつつんでありました。がらんとひろいうちのすみずみから、ひんやりした空気がしのびよってきて、たまらなく、やるせない気持ちです。フィリフヨンカはスーツケースをあけて、ムーミンママのおみやげに持ってきた、せとものの花びんをとりだしました。テーブルの上におきました。花びんは、むっつりしていて、ふへいそうです。おそろしいほど、あたりはしいんとしています。

ふいに、フィリフヨンカは、すごいいきおいで、二階へとんでいきました。二階は、下よりも、



足をしめつけていました。

　フィリフヨンカは、まっしぐらにベランダにあがっていって、玄関のドアをノックしました。それから、ちょっと中の答えを待ってみて、かまわず、どんどん応接間にはいっていきました。

　ちらっと、へやの中をひと目見ただけで、フィリフヨンカには、ずいぶん長いあいだ、へやをそうじしていないことがわかりました。フィリフヨンカはもめんの手ぶくろ

れでは、おそうじなどできません。とてもだめです。まどふきをしそこなって、あんなめにあったりしたあとでは、まったくだめでした。

でも、こんなことではいけないんだわ。と、あわれなフィリフヨンカは思いました。わたしの持ちものが、みんな虫に食べられてしまうものね。

ムーミン谷にいったら、むこうに、どのくらいのあいだいることになるものやら、さっぱりけんとうがつきません。いってみて、おもしろくなかったら、二、三日で、もう、用なしだわ。でも、おもしろそうだったら、一月いたってわるくないものね。で、もし、一月むこうにいるようになったら、そのるすの間に、わたしの服に、虫がうじゃうじゃついてしまうのよ。虫が、服や敷きものを、がぶりとかみ切るようすを目にうかべると、ぞっとするわ——そして、虫のやつときたら、きつねのえりまきを見つけたときには、きっとうちょうてんになって、うれしがるわね。おお、いやだ、いやだ。

とうとう、フィリフヨンカは、いくら考えても、虫ぼしのことがきまらないので、つかれてしまって、やけみたいになりました。そして、なにがなんだかわからないまま、スーツケースをつかんで、きつねのえりまきを首にまきつけ、戸じまりをして家を出ました。

フィリフヨンカの家からムーミン谷までは、そんなに遠くありませんでした。でも、谷についたときには、スーツケースは岩みたいに重くなり、きっちり足にあった長ぐつが、きゅうきゅう

第 8 章
電気を食べる，ちびちび虫



　虫ぼしをしてからいこうか、それとも、しないでいこうかとまよっているうちに、フィリフヨンカは、ムーミン谷へいくのが、だんだんのびてしまいました。なにしろ、虫ぼしは大仕事です。風にあてたり、ブラシをかけたり、なにやかやと、いろいろたいへんなのです。まして、衣装戸だなの手入れまでするとなると、それこそ、大そうどう。ソーダとせっけんで、きれいに中をあらわなくてはなりません。

　ところがフィリフヨンカときたら、手がブラシやぞうきんにさわっただけでも、もうめまいがします。おなかの底から、おそろしさがこみあげてきて、目の前がまっ暗になるのです。こ

「さあ、わしは、気のむくところへいってしまうからな。いま、わしは、しごくじょうきげんなのだ。

おまえさんたちの話したことは、この百年間、ひとつのこらず、ちゃんときこえていたよ。わしには耳があるんじゃからな。

おまけに、おまえさんたちが、年がら年じゅう、わしにこっそり、パーティーをひらいていたことも、ちゃんとわかっていたのだから。」（署名なし）

書きおえると、おじさんは、ナイトガウンを着て、ゲートルを足にまいたのです。それから、いりようなものを入れた、あのかごを手に持って、玄関のドアをひらきました。

ドアから出て、またドアをしめるあいだに、おじさんは、百歳という自分の年だけ、ドアの中にとじこめてしまいました。

胸がわくわくしてきました。力がもりもりわいてきました。新しい名まえのついたおじさんは、あの、しあわせな谷をめざして、北にむかって、わき目もふらずに歩きだしました。

おじさんの旅に出かけるすがたを見かけた人は、入り江の中にはひとりもいませんでした。赤い木の葉や、黄色い木の葉が、おじさんの頭の上でひらひらまいました。

遠くの山あいから、またまた、秋のあらしが、おじさんの頭からわすれたいものを、みんなあらい流してしまおうとするように、おそってきました。

おじさんは、旅に出かけるときまると、もう、こんなものはいらないや、すてちまおうという気になりました。

ほうきをつかむと、すさまじいいきおいで、へやの中をはきはじめました。

ざぶとんだろうが、なくなったと思っていたスリッパだろうが、ごみのかたまりだろうがかまいません。ころがりおちて、どこかにいってしまっていた薬のつぶだろうが、おきわすれていた手帳だろうが、さじも、フォークも、ボタンも、封を切らずにほうっておいた手紙も、手あたりしだいに、なにもかも、はきよせて山にしてしまいました。

その山の中から、めがねが八つ見つかったので、おじさんはひろいだして、かごの中にしまいました。さて、そうして思いました。

「さあ、これから、この目で見るものは、いままでとはまるっきりちがった、新しいものばかりなんだ。」

旅をすすめていくうちに、いよいよムーミン谷が、すぐそばに近づきました。もう、そこのかどをまがりさえすれば、谷のところです。と、おじさんは、まだ日曜日になっていない気がしました。

おじさんがうちを出かけたのは、金曜日だか土曜日でした。むろんのこと、おじさんは、みんなにお別れの手紙を書いて、おいてこないではいられませんでした。こう書いたのです。

おじさんは、ベッドの下で、かごを一つ見つけました。おじさんはその中に、おじさんの持っている薬をみんなつめこんで、それから、おなかによくきくブランデーの小びんも入れました。バターをぬって、サンドイッチを六きれ作り、それから、こうもりがさをさがしだしました。さあ、旅のしたくが、もうすっかりできあがりました。おじさんは、さっそくうちをあとにして、旅に出ていきました。

長い年月のあいだに、おじさんのうちのゆかには、なんだかんだと、たくさんのものがたまっていました。その中には、ひろう気さえおきないものもずいぶんあります。

ひろう気にならなくたって、ひろわなくてもいい、いいわけなんて、いくらでもこじつけられますからね。

見うしなったり、いらなくなったりした、そういうものは、ほうりだされたまま、ゆかのあちこちに、海にうかんだたくさんの島のように、ちらばっていました。

おじさんは、長いあいだに、そういうものは、またいだり、よけたりして通る習慣がついていました。そうして歩くと、運動がてら、へやの中を日課みたいに歩きまわるのが、なんとなくおもしろくなってきます。

でも、同時に、なんだ、毎日おなじことをくりかえしているじゃないか、という気にもなりますけどね。

から、したくてたまらないことは、すこしあいだをおいて、先へのばしたほうがいいこと、また、自信のない旅には、じっくり考えて、したくをしなくてはいけないことがわかっていたからです。

いく日もいく日も、おじさんは、ほそ長い、暗い入り江のまわりの山の中を、あてもなく歩きまわりました。日がたつにつれて、ますます、いままでのことはみんなわすれていき、あの谷が、だんだん近づいてくる気がしました。

最後までちりのこっていた。赤や黄色の木の葉がちり、歩いていくおじさんの足のまわりで、ぴょんぴょんはずみます。（スクルッタおじさんは、足はいまでもたっしゃでした。）

ときどき、おじさんは、足をとめて、つえの先でおち葉をつついてひろいあげ、ひとりごとをつぶやきました。

「こいつはもみじだな。こいつの名まえは、けっしてわすれないぞ。」

スクルッタおじさんは、自分がわすれたくないものがなんだか、ちゃんとよく知っていました。

そうこうしているうちに、まるでうそみたいな話ですが、おじさんは、まるっきりといってもいいくらい、ほとんどのことをわすれてしまいました。

朝、目がさめるとすぐに、谷間が近づいてくるように、心待ちに待ちながら、さっそくものわすれにとりかかります。それをじゃまするものは、なにもありません。おじさんにむかって、あなたは、じつは、だれだれさんなんですよなんて、おせっかいなことをいう人はいないのです。

ただけの谷かもしれない。そんなことは、どっちでもいいんだ。
わしにいちばんだいじなのは、あの谷間を流れている小川なんだ。いや、ひょっとすると、あれは小川でなくて、川だったかな。でも、河じゃなかったよな。大きな川じゃないことは、まちがいないんだ。

おじさんは、小川にきめてしまいました。おじさんは、大きな川よりも、小さな川のほうが、ずっとすきなのです。

きれいにすんだ水が、サラサラ音をたてて流れている小川。そうです。いつか、おじさんは、その小川の橋のふちにこしかけて、足をぶらんぶらんさせながら、いったりきたりおよいでいる小さなさかなを、じっとながめていたのです。

だれも、おじさんに、もうねる時間じゃないですか、なんて、うるさくいいません。

お元気ですかとかなんとかいっておいて、さあ、わしは元気なのかな、と考えているひまもないうちに、もうかってに、ちがった話を、ぺちゃくちゃしゃべりだす人もいません。

あそこでは、夜どおし、みんなでうたったり、さわいだりして、あそびあかすのです。

そして、あけがたになるまで、いちばんおそくまでのこっていて、いちばん最後にうちへ帰っていくのが、スクルッタおじさんなのです。

でも、おじさんは、思いたっても、すぐには谷へ出かけていきませんでした。いままでの経験

そのみんなというのは、この人の子どもとか、孫とかいう人たちのことです。
「よし、わしは、スクルッタおじさんなのだ。」
と、この人は、ゆかいそうに、小さな声で自分にささやきました。
「さあ、おきるとしよう。そして、この世の中の身内のことなんて、すっかりわすれてしまうのだ。」
ほとんど夜どおし、スクルッタおじさんは、まどのしきいにこしをかけ、なにかいいことがありそうな気がして、暗やみをじっとながめていました。
だれだかひとり、うちの前を通って、森の中にとびこんでいきました。入り江のむこうがわの水ぎわには、まどあかりが一つ、うつっていました。きっと、また、みんなでパーティーをしているんだろう。いや、していないのかな。
しずかに夜のふけていく中で、スクルッタおじさんは、いったい自分は、なにをしたいと思っているんだろうと、じっと考えていました。
まだ、あたりは暗かったけれど、そろそろ夜があけかかろうというころになって、おじさんは、はっと、それがなんだかわかりました。
そうだ。遠いむかしに、いったことのあった、あの谷へいってみたいんだ。
いや、もしかすると、いったことなんてなかったのかもしれない。本で読んだか、人からきい

かぼうと、きえようと、わしゃかまわないよ、と思っているのです。

ときどき、うとうとねむったかと思うと、また目がさめます。それでも、さっぱり、自分がだれなのかわかりません。なんの苦労もない、かって気ままな、痛快な一日です。

夕がたになると、おきだしたくなります。すると、なにかひとつ自分の名まえを見つけないとこまるな、と思います。そこで、名まえをつけてやろうとするのです。

スクルッタじいさんにしようか、スクロンケルおじさんがいいかな、それともスクルッタおじさんかな、スクレールおじさんかな、モフィ……。

なにしろ、やたらと知らない人を紹介されてばかりいるものですから、人の名まえをいわれたとたんに、かんじんの自分の名まえをわすれてしまうのです。

日曜日になるたびに、おおぜいの人たちがおしかけてきます。そうして、むやみやたらと大きな声をはりあげて、なんだかんだ、たずねようとするのです。

ことばはていねいなのですが、ちゃんときこえている、ということを、いくらいったって、いつまでたってもわからないんです。おまけに、あいてに話がちゃんと通じるようにと思ってか、なるべくやさしいことばでたずねようとします。

それから、そのみんなは、おやすみなさいといって、とっとと、うちへ帰って、うちでは、うたったりおどったり、あくる朝まであそびぬくのです。

第　7　章

なんでも，わすれるのだ



その人は、きみのわるいくらい年よりでした。そして、とてもわすれんぼうでした。ある秋の、朝まだ暗いころのことです。目がさめてみると、その人は、自分の名まえをわすれていました。

人の名まえをわすれると、ちょっと、ゆううつになりますが、自分の名まえをわすれることができるのは、とてもすばらしいことです。

この人は、朝がきたから、ねどこからおきださなければならないなんて思いません。一日じゅう、じっとねどこにねていると、とりとめもなく、いろいろな絵やら、考えやらが、頭の中にうかんでは、きえていくのです。なにがう

とてもしゃがれた、きみのわるい声がはねかえってきました。
「おまえさんなんかにゃ、教えるもんかね。」



あの、遠くの光はなんだろう、と、トフトは思いました。寒さが、足のつま先から、じわじわと、からだにつたわってきました。でも、ホムサは、じっと見つめていました。やっと見えるくらい、かすかに、かすかに、ついたり、きえたりする光を。

ぼくをさそいこもうとしているんだ、と、ホムサは思いました。

台所では、ヘムレンさんが、手にランプを持って立っていました。マットをさがして、ね場所を見つけて、服をぬいで、きょうも夜になったなあ、と思わなくてはならないなんて、ああ、いやだ、いやだ、たまんないや。おや、どうしてこんな気持ちになったんだろう、と、ヘムレンさんは、びっくりしました。きょう一日は、とてもたのしかったのに、あんなにすらすら、なにもかもうまくいったのは、なんのせいだったのかな。

ヘムレンさんがつっ立ったまま、あれこれ考えていると、ベランダのドアがあきました。だれやら、応接間にはいってきました。いすにぶつかって、いすをひっくりかえしました。

「なにしているんだい、そこで。」

と、ヘムレンさんはききました。

へんじがありません。ヘムレンさんはランプを高く持ちあげて、どなりました。

「そこにいるのは、だれだ。」

ヘムレンさんが思いうかべていた、夏の、南に面した、美しい応接間のおもかげは、どこにも見あたりませんでした。目にうつるのは、がらんとしたへやしかない屋根うらへつづいている、階段だけでした。

ヘムレンさんは、台所でねむることにきめました。

「ぼく、ちょっと、おもてに出てくる。」

と、トフトが、つぶやくような声でいいました。

トフトは、勝手口から外に出て、ドアをしめると、勝手口の階段の上に立ちました。おもてはまっ暗でした。目が暗やみになれるまで、じっとしていました。それから、ぶらりぶらり、庭を歩いていきました。夜の底から、ぼうっと、青色の光がうかんできました。いよいよ、水晶玉の前にやってきたのです。ホムサは、玉の中を、ぐっとのぞきこみました。

中は、深い海をのぞくみたいで、見ていると頭がくらくらするような光の波が、大きくうねりながら流れていました。トフトは、おくを、おくをと、のぞいていきました。しんぼうづよく待ちながら。

とうとう、いちばんおくに、ぽつんと、ほんのかすかに、青色の点みたいな光がともりました。ぴかっと光ってきえました。また、ぴかっと光ってきえました。灯台のあかりみたいに、おなじ間をおいて、光ったり、きえたりしました。

「そうとも。ムーミンママには、そういうことがあるよ。」
と、ホムサ＝トフトは答えました。
「ほかの人は、どうだか知らないけど。」
「あっ、ぼくも、そう考えてたんだよ。」
と、ヘムレンさんは、大声を出しました。やっと、ホムサがことばらしいものをいってくれたのが、うれしかったのです。
「ぼくはね、ムーミンたちを、よく見てみたことがないんだ。あいつらは、ほら、いるにはいてもさ……。」
ヘムレンさんは、なにか、うまいことばを見つけようとしました。口ごもりながら、あとをつづけました。
「つまりさ、なにかさ、いつだって、ちゃんといるにはいるんだけど、ってみたいなものさ。わかるかなあ、ぼくのいうこと……ほら、木みたいなものさ。どう……？でなければ、なにか……。」
ホムサは、また、自分のからの中にとじこもってしまいました。しばらくしてから、ヘムレンさんは立ちあがりました。
「そろそろ、ねたほうがいいんじゃないかな。あしたって日もあるからね。」
ヘムレンさんはそういって、ちょっとぐずぐず、まよっていました。

と、ホムサはいいました。
ヘムレンさんは、だんだんうきうきしてきました。台所のテーブルの上にからだをのりだしていいました。
「ぼくのヨットはね、よろいばりなんだ。春がきてね、ヨットにのって海に出るなんて、ぼくは最高にすばらしいと思うよ。」
ホムサはビスケットをコーヒーにひたして、かきまわしました。だまっていました。
「待ちに待っていてね。」
と、ヘムレンさんはつづけました。
「やっと帆をはって、海に出ていくんだ。」
ホムサは、ひたいにたれた髪をすかして、うわ目づかいにヘムレンさんを見ました。やっと口をひらきました。
「そうだね。」
ヘムレンさんは、きゅうに、たまらなくさびしくなりました。うちの中が、いやに、しんとしすぎています。ヘムレンさんはいいました。
「やりたいことがあったって、ひまがなくて、できないことだってあるんだ。そう思ったことはないかい。」

うしく鳴りだしました。それからうごきはじめました。

　さあ、また、時計がチックタックいいだしました。しずかに、しっとりと、おちついて。応接間が、人のいるへやらしくなってきました。

　ヘムレンさんは、それから、気圧計のところへいきました。かざりのいっぱいついた、黒い、大きな、マホガニーの気圧計です。そして、気圧計のねじをまきました。すると、お天気の「かわりやすい」しるしが出ました。

　それから、ヘムレンさんは台所へはいっていって、こういいました。

「だんだん、人のすむうちらしくなってきたぞ。どうだね、もうちょっとコーヒーをわかそうよ。火をつけてさ。」

　ヘムレンさんは、台所ランプをともしました。すると、台所のとなりの食料べやに、肉桂ビスケットがあるのが目にとまりました。

「こいつは、ほんものの、航海用のかたパンなんだよ。」

と、ヘムレンさんは教えました。

「こいつを見ると、ぼくのヨットを思い出すなあ。さあ、食べろよ、ホムサ。きみ、もっとふとらなくちゃあ。」

「どうもありがとう。」

ヘムレンさんのあとについていきながら、かきあつめたおち葉をひろって、かごに入れました。めったに口をききませんでした。

ムーミンパパの、青色の水晶玉の前までくると、ヘムレンさんは、ちょっとのあいだ立ちどまって、それをながめました。そして、

「これは、庭のかざりにおいてあるんだ。」

といいました。

「ぼくがちっちゃかったころには、こういうかざり玉は、みんな銀でできていたものだけどねえ。」

そういって、ヘムレンさんは、また、せっせとおち葉をかきあつめました。

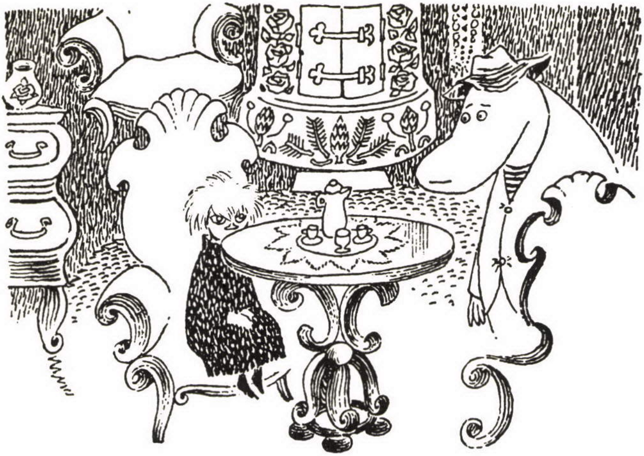
ホムサ＝トフトは、水晶玉のほうを見ようとしませんでした。あとで、ひとりっきりになって、そっとながめたかったのです。

水晶玉には、ムーミン谷の光が、みんなあつまっていました。谷間にすんでいるもののすがたは、いつも玉にうつっていました。ムーミンのうちの人が、だれか谷にのこっていたら、この深い青色の水晶玉の中をのぞけば、きっと見えるはずなんです。

夕がたになると、ヘムレンさんは応接間へはいっていって、ムーミンパパの目ざまし時計のねじをまきました。すると時計は、なにかがのりうつったみたいに、くるったちょうしで、そうぞ

「あれはね、ムーミンたちのご先祖さまさ。」
と、ヘムレンさんは説明しました。
「ムーミンの一族が、ストーブのうしろでくらしていたころからの人なんだぜ。」
肖像画のむこうには、人けのない、暗い屋根うらべやにきえていく階段が見えました。ホムサは、ぶるっと身ぶるいして、いいました。
「台所のほうが、あったかいんじゃない。」
「おっしゃるとおりだろうな。」
と、ヘムレンさんはあいづちをうちました。
「台所のほうが、いごこちいいかもな。」
ヘムレンさんは、また、おぼんを手に持ちました。ふたりは、だれもいない応接間をあとにして、出ていきました。

その日は一日じゅう、ふたりとも、旅に出てしまったムーミンたちのことを、ひとことも口に出しませんでした。
ヘムレンさんは庭に出て、くまででおち葉をかきあつめながら、庭じゅう歩きまわりました。そして、思いつくことがあると、かたっぱしから口に出して、しゃべりたてました。ホムサは、



あんまり、なにもかもりっぱすぎて、こしかけるのが気がひけました。
ストーブは、天じょうにくっつくぐらい高くて、まつかさもようの絵がついていました。それから、しんじゅでかざった風戸のひもと、ぴかぴか光るしんちゅうのとびらがついていました。たんすも、ぴかぴかに光っていて、どのひきだしにも、金メッキのとってがついています。
「さあ、どうしたんだい。こしかけないのかい。」
と、ヘムレンさんはいいました。
ホムサは、いすのはしっこのほうに、おしりをちょこっとのせて、たんすの上にかかっている肖像画を、じっと見つめました。それは、頭はすっかりしらがになって、いかつくて、より目で、しっぽのはえている人の肖像画です。びっくりするほど、でっかい鼻をしています。

いって、コーヒーをわかしておくよ。台所は右手だ。うちのうらがわのね。」
「わかっているよ。」
と、ホムサは答えました。
ヘムレンさんは、うちのほうへ歩いていきました。ホムサ＝トフトは、まきをひろってあつめだしました。
ヘムレンさんが、まきわりになれていないことは、わったまきを見て、ホムサにはすぐわかりました。でもたぶん、まきをわるのがおもしろくて、やってみたんだろう。まきは、いいにおいがするもんな。
ヘムレンさんは、おぼんにコーヒーをのせて、応接間へはこんでいき、マホガニーのたまご形のテーブルの上におきました。
「朝のコーヒーは、いつも、ベランダでのむきまりになっていたんだよ。」
と、ヘムレンさんはいいました。
「でも、お客にきた人には、応接間でのませるのさ。つまり、その、はじめてきた人にはね。」
いすは赤茶色でビロードばりで、どのいすの背にも、カバーがかかっていました。
ホムサは、はずかしそうに、まわりを見まわしました。きちんとした、りっぱなへやでした。

「ぼくは、また、ムーミンパパがきたのかと思ったよ。きみは、このうちの人が、みんなどこかにいっちまったのを、知っているのかい。」

「そんなこと、知らないよ。」

と、ホムサは答えました。

「なにしろ、ここんちのまきは、くぎだらけなもんでね。」

と、ヘムレンさんは、いいわけみたいにいいながら、おのを持ちあげてみせました。

「まきったって、板のお古や、材木のきれっぱしなんかばかりでさ、みんなくぎだらけなんだ。話をするあいてがいるって、いい気持ちなもんだな。ぼくはね、つかれを休めに、ここにきたんだ。」

と、ヘムレンさんはしゃべりつづけました。

「むかしなじみの友だちのうちに、ひょっこりあらわれるってのは、そんなときなんだ。」

ヘムレンさんは、わらいだしながら、おのをまき小屋の中にしまいました。

「おい、きみ、ホムサくん。」

と、ヘムレンさんはいいました。

「このまきを、みんな、台所にはこんでくれよ。かわかさなくちゃならないからな。そして、ほら、こんなふうに、ねっ、こんなふうに、つぎつぎとつんでいくんだ。その間に、ぼくも台所に

びくだけです。
さあ、いよいよついたぞ、と、ホムサ＝トフトは思いました。橋をわたって、庭の中へはいっていきました。庭は、ホムサのお話に出てきた庭にそっくりでした。そうです、ちがっているはずはないんです。葉のおちた木々が、十一月のきりの中に、ぼうっとかすんでいました。でも、その木々は、いっしゅん、ちらっとみどりにつつまれ、こずえをもれる日の光に、青葉がきらりと光りました。

ホムサは、どこかで、気持ちのいい、あまいライラックのかおりがにおうような気がしました。

ホムサは、まき小屋までかけだしていきました。まき小屋のほうからは、ちがうにおいがしてきました。古ぼけた紙のにおいです。おくびょうそうな感じのするにおいです。

まき小屋にあがる階段には、ヘムレンさんが、おのを腕にかかえてこしかけていました。おのの刃はこぼれて、いくつもぎざぎざができていました。ヘムレンさんが、その刃でくぎをたたいてしまったからです。

ホムサ＝トフトは立ちどまりました。こいつはヘムレンだな、と思いました。ヘムレンって、こんな顔をしているんだ。

「やあ。」

と、ヘムレンさんは顔をあげていいました。

た。山々のすそが、ムーミン谷におちこんでいくあたりでは、きりがいっそうこくなっています。池のかわりに、細い流れが、だんだん目につくようになって、その数も、しだいにふえてきました。ホムサは、何百というほどたくさんの滝や小川のあいだをぬってすすんでいきました。水の流れは、どれもホムサのすすむ道とおなじ方向にむかっていました。

もう、ムーミン谷はすぐそこに近づきました。さあ、谷間にやってきました。しらかばの木が目につきます。ほかの谷間のしらかばよりも、幹がいっそう白いからです。

あかるい色も、暗い色も、ほかの谷間に見える色よりも、ひときわ目だちました。

ホムサ＝トフトは、できるだけ息をころして、うんとゆっくり歩いていきました。

はっと、耳をすましました。

谷間のどこかで、だれかが木を切っています。ムーミンパパだな。冬につかう、まきを切っているんだな。

ホムサは、ますますそっと歩いていきました。足が、足もとのこけにさわっているのか、いないのか、わからないぐらいに、そっとね。

川が目の前に近づいてきました。川には橋がかかっています。橋のむこうには道が見えます。

パパの木を切る音は、もうやんでいました。ちょろちょろ流れてきたほそい流れや、小川の水が、みんないっしょにあつまって川になり、ザーッと海のほうにむかってすすんでいく音が、ひ

それでも、道にまよったりはしませんでした。

ホムサは、しあわせでいっぱいでした。自分がどうすればいいのか、わかったのですからね。

森のにおいはすてきでした。ヘムレンさんのヨットより、もっといいにおいでした。

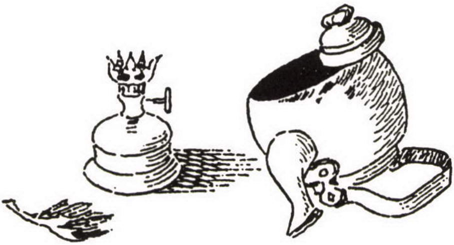
ヘムレンさんのにおいはどんなのかというと、古ぼけた紙のにおいです。そのにおいをかぐと、ヘムレンさんがおくびょうそうな感じがするのです。ホムサは、ヘムレンさんのにおいを知ってました。いつかいちど、ヘムレンさんがボートの前までやってきて、しばらく立っていたかと思うと、ため息をつき、ちょっぴり防水布をひっぱってみて、それからいってしまったことがあるからでした。

いま、雨はやんでいます。でも、きりが森いっぱいにたちこめていて、とてもきれいでし



第6章

魔法の水晶玉



ホムサ＝トフトは、ムーミン谷へいったことがいちどもありませんでした。でも、まいごにはなりませんでした。

道はずいぶん遠いうえに、ホムサの足は短い足。道のとちゅうには、深い池や沼がやたらとあり、それに、年とってたおれたり、ひっくりかえったりした大木が待ちかまえていました。さけた木の根が、大きな土のかたまりを持ちあげていて、その下に水たまりもどす黒く光っていました。

ホムサはそこをよけて、まわり道をしていきました。池や水たまりにぶつかるたびに、まわり道をしました。

ちょっと待っていました。やっぱり中はしいんとしています。

よし、答えない気なら、ちょっくらあいつらをからかってやれ、という気に、ヘムレンさんはなりました。

上着のえりを立て、ぼうしを鼻の上までひきおろし、バケツのわきにおいてあったくまでを見つけて、おどかすように、頭の上にふりあげました。それから大声でどなりました。

「警察のものだぞ。玄関をあけろ！」

そういって、じっと、ようすを見ていました。そのうちからだをゆすって、大声でわらいだしました。

うちの中は、ひっそりかんとしています。雨が顔にかかりました。中から答えがあるのを待っているあいだに、ひっきりなしに、雨が頭の上からふりかかってきます。

谷間じゅう、しいんとしずまりかえっていて、きこえるのは、ただ、ザーッとふりしきる雨の音だけです。

でっぷりしたおなかにしめたベルトを、きちんとしめなおし、川にそって、先へすすんでいきました。

ヘムレンさんが谷間にやってくると、谷間には、乳色のこいきりがたちこめていました。

ヘムレンさんは、すぐに、ずんずん、ムーミンの家の庭へはいっていきました。

と、どこか、いつもとちがっているので、めんくらって立ちどまってしまいました。

まるでちがっていないみたいで、それでいて、どこかがちがっているのです。

かれ葉が、ひらひら、鼻の頭におちてきて、ぺったりくっつきました。

「そうだった。この、おいらの大ばかものめが。」

と、ヘムレンさんは、思わず大声をあげました。

「いまは夏じゃなかったんだ。秋だったんだよ。どう？」

なんとなく、ムーミン谷というと、いつも夏のことときり考えていなかったんです。

ベランダのほうにむかって、また歩きだし、ベランダにあがる階段の前で、また立ちどまりました。それから、スイスの山のおくの牧童みたいに、ヨーデルの声でさけんでみようとしました。

でも、失敗。それで、かなきり声をあげました。

「ヤッホー。中にいるおかた、コーヒーをわかしておくれ！」

中はしいんとしています。ヘムレンさんはまた、さけんでみて、中からなにか答えがあるかと、

ムーミン谷の一キロほど東まできたとき、ヘムレンさんは、川岸におりていきました。深いあい色の水が、たえまなく流れていくのを、じっとながめているうちに、ヘムレンさんは、ふと、人生って川みたいなもんだなあ、という気がしました。
のろのろすすんでいく人もいます。とっとと、いそいでいく人もいます。とちゅうで、ひっくりかえる人だっているんです。
そうだ、と、ヘムレンさんは思いました。
この思いつきを、ムーミンパパに話そう。ヘムレンさんは、そう考えると、ぞくぞくするほどうれしくなってきました。
そう、そうなんだ。これは、あっというような新しい考えなんだ。いや、ほんとうにきょうは頭の中がすっきりしていて、なにもかも、よくわかってしまうぞ。
なに、ちょいとぼうしをこいきにかぶって、玄関から出ていきさえすりゃ、こうなるのさ。わけないことだよな。どう。
よし、ヨットを海におしだして、ひとつ、海に出ていってやろうかな。かじを持つ手に、ぐんと波の手ごたえがするんだ……。
波の手ごたえがするんだ、と、ヘムレンさんはくりかえしていってみました。すると、胸がきゅうんといたくなるくらいに、しあわせな気持ちでいっぱいになりました。

ぼくは、いままで、いちどだって、まいごになんてなってみたことはなかったものな、と、かえって、気分がうきうきしてきました。

それにさ、雨にびしょぬれになってみたことだってなかったんだ。

ヘムレンさんは、両手を、つばさみたいにばたばたふってみました。すると、いつかきいた歌の中の男に、そっくりになったような気がしてきました。

ふるさとを遠くはなれて、雨の中
たったひとりで、旅いく男
力はみなぎり、心ははれやか

ヘムレンさんの、うれしそうなようすといったら。おまけに、もうじきあのベランダで、あたたかいコーヒーをごちそうになれるんです。



あの家には、あの家の人たちもいたっけ。
でも、家族の人たちのことは、あまりよくおぼえていませんでした。家族の人たちは、みんな、あちこちにちらばって、パタパタ歩きまわり、自分の用事をしていました。みんな、やさしかったな。でも、みんな、なにか、ぼうっと、かすんだようにしか、おぼえていないや——ほんとにいい人たちだったなあ。

ムーミンパパのことは、いくらかはっきりおぼえていました。それから、パパのヨットのことも、おぼえている気がします。それから、桟橋のことも。でも、なによりかにより、朝目をさましたときの、たのしかった気持ちを、いちばんよくおぼえていました。

ヘムレンさんは立ちあがりました。歯ブラシをとりにいき、ポケットにつっこみました。

もう、気分はすっかりよくなっていました。いままでと、まるでちがうヘムレンになった気がしました。

ヘムレンさんが、うちから出かけていくのを見ていた人は、ひとりもいません。リュックも持たず、かさもささず、だまって、だれにもいわないで、ヘムレンさんはうちを出ていきました。

ヘムレンさんは、森や野原の道は、あまり歩いたことがありませんでした。ですから、たびたび道にまよって、とんでもないほうへいってしまいました。

でも、べつに心配にもならないし、かんしゃくもおきませんでした。

どうして、ぼくって、こんなことを口に出しちまうんだろう。考えてはいけないことだってあるんだ。根ほり葉ほり、ほじくって考えるのは、いけないことなんだ。

やけくそな気持ちになって、ヘムレンさんは、朝っぱらから、ゆううつになってしまったのを、ひと思いにふきとばしてしまえるようなたのしいことは、なにかないかしらと、知恵をしぼってみました。

いっしょうけんめい考えぬいているうちに、ちらっちらっと、遠い夏の日の、なつかしい思い出がよみがえってきました。ムーミン谷が、目の底にうかんできました。

この前、谷にいったのは、もう、ずいぶんむかしのことです。でも、とてもはっきりおぼえているものが、一つだけありました。ムーミンの家の南の客間です。そして、あそこで朝目をさましたときに、たのしくてたまらなかったことでした。

まどはあいていました。そよ風がふくと、白いカーテンが、ひらひら風になびきました。そして、まどのとめ金が、カタカタ、かすかに風に鳴りました……。天じょうでは、はえがブンブンうなっていましたけれど、それが、ちっともうるさくありませんでした。なにをするにも、いそぐ必要がありませんでした。

ベランダでは、コーヒーが待っていました。みんな、自分のすきなようにしていました。めんどうなことはひとつもなく、すらすら、みんなうまくいきました。

だ、と、ヘムレンさんは思いました。

でも、ヨットを習っているひまなんて、ちっともないんだ……。

ふいに、ヘムレンさんには、なんだか自分は、朝から晩まで、あれこれ、もののおき場所をかえたり、人に、それは、どこにおくほうがいいなんていってばかりいるように思えてきました。

すると、ふと、自分がなんにもしなくなったらどうなるんだろう、という気がしました。

「たぶん、いまとちっともかわりやしないさ。ほかのやつが、また、だれか、せわをやきはじめるだけさ。」

そう、ひとりごとをいって、ヘムレンさんは、歯ブラシをコップの中にもどしました。

と、いま、自分のつぶやいたことに、自分で気がついて、ぎょっとしました。すこし、こわくなってきました。

おおみそかの夜、時計がボーン、ボーンと十二時をうつのをきくときのように、背すじが、すうっと寒くなってきました。とたんに、こう考えていました。

（でも、それだったら、いまのうちに、ヨットにのっておかなくちゃな……。）

そう思うと、気分がわるくなってきて、べったり、ベッドにこしをおろしてしまいました。

なにがなんだか、わかんなくなっちまった、と、かわいそうに、ヘムレンさんは、みじめな気持ちになりました。

をはきました。

ヘムレンさんは、服をぬいだり着たりするのがきらいでした。着たりぬいだりしていると、毎日おんなじことをくりかえしているみたいな気がしてくるのです。無意味に毎日をすごしているように思えるのです。

それでも、やっぱり、くる日もくる日も、朝から晩まで、せっせとせいをだして、あれこれ、きちんとならべてみたり、おきかえてみたり、かたづけてみたりして、すごしていました。

まわりの人たちは、みんな、気まぐれで、いきあたりばったりなくらしをしています。

どちらをむいても、かたづけたり、整頓しなくてはならないものばかり目につきます。ヘムレンさんは、みんなに、どのように毎日をすごすべきか、からだがすりきれそうになるほど、といてまわったものです。

みんな、よりよいくらしをするのが、いやなみたいだ、と、ヘムレンさんは、歯をみがきながら、かなしくなりました。

ヨットと自分が、ならんでうつっている写真が、ふと目にとまりました。いつか、ヨットの進水式のときにとった写真でした。とてもきれいにとれています。でも、それを見ると、ますますかなしくなってきました。

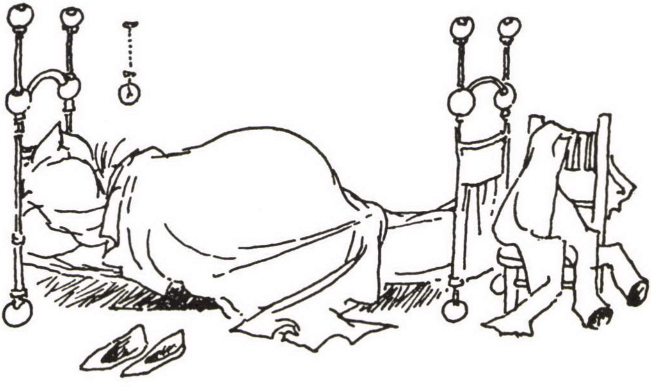
ぼくは、せっかくヨットがあるんだから、ヨットをあやつれるようにならなくちゃいけないん

ヘムレンさんは、ふとんの中に深くもぐりこみ、鼻をまくらにあてて、ぐいぐいおしつけました。それから、おなかを、つめたいシーツのはしのほうへずらしました。ベッドいっぱい大の字になって、両手と両足をひろげて、たのしいゆめを見るまで、じっと待っていました。いつまで待っても、たのしいゆめなんて、見られっこないんですけれどね。

からだを小さくまるめてみましたが、だめです。みんなにすかれるヘムレンになってみようと思ったり、みんなにきらわれる、かわいそうなヘムレンになってみようと思ってもみました。

でも、だめでした。どんなに苦心してみても、やっぱり、自分は自分でした。いままでどおり、いくらいっしょうけんめいになってみても、さっぱり、いいめにあえないヘムレンでした。

とうとう、あきらめて、ベッドからぬけだし、ズボン



第 5 章
ヘムレンさんは自分がきらい



　ヘムレンさんは、ねむい目をこすりこすり、やっと目がさめました。目がさめきってみると、自分は、やっぱり、いつもの自分です。ちっともかわっていません。

　ああ、いやだなあ。もう、ぼくは自分がいやになった。なにか、ぼくの知らない、ちがったものになりたいなあ。

　ヘムレンさんは、ゆうべ、ベッドにはいったときよりも、もっとうんざりしていました。

　――また、一日がはじまるんだ。夜までつづいて、また、あくる日がやってきて、また、やってきて、いつまでたっても、きまりきったヘムレンのくらしが、毎日毎日つづいていくんだ。

わけなくつかまえられるような曲なら、いくらでもあります。ふんだんに、つぎつぎとわいてきます。でも、スナフキンは、そういう曲は、目の前にきてもつかまえないで、かって気ままにとんでいかせました。そういうのは、だれにでもつかまえられる、夏の歌ですものね。

スナフキンは、テントの中へはいこみました。ねぶくろにもぐりこみました。頭の上までねぶくろをひっぱりあげて、すっぽりとくるまりました。

かすかな雨の音も、すずしい流れの音も、まだきこえています。しんみりした、しっとり気持ちのおちつく、やさしいしらべでした。

でも、雨の曲が作れないのなら、もう、雨のことなんて、どうでもいいのです。



した。この八月、ムーミン谷のどこかで、かれの頭に、五つの音色がひらめいたのです。

それは、なにかの曲の、すばらしい出だしになるにきまっているしらべでした。そのしらべは、まるで、いままでしばられていたなわがとけて、自由になったとたんに、スナフキンの頭の中にとびこんできたみたいに、ひとりでに、すらすらとうかんできました。

さあ、いままでしまっておいた、その五つの音色をつかって、雨の曲を作るときが、いよいよ近づいてきたんだ。

スナフキンは耳をすまして、あの五つの音色が、またきこえてくるのを、じっと待ちました。

おや、あの五つの音色が出てこないぞ。

でも、心配はしませんでした。じっと待っていました。作曲するときはどんなだか、よくわかっていたからです。

耳をすましてみても、きこえてくるのは、シトシトというかすかな雨の音と、水の流れるすずしい音だけでした。

だんだんあたりが暗くなって、とうとう、まっ暗になりました。スナフキンはパイプをとりだしてみて、でもまたすぐにしまいました。

あの五つの音色は、ムーミン谷においてけぼりになったんだ。ぼくが谷に帰らなくては、ぼくのところには帰ってこないんだ、ということが、スナフキンにわかりました。

すんでいきさえすれば、それで気がすみました。

森は雨にふりこめられて、重苦しく、木々は、じっと立ちすくんでいました。なにもかもかれはてて、死んでいました。

でも、足もとの土の上には、むくむくと、新しい生命が生まれはじめていました。くちはてたかれ葉の下から頭を持ちあげて、夏とは縁もゆかりもない、見なれない、すべっこいはだの植物が地面をはってもりあがり、人の知らない、秋の末の、ひみつの庭園ができかかっていました。

むきだしになったこけももは、黄ばみがかった色。つるこけももは、どす黒い血色。地面の下にすがたをかくしていた、いろいろなこけも地はだをそめはじめていました。それが、だんだんひろがっていって、しまいには、森じゅうに、やわらかな大きなじゅうたんをしきつめたようになるのです。

目にしみるようにあざやかな、ま新しい色が、むやみと目につきます。どちらを見ても、目のさめるように赤い、なかなかまどがはびこっています。

黒い色も目にとまります。しだです。

スナフキンは、作曲をしたくなりました。でも、したくてしたくてたまらなくなるまで、じっとこらえることにしました。

ある日の夕がた、スナフキンは、リュックの底にしまいこんであったハーモニカをとりだしま

第 4 章

スナフキンと五つの音色

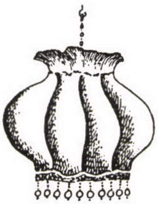


秋も末になりました。スナフキンは、南へ南へと旅をつづけていきました。ときどき、気がむくとテントをはって、そのまわりを、足のむくままに歩いてみました。すぎさったことは、みなわすれて、時間のたつのも気にしないで、なにも考えないで歩きまわりました。そして、目がくさるほどねむりました。

歩いているうちに、かわったものがあると、目ざとく見つけました。なににでも、よく気がつきました。でも、好奇心は、ちっともわきませんでした。

足がどっちのほうにむいていこうと、いっこうに、おかまいなしでした——むやみに先へす

ともの花びんを、かわりに入れました。
雨ふりのせいで、早くうす暗くなってきたので、つりランプに火をつけました。
火をつけながら、フィリフヨンカは、ふっと思いました。
わたし、ほんとに、どうかしていたんだわ。だって、このつりランプのかさが、さっきは赤く見えたんですものね。ちっとも赤くなんてないのに。ただ、ちょっと、茶色がかっているだけじゃないの。
でも、まあ、そんなことは、どうでもいいわ。とにかく、さあ、旅に出かけるとしましょう。



カは、戸という戸をみんなひらきました。衣装戸だなをひらいてみました。と、中に、スーツケースがおいてありました。それが目にとまったとき、やっと、フィリフヨンカは、これから、どうすればいいのかわかってきました。

よその家をたずねるのです。人に会いにいくのです。一日じゅう、おしゃべりをして、ゆかいにさわいで、いそがしく、うちから出たりはいったりして、うすきみのわるいことなんて、考えているひまがない人たちに、会いにいくのです。

そういう人たちって、そう、ヘムレンさんではないわ。ミムラねえさんでもないわ。ミムラねえさんだなんて、とんでもないこと！　ちがう、ちがう、ムーミン一家の人たちよ。

もう、そろそろ、ムーミントロールのママのところへ、あいさつにいってみるころでした。さあ、さっと、思いたったときに決心しなくては。決心がにぶらないうちに、すばやく実行しなくては。

フィリフヨンカは、スーツケースをとりだして、その中に銀の花びんを入れました。ムーミンママにあげるおみやげです。せっけん水を屋根にぶちまけて、まどをしめました。髪の毛をふいて、毛まき紙でくるみました。それから、午後のお茶をのみました。

うちの中は、もういつものようにおちついてきました。

紅茶茶わんをあらってしまうと、気がかわって、いったん入れた銀の花びんをとりだして、せ

雨にぬれたし、それに、ちょっとの間に、一生かかってもあじわえないような、こわいめにあったものですから、フィリフヨンカは寒けがしてきて、がたがたふるえだしました。

コーヒーでもわかしましょう、と思って、台所の戸だなをひらくと、おや、まあ、これは、なんとしたこと。戸だなの中には、やけにぎっしり、せとものがつまっていました。

こんなにせとものがあるなんて、いままで、まるっきり気がつかなかったわ。コーヒー茶わんなんて、ぎょっとするほどあるし、野菜ざらや肉ざらだって、ありあまるぐらいあります。おぼんは、山づみになっているし、食器だって入れものだって、何百というほどあるんだから。それなのに、それをつかうのは、たったひとりなんだわ。わたしが死んでしまったら、あとは、だれがつかうのかしら。

「死ぬなんて、とんでもない。わたしは、死にっこないんだから。」

と、フィリフヨンカは、ぼっそり、つぶやきました。そして、バタンと、また、戸だなの戸をしめてしまいました。

それから、走っていって、居間にかけこみました。つまずきながら、家具のあいだをぬって、へやの中を歩きまわりました。と思うと、また、出ていきました。

応接間に走りこみ、へやじゅうのカーテンを、みんな下にひきおろしました。屋根うらべやへもあがっていきました。どこもかしこも、しいんと、しずまりかえっていました。フィリフヨン

天じょうからつるしたつりかぎも、いつもとちがって、目あたらしい形に見えました。

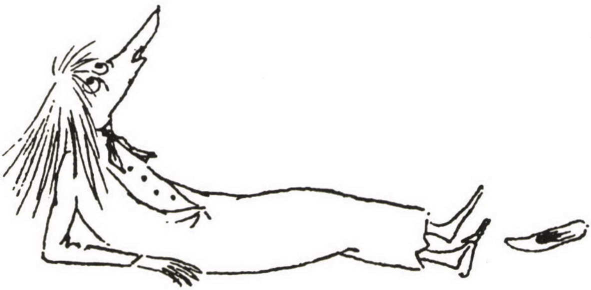
むかむかしていたのが、すこし気分よくなってきました。

つりかぎの先につるしてあるものは、いつになっても、いつも下むきにさがっています。上をむいたり、横をむいたり、かってに、むきはかえないのです。まあ、なんてたのもしいんでしょう、と、フィリフヨンカは思いました。そして、なんだか、それがふしぎな気がしました。

へやの中は、どこを見わたしても、すっかり見ちがえるようにかわっていました。

フィリフヨンカは、かがみの前にいって、自分のすがたをうつしてみました。鼻のかたほうが、すりきずだらけでした。髪は棒のようにのびて、ぐっしょりぬれていました。目も、いつもの自分の目でなくて、まるで、ほかの人の目みたいでした。

ものを見る目があるというのは、いったい、どういうことなのかしら。目があるために、どうなるかしら。まず、見る……。



ものになろうっと……と、かの女は思いました。
いのるような気持ちでしたし、それに、なきたいようなみじめな気もしていました。だって、フィリフヨンカに生まれたいじょう、いつまでたってもフィリフヨンカにきまっているし、ほかのものになろうたって、それはむりというものですもの。

ぞうきんは、ちぎれないですみました。まどは、すこしずつひらいていき、やがてパタンと音をたてて、大きくひらきました。

フィリフヨンカは、ぞうきんをつかんでいた手をはなし、ころがりこむように、まどの中にとびこみました。もう、ここなら安心です。ごろんと、ゆかの上にねころがりました。おなかの中がぐるぐるまわりをしたようで、ひどくむかむかします。

頭の上のほうで、天じょうのつりランプが、風にゆれています。ランプのかさのまわりにつるした糸のふさが、小きざみにふるえています。ふさの先には、どれにも、小さなしんじゅがついています。

フィリフヨンカは、びっくりして、目をみはりました。つりランプに、こんなふさがついているのを、いままでいちどだって見たおぼえがないのです。じっと見つめました。

おまけに、ランプにかぶせた絹のかさが赤色だなんてことにも、いままで、ちっとも気がつきませんでした。まっかな、夕日のような、すばらしくきれいな色でした。

ひっぱることができません。なにしろ、小さなくぎの一本さえついていないのです。

フィリフヨンカは、ヘアピンをつかって、それで、まどをこじあけようとしてみました。でも、ヘアピンは、ぐにゃっとまがってしまいました。

まどから中をのぞくと、せっけん水のはいったおけが見えました。ぞうきんもおいたままです。おとなしい、平凡な絵が一つかかっています。ああ、こんなによく見えるのに、いくにいけない別世界なんだわ。

ぞうきん！　そうだ、ぞうきんのことをわすれていたわ……。フィリフヨンカは、ぞうきんを、まどのふちにはさんでおいたことを、きゅうに思い出しました。胸がどきどきしはじめました。

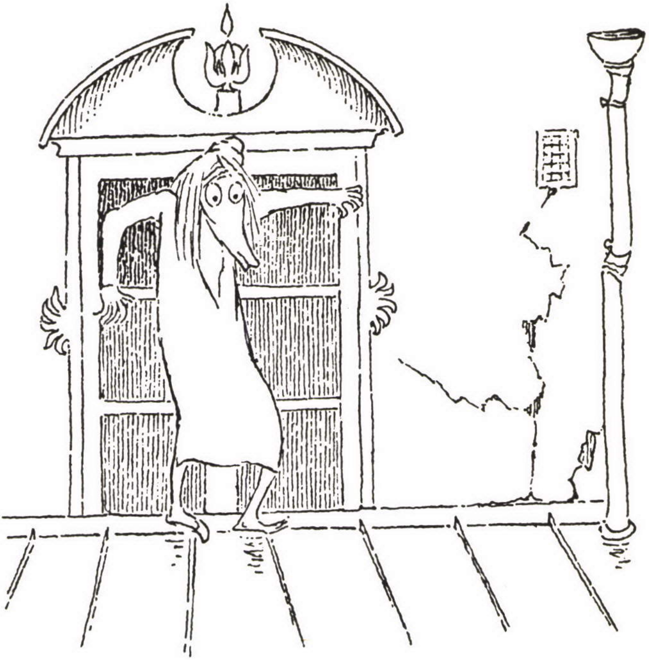
見ると、そのぞうきんのはしが、まどのふちから、ほんのすこし、外にはみだしています。

フィリフヨンカは、ぞうきんのはしを、用心ぶかくつかみました……。それから、おそるおそる、そっとひっぱりました……。

ああ、きれがちぎれませんように。新しい、じょうぶなぞうきんだったらよかったのに……。

もう、こんどからは、古ぞうきんとか、なにやかやを、けちけちして、とっておくのなんてよそう。じゃんじゃんつかっちまおう。おそうじするのもよしましょう。だいたい、わたしって、おそうじをしすぎるんだわ。あれこれ、気をつかいすぎるんだわ……。

わたし、もう、フィリフヨンカになっているのなんて、いやになっちゃったわ。なにかほかの



もう、フィリフヨンカには、なにがなんだかわからなくなりました。できるだけ、からだをぺちゃんこにして、むちゅうでかべにへばりついて、ただやみくもに、先のほうへすすもうとしていました。

さあ、やっと、さっき出てきた、あのまどの前にやってきました。でも、まどは、もう、風がふきつけて、ぴったりしまっていました。ひらこうとしても、アーチ形のまどわくには、まるっきり手をかけるものがありません。つるつるで、のっぺらしていて、つかんでひっぱろうにも、

わたしがこんなめにあっているというのに、だれも心配してくれやしない。あっ、コルセットが、なにかにひっかかってしまった。ああ、こんなこわい思いをしているうちに、いつなんどき、目がまわって……。

雨が、また、ふりはじめました。フィリフヨンカは、目をひらいて、肩ごしにふりかえってみました。ななめうしろに、急傾斜の屋根が見え、その先に屋根のへりが見え、その先に、下までのっぺらぼうの、なんにもなしが見えています。

足が、また、がくがくしてきました。まわりのものが、ぐるぐる、ぐるぐる、まわりはじめました。とうとう、めまいがしてきたのです。

うしろからすいこまれたように、すうっと、からだがかべからはなれました。足もとの横木が、きゅうんとひきしまってきて、かまの刃みたいにうすくなりました。と、長い長いいっしゅんのうちに、フィリフヨンカの一生の思い出が、頭の中をかけめぐりました。

フィリフヨンカのからだは、ゆっくり、ゆっくり、うしろのほうへかたむいていきました。はらはらするような光景です。いまにも、あおむけにたおれてしまいそうです。

きゅうにぴたりと、からだのかたむくのがとまりました。またまた、永遠にこのままでいるのかと思えるほど、いつまでも、じっととまっていました。

それから、からだが、ふたたび、前にかたむいていって、もとのしせいにもどりました。

た。たった一本のほそい針金と、フィリフヨンカだけが、この世の中にのこっているきりでした。
とうとう、屋根のてっぺんにある、ほそい横木に手がとどきました。しっかりつかんで、いっきにはいあがりました。
はいあがると、ねたしせいのまま、しばらくじっとしていました。それから、四つんばいになり、そして、そろりそろり立ちあがりました。
立ちあがっても、足はふるえています。ふるえがとまるまで、じっとしていました。まったく、へっぴりごしの、みょうちくりんなかっこうです。自分でもよくわかりました。でも、ちっともおかしい気がしません。
かべのほうに顔をむけて、一歩ずつ、横木の上を横にすすみはじめました。すすむにつれて、なんども、まどのあるところにきました。でも、どのまども、どのまども、かぎがかかっていました。
長すぎる鼻が、かべにつかえて、じゃまになります。ぱらりと髪の毛がたれて、目にかぶさりました。髪の毛の先が、鼻をくすぐります。くすぐったくてたまりません。でも、くしゃみをしたらたいへん。ぜったいに、しちゃいけないんだわ。したら、たちまちからだのつりあいがくずれて、よろめいてしまうもの……。なんにも見ちゃいけないのよ。なんにも考えちゃいけないのよ。ああ、足首がおれてしまいそう。

くあみです。
まどはひらきっぱなしのまま、風にカタカタ音をたてていました。庭で、サラサラ、葉ずれのようなささやき声がきこえます。時が流れていきました。ポトンポトンと、雨つぶが、屋根板にあたりました。
ふと、フィリフヨンカは、うちのはんたいがわに、避雷針が立っていることを思い出しました。そうだ、あの避雷針の針金は、屋根うらべやまでとどいているはずだわ。
そろりそろり、フィリフヨンカは、横ばいに、屋根のはしぞいに、からだをずらしはじめました。片足をすこしずらし、それから、つぎの足を、またすこしずらします。目はぎゅっととじて、おなかは思いっきり屋根におしつけて……。
そうしながら、やけに大きな自分の家のまわりを、はんたいがわにむかっていきました。
わたしには、よく、目のまわるくせがあるんだけど、もし、いま目がまわったら、どうしようかしら。すすみながら、フィリフヨンカは、そう思って、ひやひやしどおしでした。
あっ、避雷針が手にふれました。やっと、避雷針のところまでたどりついたのです。命がけの思いで、ぎゅっと避雷針をつかみました。
目はしっかりとじたまま、フィリフヨンカは、避雷針の針金につかまって、あいかわらず、そろりそろり、屋根をはいのぼっていきました。もう、まわりのものは、なにも見えなくなりまし

コツン。屋根のへりに足がぶつかって、フィリフヨンカのからだは、やっととまりました。

さあ、からだがじっとしたとなると、こんどこそ、こわくなってきました。からだの底から、じわりじわり、こわさがこみあげてきて、のどが息ぐるしくなって……インキをのみこんだみたいに、気持ちわるくなって……。

目をつぶってみても、だめでした。はるか下の地面が、やきついているように、目の底にうかびあがってきます。大声をあげようと思っても、びっくりしたやら、こわいやらで、あごがいうことをききません。

おまけに、大声でさけんでみたって、たすけにきてくれるような人なんて、まわりには、だれもいっこないのです。なにしろ、フィリフヨンカは、もう、ずっと前から、だれともつきあわなくなっていたのですから。家族とも、親類の人たちとも、うるさい友だちともね。

ですから、かってに、すきほうだい、うちのおそうじだってできたし、自分のことにかまけることもできました。まして、けむしやかぶとむしが、うじゃうじゃはいまわっている、庭のまん中に、だれにもじゃまされないで、ころがりおちるひまだって、たっぷりあったというわけです。

フィリフヨンカは、必死になって、上のほうにはいあがろうと、ばたばたもがきました。両手をしきりにうごかして、つるつるすべる屋根板をつかもうとしました。でも、つかんでも、つかんでも、すこしはいあがると、また、ずるずるとすべって、あともどり。まるっきり、もとのも

れはあいつだ、とわかりました。気持ちのわるい、さなぎなんです。さなぎの中には、青白い幼虫がうずくまっています。フィリフヨンカは、ぞくぞくっとして、思わず足をひきました。どこにいっても虫けらだらけ、それが、なにかしようとするたびに、きっと、目の前にとびだしてくるんです。

　フィリフヨンカは、大いそぎで、ぞうきんでさなぎをつまむと、まどの外にほうりだしました。さなぎは、屋根の上をころころころがって、屋根のはしでぽんとはね、きえていきました。

「おお、いやだ。いや、いや。」

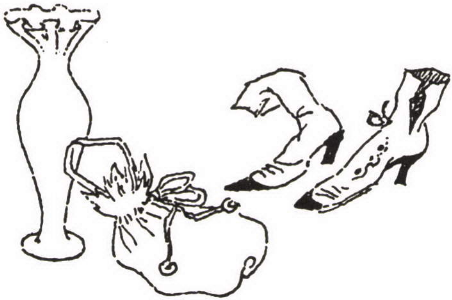
と、フィリフヨンカは、小さなつぶやき声をもらすと、ぞうきんをバタバタふるいました。それから、お湯のおけをかかえて、まず、まどガラスの外がわをふこうと、まどのしきいをまたぎました。

　ところで、フィリフヨンカは、なめらかなフェルトのスリッパをはいていたのです。それでいきなり、雨にぬれてつるつるしている、傾斜のきゅうな屋根の上に出ていったのですから、ひとたまりもありません。たちまち、ずるずるっとうしろむきに、屋根の下のほうにむかって、すべりだしました。

　こわいっ、なんて思っているひまもありません。ドシンと、やせっぽちのからだがうつぶせにたおれて、鉄砲だまみたいないきおいで、屋根をすべりおちていきます。

第3章

フィリフヨンカの大冒険



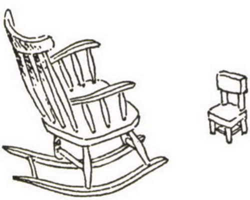
十一月の、ある木曜日に、雨がやみました。フィリフヨンカは、思いきって、屋根うらべやのまどをふくことにきめました。台所でお湯をわかして、その中に粉せっけんを、ほんのすこし、そう、たくさんではないのです。ふりこみました。それから、お湯を入れたおけを、屋根うらべやへはこびこんで、いすの上におきました。

そして、まどをひらいたとたんです。ぽろっと、まどのふちから、なにやら、足もとにおちてきました。小さな綿くずのかたまりみたいなものです。

でも、フィリフヨンカは、すぐに、あっ、こ

う、そうすればいいのです。

ホムサ＝トフトは、こうきめると、ふたたび、ねむりこんでしまいました。夜のあけるまで、ゆめも見ないで、ぐっすりねむりました。



しくなって、胸がはずみます。
ふいに、まわりのけしきに、みるみる灰色のきりがたちこめてきました。とじている目の中が、まっ暗になりました。
秋の長雨の音が、防水布の上できこえます。ホムサは、いまきた道をひきかえそうとします。でも、だめ。
こんなことが、今週はなんどもありました。そのたびに、きりのたちこめるのが、すこしずつ早くなります。きのうは、まき小屋のところでした。きょうは、ライラックの前で、もう、暗くなりました。
ホムサ＝トフトは、コートの中に、すっぽりからだをもぐらせながら、考えます。
あしたは、川までもいけないかもしれないぞ。もっと、先のほうまで見えるように話したいんだけど、できやしない。どんどん、あともどりするばかりだ。
ホムサは、うとうとしました。
そのあと、まっ暗やみの中で目がさめてみると、もうホムサには、どうすればいいのかわかっていました。
ヘムレンさんのボートを、このままのこして、ほんとうにムーミン谷へいく道をさがそう。ほんとうに、あのベランダにあがって、玄関のドアをひらいて、自分のことを知ってもらおう。そ

ハンモックをつりします。
まき小屋の前に、黄色いおがくずをまきちらします。
さあ、もう、ムーミンの家はすぐそこです。
しゃくやくの花壇をすぎて、こんどはベランダがあって……ベランダには、朝日がいっぱいあたっています。それは、前にホムサがお話で作った、そっくりそのままのベランダです。糸のこで作った手すりもそのまま、手すりにからまっているすいかずらも、ベランダの上のゆりいすも、みんな、そのままです。

ところで、ホムサ＝トフトは、いちども、家の中へはいったことがないのです。おもてで、ムーミンママが、玄関の前の階段に出てくるのを待っているのです。

くやしいことに、ホムサはいつも、ここのところでねむってしまいます。

でも、たったいちどだけ、ムーミンママの鼻が、玄関の戸のすきまから、ちらっと見えたことがありました。それは、先のまるっこい、やさしそうな鼻でした。ムーミンママったら、どこもかしこもまるっこいのです。ママというのは、こんなふうに、まるっこくなくてはいけないんだな。

さて、トフトは、またまた、谷間を歩いていきます。おんなじ道を、いままでに、もう何百回も、くりかえしくりかえし、歩きました。歩けば歩くほど、おなじ道を歩くのが、ますますたの

りました。これは、まちがいでした。ここのところにあってていいのは、橋と郵便箱だけなのです。

それから、その先にはライラックの花がさきみだれていて、ムーミンパパのまき小屋があります。どちらも、あたりにしっくりとあって、夏らしいにおいがしています。

さて、とてもおだやかな、ある朝のことです。

朝とても早く、すみきった空気の中に、はるかに、青色ガラスの水晶玉が見えました。ムーミン家の庭にある、台の上にのった水晶玉が、このときやっと、ホムサ＝トフトに見えたのです。ムーミンパパの水晶玉です。

谷間じゅうさがしても、くらべもののないほどきれいな、魔法の水晶玉でした。

そのうちに、草はぐんぐん背がのびて、花がいっぱいさきみだれるようになるんだ、と、ホムサ＝トフトは、そんな話もしました。

きれいにはききよめられて、貝がらや、こがねのつぶでふちどられた道のことも話しました。

それから、とくべつに大すきな、草の葉にこぼれる日の光の話を、ちょっぴり長々とします。

谷間の空高く、かすかになりわたる風をふかせます。風は森をふきぬけて、山はだにぶつかり、なりをしずめます。あたりは、また、ひっそりと、しずかになります。

りんごの花がさいています。ホムサは、りんごの木の何本かに、実をつけてやります。でも、またとってしまいます。



わそうと苦心します。
見わたすかぎり、青葉が夏のそよ風に波立ち、まわりも、頭の上も、青葉でおおわれ、草の葉に日の光がこぼれ、まるはなばちの羽音がうなり、こうばしいかおりがたちこめています。
ホムサは、ぶらりぶらり歩きつづけて、とうとう、すずしい川音のきこえるところまできました。
ところで、たいせつなのは、ほんのちょっとしたことひとつでも、話をかえないことでした。
いつだったか、川のほとりに、夏の家を一けん作ったことがあ

トは、いいにおいのするところにしか、すまないきまりにしていました。
太いうでの中に、しっかり自分をだいてくれる、輪にたばねたロープもすきでした。
やみまなくふりつづく雨の音もすきでした。着ているだぶだぶのコートは、あったかくて、秋の夜長をすごすのに、うってつけでした。
日がくれて、みんなが家に帰ってしまって、入り江がしいんとしてくると、ホムサは、自分で作ったお話を、自分にしてきかせます。
それは、あの、しあわせなムーミン一家の人たちのお話でした。
話をしているうちに、ホムサは、いつのまにかねむってしまいます。すると、つぎの夜、また、つづきを話すのです。はじめからやりなおすときもありました。
ホムサの話は、いつも、しあわせいっぱいの、ムーミン谷のようすからはじまりました。
ぼくは、いま、暗い針葉樹の林や、目のさめるようにあかるい、しらかば林のおいしげった坂道を、ぶらりぶらり、おりていくんだ。
ホムサは、こんなふうに話しはじめました。
じっとり、あせばんできます。
それから、ぱっと、目の前に谷間がひらけ、きらきらと、すきとおるような日の光にきらめく野原が、目の下にひろがります。ホムサは、このときのすばらしい気持ちを、なんとかいいあら

ヘムレンさんのヨットのへさきの、うんと底のほうに、ちびっこホムサがすんでいました。トフトという名まえです。（といっても、ヨットのトフトとは関係ありません。ヨットのこしかけ板を、スウェーデン語でトフトといいますけど、偶然の一致なのです。）

　こんなところにトフトがすんでいるなんて、知っている人は、ひとりもいません。

　一年にたったいちど、春さきになると、だれだかわからないけどやってきて、防水布をとりのけて、ヨットのひびのひどくなったところに、タールをぬってふさぎます。ふさいでしまうと、また、防水布をかぶせます。その下で、ヨットは、しんぼうづよく待ちつづけるのです。

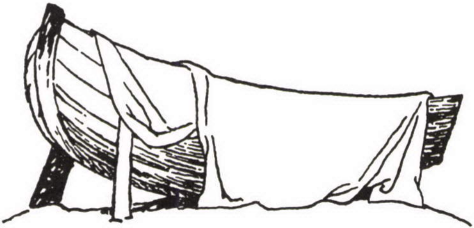
　ヨットはあっても、ヘムレンさんは、海にのりだすひまなんて、まるっきりありません。それに、ヨットをあやつることだって、できないのです。

　ホムサ＝トフトは、タールのにおいが大すきでした。トフ



第　2　章

ホムサは，お話を作るのが大すき



しとしとと、いつまでも、いつまでも、雨はふりつづきました。秋に、こんなに長雨がふるなんて、いままでにないことでした。

海岸ぞいの谷間は、どれも、山こえ丘こえ流れこむ水で、ぐっしょり。地面はひからびるかわりに、じめじめと、くさりそう。

なんだかきゅうに、夏なんて、ずっと遠くへいってしまって、いちどだってきたことがなかったような気さえします。

だれもかれも、となりの家へいく道が、とても遠く思えて、自分の家にもぐりこんでしまいます。

ています。スナフキンは、思わずぶるっとして先へすすんでいきました。

ヨットの中には、ちびっこホムサがいて、スナフキンの足音に、息をころしていました。足音は通りすぎて、だんだん遠のいていきました。あたりは、また、しんとしずか。きこえるのは、しとしとと防水布をぬらす、雨の音だけです。

いちばんはずれの家は、もみの木の林にかこまれた一けん家でした。ここから先は、いよいよ、寒々とすさみきった、深いジャングルになります。

スナフキンは、ますますいそぎ足になって、わき目もふらずに、ジャングルにつきすすんでいきました。

と、はずれの家の玄関の戸が、すうっと、ほそくあいて、とてもしゃがれたどなり声が、スナフキンをよびとめました。

「おい、おまえさん、どこへいく気だね。」

「わかるものか、そんなこと。」

と、スナフキンは答えました。

戸は、またしまりました。しんと、はてしなく、おくのおくまでしずまりかえっている森の中に、スナフキンは、足をふみこんでいきました。

スナフキンは、音もたてずに、すばやく歩いていきながら、思いました。
（家ってやつは、どいつもこいつも、気にいらないな。）
とっぷり、日がくれようとしていました。おや、はんのきの下に、ヘムレンさんのヨットが、ねずみ色の防水布をかぶせて、つないであります。防水布の上に、ちょっぴり顔を出しているのは、マストとオールとかじです。どれも、もう、いく夏も雨ざらしになっていて、黒ずんで、ひびがはいっ



あたりがうす暗くなったころ、スナフキンは、山あいにひっそりと、かげのようにしのびこんでいる、大きな入り江のほとりにやってきました。入り江のいちばんおくには、気の早いあかりが、ちらほら光っていました。そこには、家がひとかたまりになって、ぴったりよりあっていました。

雨のおもてには、人っこひとり出ていませんでした。

ここには、ヘムレンさんと、ミムラねえさんと、ガフサがすんでいました。ここには、どの家の屋根の下にも、のこることにきめた人ばかりすんでいました。みんな、家の中にいるほうがすきな人たちでした。

スナフキンは、家々のうら庭のすみっこを、足音をしのばせて歩いていきました。物かげにかくれながら、こっそり、なりをしずめてすすみました。だれとも口をききたくなかったのです。

大きな家も、小さな家もありました。どれもこれも、くっつきそうなようすでならんでいました。くっついてしまっている家もありました。その家は、となりと、屋根も、といも、ごみ箱まで共同でした。となりの家のまどの中がまる見えで、となりの食べもののにおいまで、よくわかりました。

おなじようなえんとつと、高い切りづまと、井戸のポンプがならんでいる下に、家から家へ通じている、すりへった道がありました。

フィリフヨンカは、うちのうらがわで、じゅうたんたたきをはじめました。拍子をとって、はげしくたたくその音をきけば、フィリフヨンカは、じゅうたんたたきがすきだなって、だれにでもわかるような音でした。

スナフキンは、どんどん先へすすみました。パイプに火をつけて、もう、ムーミン谷では、みんな目をさましたころだろうな、と思いました。

ムーミンパパは、時計のねじをまいて、それから、一日まきの気圧計のねじをまいているだろうな。ムーミンママは、かまどに火をもしつけているだろうな。ムーミントロールはベランダに出て、おや、テントがなくなっちまった、テントのところがからっぽだ、と、気がついているだろうな。それから、橋のたもとの郵便箱をのぞくぞ。でも、その中もからっぽ。

そうだ、ぼくは、お別れのあいさつを手紙に書いて、入れてくるのをわすれちまった。そんなひまなんてなかったんだもの。でも、ぼくの手紙なんて、みんな、似たりよったりさ。「四月になったら帰ってきます。お元気でね。」とか、「ぼくは旅に出るよ。春になったら帰ってきます。おからだ、おだいじに。」とか。

ムーミンは、ようく知っているとも。

そう思ったとたん、スナフキンは、もう、ムーミントロールのことはわすれてしまいました。あっけらかんとね。



せっせと、せいいっぱい冬じたくのたくわえをして、安心なところにしまいこむときなのですからね。自分の持ちものを、できるだけ身ぢかに、ぴったりひきよせるのは、なんとたのしいことでしょう。自分のぬくもりや、自分の考えをまとめて、心のおく深くほりさげたあなに、たくわえるのです。その安心なあなに、たいせつなものや、とうといものや、自分自身までを、そっとしまっておくのです。

やがて、きびしい寒さや、たけりくるうあらしや、長い暗やみが、思いっきりおそってくるでしょう。あらしは、あちこちのかべを手さぐりして、はいりこむ入り口を見つけようと、必死になるでしょう。

でも、どこもみんなふさがっていて、中では、とっくに、こんなときを見こしていた人が、ぽかぽかあたたかにして、ひとり、ゆったりと、くすくすわらっているのです。

秋になると、旅に出るものと、のこるものとにわかれます。いつだって、そうでした。めいめいの、すきずきでいいのです。

でも、ぐずぐずしていて、とりかえしのつかなくならないうちに、どちらにするのか、きめなくてはなりません。



とじこもってしまったのです。家は、すっかり戸じまりされて、まるであき家のように見えました。でも、かの女はちゃんと中にいました。あつい、大きなかべをいくつもへだてた、うちの、いちばんおくのへやにいました。そのへやは、まどさえ、もみの木のへいのかげにかくれて、外からは見えませんでした。

冬もまぢかな、ひっそりした秋のひとときは、寒々として、いやなときだと思ったら大まちがいです。

います。そして、山々のすそは、はるかはてしないジャングルの中にきえています。

ひとりぐらしのフィリフヨンカがすんでいる谷がありました。スナフキンは、これまでに、たくさんのフィリフヨンカのなかまに会ったことがありました。ですから、フィリフヨンカには、めいめい、みょうなくせがあって、ふうがわりで、自分かってなくらしをしないではいられない、ということを知っていました。でも、このフィリフヨンカの家の前を通ったときばかりは、スナフキンも、思わず、はっと息をのんでしまいました。

かきねには、先のとがった、きりっとまっすぐな棒ぐいが、ずらりとうちこんであり、門には、錠がおりているのです。

庭の中ときたら、まるっきりからっぽ。ものほしづなはとりこまれ、まきの山もきえています。ハンモックもないし、庭いすも、庭テーブルもありません。

夏なら、うちのまわりには、よく、しまいわすれたくまでとか、バケツ、うっかりおいたままのぼうし、ねこにやるミルクのおさらなど、とりとめもなくちらかっていて、見るからにたのしくなってしまうものなのに。なにもかもがほうりだされたまま、あしたになるのを待っているなんて、のどかで、人のすんでいる家らしくて、いい気持ちのものなのに。なにしろ、そういうものが、まるっきりないのです。

このフィリフヨンカは、もうすっかり秋になったのを知っていました。そして、うちのおくに、

もどかしく、むちゅうで走りだしました。

走りだすと、きゅうにほっとしました。葉のすみずみまで、のびのびとくつろいでいる、ぽつんと一本はなれて立った木のように、ゆったりした気持ちになったのです。テントをひきはらったあとには、テントのあとを教えるように、そこだけ、かれ草が長方形にかたまって、寒々とのこりました。

あとで友だちが目をさましたら、こういうでしょうね。

「あいつ、旅にいっちまったよ。秋になったんだねえ。」って。

スナフキンは、しずかに、かろやかに、歩いていきました。まわりは、すっぽりと、森につつまれました。

雨がふりだしました。スナフキンのみどり色のぼうしにも、ぼうしとおそろいの、みどり色のレインコートにも、雨がおちてきました。さらさら、しとしとと、雨の音が、あたりいちめんにひろがっていきました。

森にかくれて、すっかりひとりぼっちになってしまったスナフキンは、なんともいえない、なごやかな気持ちになりました。

海のほとりには、山にはさまれた谷間が、いくつもいくつもありました。海のぐるりをとりまいている山々は、海べぞいに大きくまがりくねりながら、岬になったり、入り江を作ったりして

第1章

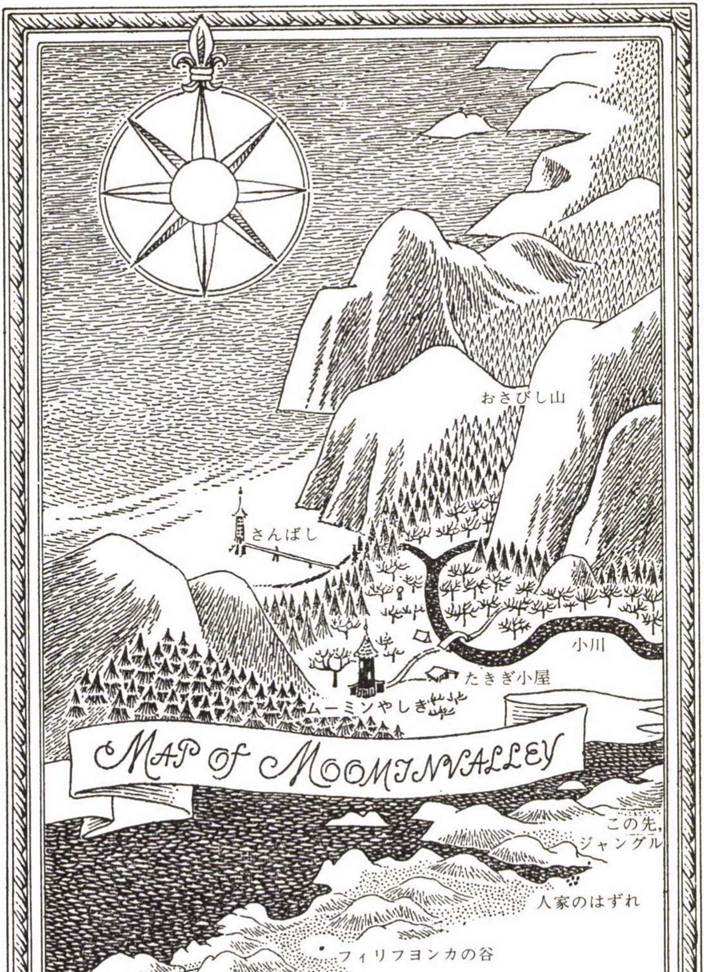
スナフキン，旅に出る



ある朝早く、スナフキンは、ムーミン谷のテントの中で、目がさめました。あたりは、ひっそりしずまりかえっていました。しんみりとした秋のけはいがします。旅に出たいなあ。

　ほんとにふいに、どこもここも、しんみりとしてきたのです。あたりのようすは、もう、なにもかも、いままでとは、がらっとかわっていました。旅に出ようと思いたった人には、いっときいっときが、身のちぢむ思いでした。

　スナフキンは、テントのくいをひっこぬきました。まっかな炭火をけしました。じゃまがはいったり、人にうるさくきかれないうちにと、スナフキンは、リュックを肩にひっかつぐ間も


おさびし山
さんばし
小川
たきぎ小屋
ムーミンやしき
MAP OF MOOMINVALLEY
この先,
ジャングル
人家のはずれ
フィリフヨンカの谷
ムーミン谷

●スクルッタ

なんでもわすれることにしているお年より。ご先祖さまの友だちになろうとする。





●ミムラ

ムーミン家に養女にいった、ちびのミイのおねえさん。なかなかの妹思い。



●ご先祖さま

ムーミン家の大ストーブにすんでいる、ムーミンのご先祖さま。

●ムーミン一家

さて、それから、ムーミンパパ、ムーミンママ、それにムーミンと、ちびのミイたち一家の人々は、どんな活躍を……。



おもな登場人物



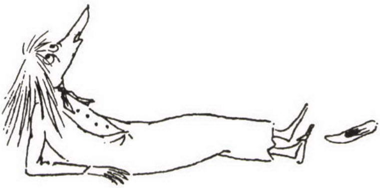
●スナフキン

旅と孤独を愛し、自由に生きたいとねがっている。ムーミンの親友。



●ホムサ

たいへんな、はずかしがりやさん。夜、ねるときに、自分で作ったお話を自分にきかせることにしている。



●ヘムレン

すこしばかり、よわむし。すてきなヨットを持っているけれど、まだ、のって、海に出てみたことはない。

●フィリフヨンカ

ひとりぼっちの、きれいずき。ある日、家の中の大そうじをはじめて、とんでもないことに。



もくじ

SENT I NOVEMBER

Written and Illustrated

by

TOVE JANSSON

ムーミン谷の十一月

トーベ＝ヤンソン／作・絵
鈴木徹郎／訳

講談社 青い鳥文庫

講談社 青い鳥文庫

ムーミン谷の十一月

トーベ＝ヤンソン／作・絵
鈴木徹郎／訳